泡鳴全集

第九卷

目次

夕潮

悲戀悲歌

夕潮

女護海島

序

白帆　は　遙かに　戀しき　ものよ、
をとこ　は　心に　賴み　の　綱か。
大ぶね　入り込む　その　ゆふぐれ　に、
きそひて　出で來る　島人ども　の
化粧　は　あらたの　黑がみ姿。
優しき　手に　手に　持つ　わら沓　を、
湊　の　みぎは　に　置き並べつも、

之をば　うがたん　にひ島もり　の
結べる　小紐　の　しるし　に　すがり、
おのおの　分れて　みさを　を　守る。
ああ、とこしへにも　生きなん　ものが、
一夜　を　いだくは　如何なる　さち　ぞ。
すなはち　頼み　の　とも綱　切れて、
その船　遠くも　歸へらん　日　には、
歎き　の　涙　に　その身　は　なかば
融けて　や　深み　の　人魚　と　ならん。

（二）

飈々乎　として　風　吹き來れば、
みなぎる　太洋　二十重　に　倒れ、
鼕々乎　として　浪　逆まけば、
そびゆる　椰子樹　も　かゞみて　恐る。

岸べ　に　あらぶる　獅子　とは　何ぞ。
見よ、見よ。巖石　ぬれにぞ　濡れて、
かしら　を　擧ぐるは　活くる　に　似たり。
この島　まとふは　如何なる　蛇　ぞや、
しり尾　も　示めさず　動くに遇へば、
天柱　やすき　を　これ　疑はる。
幾千百丈　みな底　深き
神秘　の　奥　より　ゆるぎも出でつ、
ああ、茫漠たる　そら　をば　仰ぎ、
いと　さゝやかなる、汝、海島　よ。
なが身　を　護るは　アダム　の　子ら　か、
はた又　いづくの　流人　が　すゑ　ぞ。
靜中　動　あり、動中　靜　の、
寂寞　却て　一しほ　深し。
山にも、川にも、森にも、野にも、

住へる　ものら　の　影　だに　見えず。

（二）

山々　みどり　の　眉　をば　染めて、
白きは　御空　の　ひたひ　に　殘る。
流れ　は　香樹　の　にほひ　を　乘せて、
ゆるくも　走りて　おほ海　に　入る。
野べ　には　鳥　あり、その名　を　知らず、
自由に　眠りて　羽がひ　を　やすむ。
大獸　小畜　小みち　に　遇へど、
その牙　その爪　用　をも　爲さず。
喬木　灌木　こずゑ　は　たわわ、
露けき　果物　食ふに　まかす。
空氣　は　稀なる　力　を　帶びて、
天なる　御門　ゆ　涼しく　流れ、

かゞやき照らすよ、小草の色の
靑きはあまねく地上に敷きて、
文化の足跡少しも受けず。
遠きも近きも、左も右も、
自然のけしきは活き活き踊る。
ああ、これ仙境——無名の主の
靑牛ゆたかに闤より逃れ、
悠々天壽を終へにし陸か。

（三）

晝夜は分れてこの地を見舞ひ、
風雨と戯れ、無手にて歸り、
變化は隱れてこゝにも來れど、
歷日あまりにもの長ければ、
天數地數の八卦にのらず。

剛柔 いまだに 交はらざれば、
難 をば 生ぜぬ 有様 なるか。
物皆 おのづと 成り出でぬれば、
遠近 ともども 鋤鍬 取りて、
たがへす 勞苦 は いづこに ありや。
うれひ の 主體 を とゞめぬ 限り、
造化 の 所有 に 身づから なやみ、
火宅 を 現ずる ものら は いづこ。
有形 の ほだし を 遙かに 去りて、
無形 の 位 に 融合する か。
咎なく、悔なく 思はず、爲さぬ、
草木 に 牝馬 の いのち を 繋ぎ、
優しく 健き は かげ のみ 走る。
ああ、生々の理 孤獨 と なりて、
いつまで、化育 の いといと 高き。

對象(めあて) を 別ちて 男子 と 成さぬ。
雲 行き 雨 ふる この 島山(しまやま) に、
六龍 遂には 顯はれざりや。

（四）

そも 何もの ぞや、音樂 の ごと、
なみ風 靜まる 刹那(せつな) と 刹那、
そのひま かすめて 幽かに 聽ゆ。
山 には その山、川 には 川の、
おのおの 發する 御魂(みたま) も あらん、
鳥 には その鳥 獸(じう) には 獸の、
それぞれ 固有 の こわ音 も あるを。
そも 何もの ぞや、音樂 の ごと、
なみ風 かすめて 幽(かす)かに 聽ゆ。
その 方向 さへ 確とは わかず、

たつみ　に　向へば　たつみ　に　渡り、
いぬゐ　に　向へば　いぬゐ　に　ひゞく。
魑魅（ちみ）　罔兩（もうりやう）　とは　これをや　云はん。
見よ、見る　限りは、とこ世　の　夏　の
枝葉　は　やわらか、その水　清し、
精魂（せいこん）　豈、また、若やがざらん。
剛健　頗る　自然　に　かなふ、
椰子の樹、棕梠の樹、あなゝす、ざぼん、
芭蕉　の　葉かげ　に、蘇鐵　の　もとに、——
たとへば、あれ野の　かしこに　こゝに、
虫の音　一時（いちじ）に　高まる　如く、——
恨む　か、歎く　か、かこつ　か、泣くか、
悲しく　哀れに　聽えも來たる、
調べ　は　をちこち　一つの　ひゞき。

（五）

ギリシヤ　の　いにしへ　船人ども　を
いざなふ　島根　の　それにも　似てよ、
へだてゝ　聽きなば　怪しき　ひゞき、
めあて　を　定めて　近づき　見よや。
住民　ありけり——サイレン　の　ごと、
美なる　は　をんな　の　機織りすがた。
前者　は、オルフアス　琴引き　の　爲め、
巧み　を　耻ぢ入り　移石　と　化しぬ、
後者　は、却て、海　より　來たる
慰籍　をば　求めて　心　は　亂れ、
炎熱　烈しき　樹　の　かげかげ　に、
無聊　に　倦みて　ぞ　織り出す　布　の、
長きが　如くに　夏の日　盡きず。

まなこ を 横ぎる 梭(をさ) の 手 ゆるく、
逃れて 出づる は 夢路 の うつゝ。
せめては そのまゝ 眠りに 入らば、
目(め)ざめて 苦しき 煩悶(もだえ) も なきに——
かよわき 力 の 渠等 ぞ あはれ。
うつゝ と 夢路 の 境 に ありて、
われから とめ得ぬ 歌 をも 杼(ひ) をも、
ねむげに 合せて 又 くり返へす。
『はた地(ち) は 織れども、着る人 あらず、
着る人 あれども、をみな子 ばかり。』

（六）

日本 の 荒武者 爲朝(ためとも)、むかし、
この根 を 襲ひて、美なるを 多く
小舟 に 引きゐて 南 に 去りぬ。

これ、この處 の 唯一 の 歷史。
祖先 は いづれぞ。開祖 は 誰 ぞや。
文明 あかるき 光 を 惜み、
學術 その口 つぐみて 云はず、
木訥 平易 は、神代 の 如し。
小波 に 尋ねば、小波 は 隱れ、
大浪 招けば、大浪 にげん、
こずゑ に 訴へば、こずゑ は ゆらぎ、
木の實 に 語れば、木の實 は 落ちん。
ああ、單調子 の 安逸、安臥、
無理想、無何有 に 勞れも果てつ。
小蜘蛛 の 織り爲す 網に なぞらへて、
芭蕉布 作るが 手足 の 動き、
なほ 飽き足らざる 心 の 糧 よ——
いづこの 果より なぐさめ 來たる。

運命 卜する 卦は たゞ 潜み、
牝馬 は 空しく いな嗚く ばかり。
島民 とこ世に その數 あまた、
柔順 さながら 配偶 を 得ず。
さびしき その身 を いだけば、胸に
燃え立つ ほのほ の 暑さ に 堪へず、
南 の 岸べ に 冷氣 を 呼べば、
天地 は かをりて 感ある 乙女。
ああ、また 同性、同性 を 產む。

世外の獨白

一　磯姫の曲

岩にあら波音ぞ高く、
朝日のぼりてこゝろ寂し。
われはいづこの果を來たり、
われはいづこの果に行くや。

かぎり知られぬ濱は、東
西にのび行く晝の如し。
みどり黑がみ白き越えて、
せなに亂るゝあらし烈し。

ぬれし　砂地　に　わが　素足　の
落ちて、一すぢ　引く　は　うれひ、
遠き　波　より　消えも行きて、
更らに　よせ來る　波　の　うねり。

われは　友　なく　此世　の　岸　に
立てば　かなしみ　うしほ　成して、
あはれ、いづこの　果　を　來たり、
あはれ、いづこの　果　に　行くや。

胸　も　どよめく　海の音　の
凝りし　いはほ　の　上に　すはり、
沈む　ゆふ日　の　光　見れば、
ひとり　わが身　の　かげ　ぞ　薄き。

見よや、すなどる人 の 子ら は、
かたへ よぎりて 家路 行けど、
われは 磯姫、ひとり 殘り、
わらひ さゞめく 目 には 入らず。

夜の氣 落ち來て この世 つゝみ、
萬物 ねむり に 入らん 時も、
われは とこ世 に こゝろ 醒めて、
沖 の ふるさと 胸 に ゑがく。

あはれ、深み の あわび貝 よ。
なれが 住まひ は くらく あれど、
かなしみ も なく、憂さ も 見えず、
あるが まゝなる すがた 戀し。

われも 生れ は 海路(うみぢ) なれど、
母(はゝ) を 見知らず、父 を 知らず、
めぐる 月日 の しほ に 浮きて、
かくも 夜る晝 やすき を 得ず。

岩 に あら波 音 ぞ 高く、
朝日(あさひ) のぼりて こゝろ 寂し。
われは 深み の 底 を 出でゝ、
またも うれひ の 深き 知りぬ。

二 無性斗神

ああ、われ、大地 の 御胎(みはら) に ありて、
をのこ と 生まるゝ わづらひ 免(の)がれ、
ああ、われ、御つち を 母 とし 出でゝ、

をみな　と　歌はる　恥ぢ　をば　避けつ。

見よ、世　の　强きは、夜を　日に　繼いで、
名利　の　爲めには　おのれ　を　忘る。
見よ、世　の　弱きは、あしたに　ゆふに、
おのれ　を　折りても　かたち　に　耽ける。

見よ、世　の　猛きは、春　また　秋　に、
虎の子　熊の子　輪廻　の　もとゐ。
見よ、世　の　美なるは、年　また　年に、
直立種族　の　種　をば　殖やす。

人　こそ　知らざれ、その子　の　春には
大なる　毛もの　の　這ひあがれる　を。
人　こそ　知らざれ、その子　の　手には

毛深き 前足 つきまとへる を。

いな、いな、知らざれ、その子 の 父母 も
もとより 一つ の 道 をば 這ひつ、
月日 の 如くに 今 分るれど、
もと これ 谷間 の しゝの子 猪の子。

互ひに まろびて いだくは 何ぞ、
おのれ の 生みにし おのれ の 姿。
影 より 影 をば 樂み 活くる
人間、あはれや、その身 を 知らず。

ああ、この 燦たる 世界 に ありて、
なほ且 人の世 いかでか 醒めぬ、
見にくき 髮の毛 かしら に のせて、

いつまで　まよひ　の　御殿（みとの）　に　ねむる。

見よ、わが　むくろ　は　大地　に　成れど、
恥ぢ　あり、名ある　の　きぬ　をば　着けず、
小暗（をぐら）き　森　より　踊りも　出でゝ、
われ　をば　いだきて　御空（みそら）　の　きはみ。

ゆふべ　に　ほゝゑむ　わが　かゞやき　は
しゝ　射る　人ら　の　眞弓　を　照らし、
朝げ　に　またゝく　わが　まなざし　は
軒端　に　つるせる　獲物　に　うつる。

あはれや、人間、その日　を　狩りて、
明日（あす）　はも　わが矢　に　うたれて　死なむ。
兩性　相待つ　その　夢の間　は、

再び　わが目　に　觸るゝ　を　避けよ。

三　嫦娥の恨

西水(せいすゐ)　また　行く　三百五十里、
かの　西王母(せいわうぼ)　ぞ　わが恨み　なる。
玉山　出だす　は　璧(たま)　のみ　なりせば、
　磨きて　わが手　に　卷くべき　ものを、
不老(ふらう)　の　くすり　に　不死なる　かをり　ぞ
わが身　を　あざむき　あやまたしめぬ。

かの神　蓬頭(おどろ)　の　姿　を　あらはし、
　くすしき　賜物　わがつま　羿(げい)　に
投げし　その夜　ぞ、われ、世　を　思へば、
世人(よびと)　も　同じく　その　伴がら　か、

夕　潮

獸　にも　等しき　髮の毛　いたゞき、
死ぬれば、長き尾　示めす　と　見えぬ。

妙なる　世界　ぞ　ひたすら　くゆりて、
いと　ほがらか　なる　つき夜　の　如し。
わが世　を　忘れつ、わがつま　忘れつ、
また　おのれ　を　さへ　忘れて、あはれ、
たゞ　かの藥　の　節匣　を　いだきて、
高ぞら御殿　に　逃げ　こそ　來つれ。

御空　は　燦爛、星、花　降らして、
眞晝　の　光　に　錦　を　飾ざり、
黄金　まばゆき　うてな　の　うち　には、
手枕　しばし　の　夢、幾むすび。
さは云へ、わが魂　たゞ　一とき　だも

やすき を 得たる の ためし は あらず。

あま飛ぶ おほ鳥、小鳥 の 羽がひ は、
羽ばたき 毎にも 眞玉 を はたき、
碧緑 は 露 とも 散り布く 晴れ庭、
あまたの 腰元 薄ぎぬ にほふ。
さは云へ、わがたま、たゞ 一とき だも
やすき を 得たる の ためし は あらず。

萬燭 皓々 しら雪 はぢらひ、
夜 を さへ 晝間 の 不老 の 宮 の、
とばり は 紫、その色 深くも、
かをりて おぼゆる 不死なる いのち。
さは云へ、わがたま、たゞ 一とき だも
やすき を 得たる の ためし は あらず。

ああ、汝、しら雲――もろき は しら雲。
却つて 戀しき なんぢ の すがた、
五色 の 光 に かさなり 合ひつゝ、
先きなる 影 より 消え行く さま は、
たとへば あかつき、熟睡 の 床 より、
暖夢 つぎつぎ のがるゝ 如し。

わが身 も、歡樂 あまき が 如くに、
ほろびて またまた 生まるゝならば、
寂しみ 非想 の 天 まで 積むとも、
苦しき 思ひ の とゞまるまじを。
わが壽 は、三千三百歲 をも
刹那 に かぞへて、なほ 盡きざる よ。

涙 に あふるゝ 下界 を 離れて、
　却つて 苦しみ 一しほ 増しぬ。
なまじい 久遠 に のぞみ を 求めて、
　得たる は 空しき つき夜 の くらゐ。
澄みては、むらがる とこ世 の 暗黒 を、
　こゝろ は 孤寂 の あし場 に 迷ふ。

無限 の 刹那 の その數 かぞへて、
　わが胸 おそれ に おのゝき 震ひ——
見よ、やみ 遠くも 見え透く 雲間 ゆ、
　聲なく 刻める うれひ は 迫る。
ああ、この いのち は うつろ の 酒甕、
　永劫 わが魂 ねむり を 盛らず。

西水 また 行く 三百五十里、

かの　西王母（せいわうぼ）　ぞ　わが恨み　なる。
玉山　出だす　は　璧（たま）　のみ　なりせば、
磨きて　わが手　に　巻くべき　ものを、
不老　の　薬　に　不死なる　かをり　ぞ、
わが身　を　あざむき　あやまたしめぬ。

海邊雜吟（上）

一　明暗

君と　ふたり　たどりし
　濱べ　に　出で、けふ、又
ゆるき　浪　を　ながめて、
　こゝろ　動く　夕がた。

君が　行きし　ふな路　は
　岩井の鼻　より　消え、
遠き　富士　の　すがた　を
　夜ぎり　とざす　小入り江。

夕　潮

つかれ　歸る　漁夫ら　の
　船　は　見えぬ　櫓の音、
あはれ、寂として、たゞ
　有るは　月　と　わが身。

ひかる　海　を　渡りて、
　黑み　來たる　ぬる風
のびて　立てば、胸　には
　悲喜　の　おもひ　かきまぜ。

廣く、明く、小暗き、
　噫、この海　の　おも　見よ、
君　と　むかし語り　の
　戀　も　斯の如き　よ。

二　海のなげき

富士　の　あなたに　夕ばえ　消えて、
せな　に　夜神(よがみ)　の　迫りぞ來たる、
わが身　ひとり　の　濱べ　に　立ちて
海　の　なげき　を　竊かに　聽けば、
これも　いためる　有情(うじやう)　の　言葉——

『日々に　思へば　思は　まさる、
まさる　思　の　深きを　つつむ
胸は、あらし　に　かき亂されて、
やすむ　ひまなき　迷の影　の、
暗き　うれひ　は　いのち　の　底に
淸き　眞珠　の　眞玉(またま)　を　産みて、
人に　示さぬ　この　祕め事　よ。

『秘して　つゝみて、つゝみて　秘して、
ゆるく　滿ち張る　浪より　浪に
天は　うつれど、照る日　は　照れど、
とけて　流るゝ　光　の　奥　は
いつも　やみ路　の　力　に　振ふ。
夜々　の　星々　その數　あまた、
沈む　とし月　限りも　知らず。

『みどり』混沌　よどむ　が　うちに
活きて　踊りて、且、悲み　の
過去　も　一つに、未來　も　こゝに、
今　を　盛りの　滿干　の　潮　は
潮　の　いづこに　はてし　を　得んか。
亡ぶ　ものこそ　うらやましけれ、
いつか　心　の　憂さ　をば　晴らす。

『やまと建（たける）が　立花姫　を
近く　沈めて、遠くも　いにし、
昔がたり　の　勇氣　を　鼓（こ）して、
いたく　忍べは　しのぶに　餘る。
ゆふべ　寂しく　ひろがる　おも　の
恨み、無限　の　浪間　を　渡り、
淺き　みぎは　に　寄せては　返す。』

あはれ、とこ世　に　若ゆる　海よ。
海よ、わが身　と　なやみ　を　分て。
あたり　靜かに、山々　黒き、
空に　殘るは　三日月（みかづき）　ばかり。
『戀』と　眞砂　に　指　もて　書けば、
白き　小浪　は　手　を　さし延ばし、
さツと　ぬぐひて　引きしりぞきぬ。

三　君を思ひて

君を　思ひて　濱べ　を　行けば
濱の　眞砂　の　數　さへ　かさむ。
わが身　も　かくや　碎け行く。

君を　思ひて　なぎさ　に　立てば、
浪の　うねり　の　道　こそ　あはれ。
わが身　も　かくや　消えて行く。

君を　思ひて　三日月　見れば、
暗き　磯わ　の　音にも　響く。
わが身　も　かくや　細り行く。

行きも　やられず、去りもし　えせず、
まどふ　心　に　いさり火　もゆる。
　わが身　も　遠く　浮ぶ身　か。

君　を　思ひて　筆すみ　執れど、
苦吟　一夜さ　詩の句　を　爲さず。
　ああ、われ　若き　戀　や　する。

四　わが影法師

われ　行けば、かれも　行く　なり、
われ　立てば、かれも　とゞまる。
月かげ　に、夜　の　ごと　黒く、
投げ出だす　二間　の　法師、
浪　あらふ　砂　平らかに

よこたふる　二間　の　法師。
振ると　見ば、振るへ　こそ　すれ
ゆると　見ば、ゆれても　見ゆる。
その頭　潮に　うつして、
潮　いまだ　浸し能はず。
その足　に　蟹　這ひ寄れど、
蟹　かつて　攀ぢ　もし　得せず。
すそ　長く　引くは、貴とき
神わざ　か、はた　海靈　か。
いづこなる　國　の　秘密　を
身に　もちて、ひそみや來けん。
たゞ　無言　われに　從ひ、
松原　を　見えつ　隱れつ
わが宿　に　のぼりぞ來たる。

五 いさり火

おほ浪 靜かに 眠りに 入りて
ゆめ路 に かゞやく 光 の 如く、
小星(とぼし) の つき夜 に まぎれて 浮ぶ
その火 よ、何もの、見えては 消ゆる。

み冬 の 夜 ならば、氷 を 踏みて、
山 より 出で來る 魔性(ましやう)のもの が、
藁火 を ともして 海べ を 渡り、
獲物 を あさる に さも 似る影 よ。

三更 ふけ行く 自然の あなた、
無 よりや 產るゝ 世界 の 如く、
明滅 起滅 の 境(さかひ)に ありて、

なほ且　燃ゆる　は　如何なる　熱ぞ。

すなはち、東　の　戸びら　ぞ　なかば
開けて、眞白き　馬毛(うまげ)　を　吐けば、
おほ空　別れて、浪間　を　遙か
歸るは　小黑(をぐろ)き　釣り船、小船。

先なる　ひゞき　も、あとなる　音も、
神矢(かんや)　の　如くに　亂れず　寄り來(く)。
なぎさ　に　立てるは　娘　か、妻　か——
みよし　の　左右　を　いだきて　迎ふ。

六　蟹　に　寄　す

夏　の　眞晝(まひる)　暑き　を

海に　去るは　大いを、
　寄せて　返す　浪間　に
　のがれ出る　は　この蟹。

輕く　砂　を　よこ這ひ、
苦　をも　知らぬ　行きかひ、
　大いなる　を　あざけり、
　ちさき　まゝに　氣　滿てり。

世にも　奇しき　餌　を　食み、
ちから　强き　小ばさみ、
　なれ、藝術　に　身を　入れ、
　立てば　玉　を　こそ　切れ。

ひろき　濱　を　迷はず、

長き　日　をば　あせらず、
　人目　遠き　ほそ穴、
　おのが道　を　追ふ　かな。

七　高岸沈思

（鷹太郎木村氏に）

高き　岸べ　に　うち出でゝ
洋々　の　浪　見渡せば、
秋　の　初風　身に　吹きて、
歸京　の　こゝろ　動く　かな。

見よや、大海　目もはるに
あま照る　光　照らすとも、
威名　天下　に　赫々　の

偉人 に 比して いづれ ぞや。

見よや、白雲(はくうん) 北に 湧き、
なか空 さして 登るとも、
代々 の 亂軍 きり拔けて
その名 を 擧ぐる 雄者 あり。

如何に 沖べ の 暴風 は
阿修羅(あしゆら) の 如く たけるとも、
一夫 をどつて 泰平 の
政治 を 亂だす たとへ のみ。

怒濤 二十重(はたへ) に 捲き倒れ、
大地 の もとゐ ゆするとも、
立ちて 靜かに ほゝゑむ は、

いづれ　の　流　の　哲士　ぞや。

見よや、よろづの　神々　を
産みてし　うしほ　渦　と　化し、
めぐる　無間　の　上を　さへ
ひと葉　の　船は　渡る　なり。

あはれ、自然　を　のり越えて、
自然　に　歸る　ものは　誰ぞ。
人は　むくろ　を　解脱して、
あらたに　人の　わざ　を　知る。

いまだ　功名　投げうたず——
いな、いな、骨に　とほる　まで、
海　の　うしほ　の　若やぎて、

いかれよ、鳴れよ、とゞろけよ。

高き岸べにうち出でゝ
洋々の浪見渡せば、
あまた有情の泡立ちて、
君住む京ぞ忍ばるゝ。

海邊雜吟（下）

一朝出船

御富士のいたゞきおもてを拭ひ、
たな引く貫抜き左右に搖れば、
世びとは短き夢より醒めて、
濱邊は忽ち歡呼のひゞき。

空氣は新たのいのちを傳へ、
眞砂は平らか清きを誇る。
男波は馳せ來つ、女波は招き、
出船のよそひを待てるに似たり。

もと、これ、鍛へしからだと腕に、
海をばおのれの家とする子、
もと、これ、手馴れしたくみに依りて、
その足輕くも作れる小船。

『えいや』のかけ聲ちからを呼びて、
押し出す獵船、勇める親子、
ちいさき世界に朝日を浴びて、
浪間の奧へと遠くも消えぬ。

二　朝の夢

夜網引(よあびき)　の　朝ぶね　着きぬ、
　勇む　は　たゞに　魚　ならず、
人々　の　罵る　聲　に、
　寄せ來る　波　も　きほひ　あり。

夜もすがら　あさりし　獲物、
　小砂(こすな)　の　上に　うち撒けば、
跳ね飛ぶ　は　大鯛　小鯛、
　甲頭魚(ほうぼう)、三島、かながしら。

いろくづ　に　賑ひ初むる、
　見よ、大濱　の　西ひがし、
夕　潮

左には　サフラン　の　雲、
　右には　富士　の　新よそひ。

この世界　唯一　の　寶、
　いよいよ　光　放つ　をば、
相應しき　値踏み　や　せんと、
　いづこよ　來たる　人　あまた。

朝日　照る　砂山　越えて、
　丸籠　擔ぐ　かげ　長く――
その昔、ユダヤ　の　野邊　を、
　水がめ　運ぶ女　の　如し。

つぎつぎへ　現はれ　來たる
　その影　計へ　立たずめば、

物思ふ　わが身　は　今や
　太古（たいこ）　の　夏　の　夢　に　入る。

三　あしたの神

富士　の　いたゞき　赤らむ　は、
あした　の　神　の　露拂（つゆはら）ひ、
東　の　網　を　地引き　する
網　に　明け行く　濱邊　かな。

四　秘　戀

浪　の　上に　日　の　かげ、
落つる　朝　の　すゞ風。
　われは　濱べ　さまよひ、
夕　潮

よべ の 夢 の あと追ひ。

砂 の 上に 君が 名、
かさね 書くも おろかや、
　とても 遂げぬ 秘め戀、
　白き泡 の よそほひ。

海に 浮かば、この胸
獲物 なき の 釣り船、
　陸に わらば、この魂
　行く手 知らぬ あり樣。

見えて のぼる いとゆふ、
あはれ、熱き 血 を 吸ふ、
　われは 身をば 横たへ、

けふも　いだく　小閭へ。

五　倉　吉

倉　が　お歳　は　まだ　十六　と、
三十二三　の　澄ました　男、
われも　詩　に　飽く　時あらば、
君が心　に　歸りたや。

六　夏の眞晝

夏　の　眞晝、譬へば
白き　をんな　の　むくろ、
立てば、四尺　七寸、
光　放つ　眞うつろ。

夕　潮

みどり　の　髮　ふくよか、
　熱き　風　に　解くれば、
燒けし　砂の上　にも
　ありき　や、誇(ほこり)　の　餌ば。

玉　の　如き　心　の
　竪に　延べし　その影、
世びと　の　目に　うつらで、
　あまつ　御空(みそら)　追ひたげ。

日　より　生れ、その日　に
　焦れ行く　は　なが戀、
幾萬億里　のぼりて、
　身　をや　搖する　かげろひ。

あはれ、どよむ 深み を
　涌きぞ出でし テチス よ、
わが目 映(は)ゆき 間 に、
　なが 御(み)すがた 見たるよ。

七 夕べの神

とんぼ 釣る子 の かしら をば
夕べ の 神 は そと 越えて、
そよげる 蘆 の 一葉 より
おのづと 暮るゝ 河邊(かはべ) かな。

八 高安月郊君に

寄せては　返す　白浪、
ひゞき　も　更けて　三日月
横さに　照らす　海のも、
平らか　なるよ　わが胸。

凄き　を　獨り　忍びて、
光は　靑く　消え行く
心の空　に　住まへば、
濱邊　も　遂に　みな底。

かの世　に　耳　を　澄まして、
亡き　人々　を　招けば、
かたち　は　見えず　その聲、
至るに　遠し　その岸。

立たずむ 足 を 洗はれ、
はじめて われに 歸りぬ、
さればぞ、西の都 に、
清雅(せいが) の 詩人 今 如何。

九 遠つ島根

（有明君に）

遠津海(とほつみ) 遙かに かすみ に 入り、
かすみ の 奥 より かしら を 擧げ、
沈思 に 耽りし その ほこり を
ほのかに 示めす か、大島が根。

吹き來る しほ風 なまぬるくて、
南 の 熱さ を こなたぞ 知る、
夕 潮

七重(なゝへ)の　しき波　寄せ來りて、
海路　の　響き　を　こゝにぞ　聽く。

戀しの　姿や、それ、靜かに
ひじり　が　御胸　に　映れるごと、
その身　の　なかば　を　深み　に　籠め、
みどり　の　冠　を　御空(みそら)　の　はて。

ああ、その　みどり　は　轟く浪、
はためく　御空(みそら)　の　間に　浮き、
眠れる　如きの　その　島根　を
ゆふ靄　包むに　まだ　早き　よ。

行きにし　御靈(みたま)　の　住ひ　に　似て、
平安(やすき)　の　溢るゝ　墓場　や　ある。

世の物思ひの群がる時、
心の船出し、君と行かん。

十　御富士

（花外君に）

わが世のつとめをけふも終へて、
濱邊にうち出で富士を見れば、
御富士は寂しきかしら擧げて、
わづらひ解脱の神に似たり。

ゆふ日の光は遠く沈み、
その薄むらさき雲を疊み、
ああ、なぎ渡れる深き空に
輪廓正しき峰のさまよ。

ゆるがぬ　力　を　ゆふべ　に　染め、
いよいよ　きわ立つ　その　御姿、
とゞろく　水際(みぎは)　に　心　澄めば、
いよいよ　貴とき　その　居ずまひ。

高き　に　浮びて、とこしなへ　の
あま照る　やすらひ、實(げ)にも　それか。
ゆふぐれ　靜かに　隱れ行きて、
わが身　に　殘す　は　いこひ　の　影。

われ、今、茅ケ崎、詩神　追ひて、
心　を　小暗(をぐら)き　波　に　碎く、
君、去年、甲州、山路　行きて、
御山　の　すがた　を　如何に　見しや。

あゝ、世の歡樂

あゝ、世の　歡樂　あまきに　過ぎて、
夢路(ゆめぢ)に　またがる　春、その　うつつ、
遠きは　薄もや、近きは　花の
ねむりか、心の　まなこ　を　めぐる。

それ、たゞ　しきりに　降る　ほそ雨　の
窓　には　そゞろ　の　戀　もや　秘めん。
それ、たゞ　曇りて　吹く　やわ風に、
浮き立つ　思　の　いこひ　や　住まん。

あゝ、とこ靜か　の　春、その　うつつ、

夕　潮

うつろ　の　まぼろし　あしたに　破ぶれ、
大地　は　音なき　ほろび　の　かげ　を
一ひら　胡蝶（こてふ）　の　羽がひ　に　まかす。

若き身　もたげて　わが世　を　追へば、
ああ、亡き　乙女（をとめ）よ、見えては　消ゆる。

湖畔の靜思

（一）

琵琶　の　うみづら　風　なぎて、
雲　一片（ぺん）　の　往き來　だに、
悟り　を　得たる　山人　の
やすき　に　增して　見ゆる　かな。

青き　御空の　日の丸　も
融けては、こゝに　形なく、
高き　山邊　も　靜きては、
その　こゞしさ　を　失ひつ。

淺きに　似ても、淺からで、
底に　達せぬ　天の色、
暗き　が　如く、暗からで、
うちに　輝く　その光。

神代　分れし　その昔、
寂しく　照らす　エーテル　の、
上下　左右　を　現はさで、
空に　滿ちけん　有樣　よ。」

追ふて　限り　は　知らねども、
廣き　が　うちに　平和（へいわ）　あり、
つかみて　手　には　殘らねど、
平和　の　うちに　いのち　あり。

歌　の　ひぢり　が　筆取りて
ながめし、水　の　とこしへ　に
よどむ、力　の　うしろ　には、
深き　御（み）かげ　ぞ　動くなる。

（二）

われ、端なくも、詩の界
乘りて　來りし　一葉舟（ひとはぶね）、
輕く　浮びて　物もへば、
うれひ　に　延ぶる　いかり綱。

下に 向ひて 沈み行く、
長き おもり に 底 觸れ て、
をどり出づる は、龍の宮、
龍 が さゝぐる 玉 ならず。

また、かの 燃ゆる 思 をば
眞あか の 紐 に つなぎ合ひ、
この世 の 苦 をば 逃れけん、
むくろ の ひとつ にも あらず。

はた又、深き 岩かげ の
下界 に つゞく ほら穴 に、
紫紺 の 實 をば 結ぶ てふ、
萬年青 の 若葉 それならず。

探ぐる　目あて　の　あらば　こそ、
かぢ　取り直す　身　にも　なれ、
浪の　まゝなる　わが思、
迷ふ　が　まゝの　西、東。

混沌　いまだ　開けずば、
昔　の　さまに　歸る　なり、
無念　無想　の　海の上、
たゞよふ　われも、はた　舟も。

（三）

水　の　おも　より　立ち登る
あした　の　虹　の　棚引かば、
晴れし　御空　の　長橋　は

長等（ながら）の山 を 越えん とし。
野州（やす） の 松原 ゆふぐれ の
虹 あらはるゝ その時 は、
落ち來る 雁 の 列 ならで、
堅田（かたゞ） の せと を うち渡り。

香取が浦 の かぢ枕、
浮き寐 の 鳥 の 羽根 の ごと、
七色（しよく） あびる 小蒸汽 の
一つ 二つ も 靜かなり。

ああ、なやみ ある われも 亦、
まなこ と 共に 延び行きて、
くれなゐ 薄き 綾絹（あやぎぬ） の

つゝむ　が　まゝに　消えん　かな。

（四）

われ、長濱　の　岸べ　より、
西　に　うすづく　日　を　見れば、
その　光線　に　送られて、
みよし　を　立つる　帆かけ船。

その影　小さし、遠ければ、
その足　遲し、廣ければ、
その聲　聽かず、隔たれば、
その帆　光るよ、白ければ。

たゞ　沖合　に　とゞまりて、
行くか、歸るか、さらがらに、

別れ を 惜む わが友 の
高き 岡べ に 立てる ごと。

ああ、彼 一歩、われ 一歩、
進むに つれて、わが體(たい) も、
みぎは の 蘆の葉 に 乘りて、
引かれ行くらん こゝち する。

（五）

あはれ、寂(さび)しき 海のおも、
自然 の さかひ 薄らぎて、
限りなき 世 の 悲しみ の
やわらぐ、奥 ぞ 忍ばるゝ。

ああ、思ひ見ば、こゝも 亦、

御法（みのり）に　あかき　浄土院、
『眞如（しんによ）』の　月　を　抱きつゝ、
最澄（さいちよう）　眠る　ところ　かや。

あはれ、ゆかり　は　紫　の
藤波　よする　樹のかげ　に、
『知止（ちし）』の　道理　を　見し人　の
神　と　交はる　書院　かや。

ああ、また　思ふ　草まくら
旅　の　ころも　を　脱ぎ更へつ、
おのが　俳句（はいく）　を　樂しみて、
翁　の　ゐます　いほり　かや。

（六）

げにも、妙(たへ)なる　玉垣　の
うちに　まします　御姿(みすがた)　よ。
ああ、貴しや　この社、
誰が　祭りけん　その主(ぬし)　よ。

圓き　かゞみ　は　懸け無くも、
おもひ　に　映る　さかき葉　や、
水　は　流れて、而も　亦、
かるゝ　時　なき　わだつみ　よ。

いつの世　出でゝ、千斤　の
おもき　袂　を　ひろげけん。
いづこの果　に、たゆみなき
羽がひ　の　裾(すそ)　は　及ぶらん。

人は　強いても　定まり　の
目あて　を　好む　ものなれば、
なが名　に　よりて、忽ちに、
異なる　魚　を　呼び起し。

至る處　に、なが足　の
見えで、這ひ行く　おもかげ　を、
みのる　田畑　に　侵し入る、
大蛇　の　如く　歌ひ出で。

あした　ゆふべ　の　眺め　よく、
澄みて　ゆかしき　なが面　を、
辨才天　に　なぞらへて、
竹生　の　島　に　たてまつり。

月の夜長に鳴る浪の
響を糸にたとへけん、
なが圍りをば繪がき見て、
琵琶湖と唱へ始めけり。

（七）

見よ、夏の頃、その水の
色白ければ、雨となり、
冬、雲湧きて、天上の
山また山は雪模樣。

比良八講の風吹かば、
今も法華經となへつゝ、
舟人どもはあらたかの
天狗が岩をかしこみつ。

ああ、恐るべき比叡おろし、
北の舞ひ行く浪立たば、
熱き火焰と這ひ延びて、
散らふしぶきは燃ゆること。

見よや、白浪十重二十重
倒れて、起きて、高まれば、
あらしになやむ大木の
天にさからふ勢よ。

さはさりながら、大わだの
奥なるわだに比べ見よ、
二八月の荒れ時も、
神の無聊をいやすのみ。

（八）

洋々たる　あわ海　の、
ながれよどみし　その水　よ。
重き力　は　三井寺　の
鐘　に　廣がる　その胸　よ。

神秘　は　こもる　しき浪　の、
深き　御かげ　に　いのち　あり、
太古　の　さま　の　あけ暮れて、
寂しき　うちに　光　あり。

嗚呼　琵琶のうみ、風　なぎて、
紫の色　浮ぶ時、
人　に　譬へば、とこしへ　の

やすき を 得たる こゝち かな。

圓き石

この世 の 苦み をも
かつて 甞(な)めぬ わが友、
昔に 歸る こゝろ、
之も 圓き 石ころ。

樂しき 空(くう) に ありて、
嗟、土を 踏まぬ 足手、
　高く 飛ぶも 飛ばぬも、
　凝りて 結ぶ あま雲。
ネビユラ 冷え氷りて、見よ、

照らす 小星（こぼし） の 月夜、
圓き に 就く 靈 あり、
自然 の まゝ その態。

いまだ 憂ひ 悲しみ
もつれ出でぬ この君、
卷くが まゝの から糸。
歌ふ ものは、赤人（あかひと）。

佛教（ぶつけう） こゝに 來らず、
人、死 の 味 を 知らず、
花 の かげに 枕し、
眠むる さまを 譬ふらし。

暑き 時も いくとせ

過ぐる　家の　庭もせ、
　寒き　時に　會へども、
道に　何の　毛ごろも。

取りて　見えぬ　その裏、
打てば　堅き　そのつら。
　過去　を　問へど、示さず。
口　なければ、その答。

棄つれば、また、輕らか、
まろぶ　ことも　たまさか。
　行ゑ　問へど、語らず、
　なさけ　無きか　然らず。

雨に　ぬれて、忽ち、

乾くに　早き　かたち、
涙　もろき　ものには、
住ひ　易き　この庭。

雲　無心にして　出で、
天に　かざす　ゆふしで、
之は　立つ　を　愼み、
獨り　神や　見る　意味。

太古　の　さま　傳はり、
こゝに　この　手本　あり、
日にや　新らしき　石、
盡きぬ　さち　を　この岸。

島の歌

夕潮

あはれ、戀しの　佐渡が島、
翁　が　歌ふ　荒海　に、
日蓮　ゐます　ものならば、
宗教　いまだ　命　あらん。

あはれ、ゆかしの　隱岐が島、
その身　を　わぶる　法皇　の
御魂　ゐまさば、今も　尙
僞忠　の　人　は　耻ぢ死なん。

ああ、久方の　壹岐、對馬、
さかひ　を　越えて、敵國　の
船　押しよする　その日　にも、
その　犧牲　こそ　遲かるらめ。

ああ、臺灣 は わが 版圖、
千島 の 果 も 覆ひ羽 の、
南北 長き 島々 に
なやめる、人は 幾許 ぞ。

ああ、松島 の 秋 冴えて、
西行 筆 を 投げうちぬ、
竹生の島 の 名 は 高く、
琵琶湖 に うつる 月のかげ

ああ、島々 は 多けれど、
われに ゆかり の 淡路島、
淡き すがた は 朝じほ の
かすむ うち より 現はれつ。

須摩の 濱べ の 松風 の
夢 吹き拂ふ 故里 や、
むかし いませし たらちね の
母 の 御顔 の 浮ぶ ごと。

呼べば、慈愛 の 手 を 擧げて、
われを 招がん こゝちしつ、
ゑめば、滿ち來る 新じほ に、
わが身 の 今を 問ふ ごとく。

ああ、われ 旅に さまよひて、
つと を 納めぬ 久しさ よ。
十の 指をり かぞふとも、
いにし 月日 は 歸り來ず。

わが 日の本 の 島々 の
數 に わたりて、わが思
千々 の 亂れ を 解き分けて、
やすき を 給ふ 日 こそ 待て。

有木の別所

（成經が獨語）

松 の 樹立 一むら
低く 茂る 山かげ、
上を 慕ひ、ひたすら
「厭離穢土」と いひたげ。

その麓 に 小高く
盛れる 土よ。なれのみ、
夕 潮

奢る　平家　長らく
　ねらひし、人　の　たのみ。
たとひ　むほん　とは云へ、
　源氏がた　の　たくらみ、
多く　かたらう　家々、
　一も　來たり　得がたみ。

うつり易き　花の香、
　かはり易き　世の常、
恨み　かこつも　愚か、
　こゝに　少將　成經。
かへり見れば、かの島、
　沖津波　に　こと寄せ、

都(みやこ)だより　待つ　ひま、
　はやも　露　の　二とせ。

ながらうて　こそは　増され、
　胸に　迫る　悲み、
戀ふる　父は　殺され、
　何を　ひとり　樂み。

おのれ、憎き　清盛(きよもり)、
　吉備の國　へ　われをも
定め置きて、その　宣(の)り言
　更へし　さまの　刈り菰。

やがて　いち門　亂れて、
　亡び失せん　その時、

榮華の　夢は　覺めて、
　あはれ、殘らん　いへ軒。
ためしは　良き　如意尻、
　うたてげなる　賤が家、
障子に　さへ　しみ入り、
　「欣求淨土」見ぬ　かや。

身こそ　思ひ捨てたれ、
　いまだ、晴れぬ　この胸、
響く　鐘に　ほだされ、
　日暮に　浮く　うき舟。

つなぐ　玉の緒　絕えば、
　われは　知らず、山寺

訪ひ來る　もの　ありせば、
　たゞ　古跡　を　見がてら。

あはれ、朽ちし　その壁、
　しるし　ばかり　この墓。
春　の　あらし　吹くなべ、
　夜もすがら　の　谷なか。

噫、八重もぐら　押し分け、
　苔　の　上に　手を　つき、
いたく　叫ぶ　あり明け、
　聲　冥途　まで　貫き、

萬事　忘れて　眠むる
　君　が　耳に　至らば、

噫、一たび　千早振る
　神　を　起せ、ゐまさば。

われと　入道　康頼、
　千重　の　卒都婆　の　功德、
かの　鬼界が島　より
　渡り來たる　この奥。

聖き　風も　常樂。
　眞如　に　照る　御靈　よ。
既に　消えし　善惡、
　今　一返　の　味かた　よ。
ありし　昔を　語れ、
　死に後れし　なが子　に、

わが誠意(まこと)に、誰れ誰れ、
　數へ擧げよ　世の鬼。

島は　名のみ　悍(おぞ)くも、
　恐るべき　は　都　よ。
たとひ　歸りのぼるも、
　こゝろ細き　ところ　よ。

さばれ、こゝに　參る　は
　またと　かなひ難からん。
この　卒都婆　を　立つるは、
　噫(あ)、生死　の　巷　ならん。

七日(なぬか)　七夜(なゝよ)　の　勤め、
　明けて　つらき　別れや、

夕　潮

まなこ　曇る　しのゝめ、
　ふたり　出づる　破れ家。

あはれ、有木の別所　よ、
　都　を　去る　いく谷。
あはれ、父　の　居場所　よ、
　何億里、苔　の　下に。

＊成親、如意尻の古障子に手習ひして、この兩句の心を示せる跡ありき。

散り行く紅葉

ああ、もみぢ葉　の　かげ　赤く、
てん地　の　氣　をば　呼吸して、
散り行く　さまを　譬ふれば、

その德 高き 山人 の
こころ 靜かに、安祥 と、
知死期 に のぞむ すがた かな。

山 の 立ち樹 も、岩が根 も、
苔も、草葉も、はた 下に
渡せる 橋 も、小流れ も、
ともに 緣ある その 御弟子。
その 悲み を あざやか の
光 に 放つ ゆかしさよ。

四大 分るゝ 小あらし に
一葉 一葉 の 舞ひ下る、
蝶か 花か を 水 に 浮け、
水 は 流れて、その列 を、

沖の　舳艫（じくろ）の　つゞく　ごと、
岩間がくれ　に　運ぶ　なり。

ああ、行（ゆ）くさき　は　いつこ　ぞや。
われ、その道　を　見守れば、
先き　の　船　より　消え失せて、
相つぐ　ものは　限り　なし。
すべて　ひじり　の　乘る　なれば、
他界（たかい）　に　入るや　そのまゝに。

天の橋立にて

（皆友さめぐり會へる折）

天神　地神　九世（くぜ）　の　戸　の
あまの　橋立　ゆふぐれて、

こゝろ細くも 消え殘る
松原 ながき 浪の音。

つゞみ に しては、その昔、
君 が 好みし 歌 ならず、
笛 とし 聽けば、且は又、
わが 吹き慣れし いろ 出でず。

右に 左に 吹く風 の
ひゞき よ、しばし 止みねかし。
千歳(ちとせ)の浦(うら) よ、名 の 如く、
久しき 友 を なぐさめよ。

ふたり 別れて 十餘年、
わかき さかひ は 夢 ばかり、

夕潮

海やま　遠く「時」の　矢　の
行くゑ　たづねて、相知らず。

われ　は　東に、君　は　西、
さすらふ　空　は　高けれど、
飛びかふ　雲　の　中絶えて、
うれひ　に　沈む　世　なりけり。

さばれ　相會ふ　この日　こそ、
むなしき　月日　よび起し、
老い行く　われも　いにしへ　の
わかき　に　返へる　こゝち　すれ。

しづかに　うてる　わが脈　の
ちしほ　に　今や　東風　吹きて、

千々の おもひ は わが胸 に
うしほ の 如く 湧き出でつ。

わが故郷 に、うちつれて、
すゞき 釣る 夜 の うれしさ も、
之には いかで 増すべき ぞ——
旅に 來りて、月 無くも。

滿つる 記憶 の おのづから
この松原 に 輝きて、
暗き 夜つゆ は 千萬 の
こゝろ を 照らす 光 かな。

菫と少女

（お傳兵衞の墓に少女の菫をつむを見て）

なれも　宿世は　清く
　結ぶ　露　の　身　なりけん、
白き　からだ　に　宿り、
　ゆふべ　に　引く　かげ　一間。

立てる　細腰　まげて、
　かざむ　乙女　の　すがた、
生れ更らば、同じ
　すみれ　と　咲かん　その邊端。

なさけ　深めて　圍む
　墓　の　底も　練り塀、
冥途　に　立つる　家ぞ

多き お俊 傳兵衛。

責むる 勿れよ、世びと、
　あらぬ 道 の さまよひ。
義理 に からむが 爲めに、
　罪 を いだく その戀。

あはれ、あだなる 心
　胸 に をどる 防(ふせ)がば、
をんな 形に 追はれ、
　その美 つひに 枯れ把(たば)。

許すべき ところ あり、
　いまだ 盡せぬ いのち、
こゝに 菫(すみれ)と かはり、

夕潮

咲きや　出でし　おもゝち。

心して　摘め、をとめ、
　人　を　誘ふ　むらさき、
袖　に　ゆかりの　運命
なれにも　あり、このさき。

秋　吟

（雨中に立ちて）

蛇の目がさ　　さしかけて、
歩む　道　　踏みしめて――
その柄　をば　　持ちかゆる、
心　さへ　　降り　消ゆる。

雨の音　静かなり、
けさは尙　そのひかり。
見ゆる物　皆あかき、
空の色――　誰が畫がき。
傘のへに　散るもみぢ、
ひと葉にも、　この小虹。
里は今　秋深し、
返り見ば、　かの土橋。

二の笛

道のべ　に　　風　も　凍りて、
寒き夜　は　　人のかげ　なし。

家々　の　　軒　に　連なる、
瓦斯燈　も　　ねむだげ　に　見ゆ。

月　のみ　は　　高く　照らして、
やせ犬　の　　おそれ　増す　なり。

戛々と　　さわべる　の　音、
長靴　の　　巡査　過ぎけり。

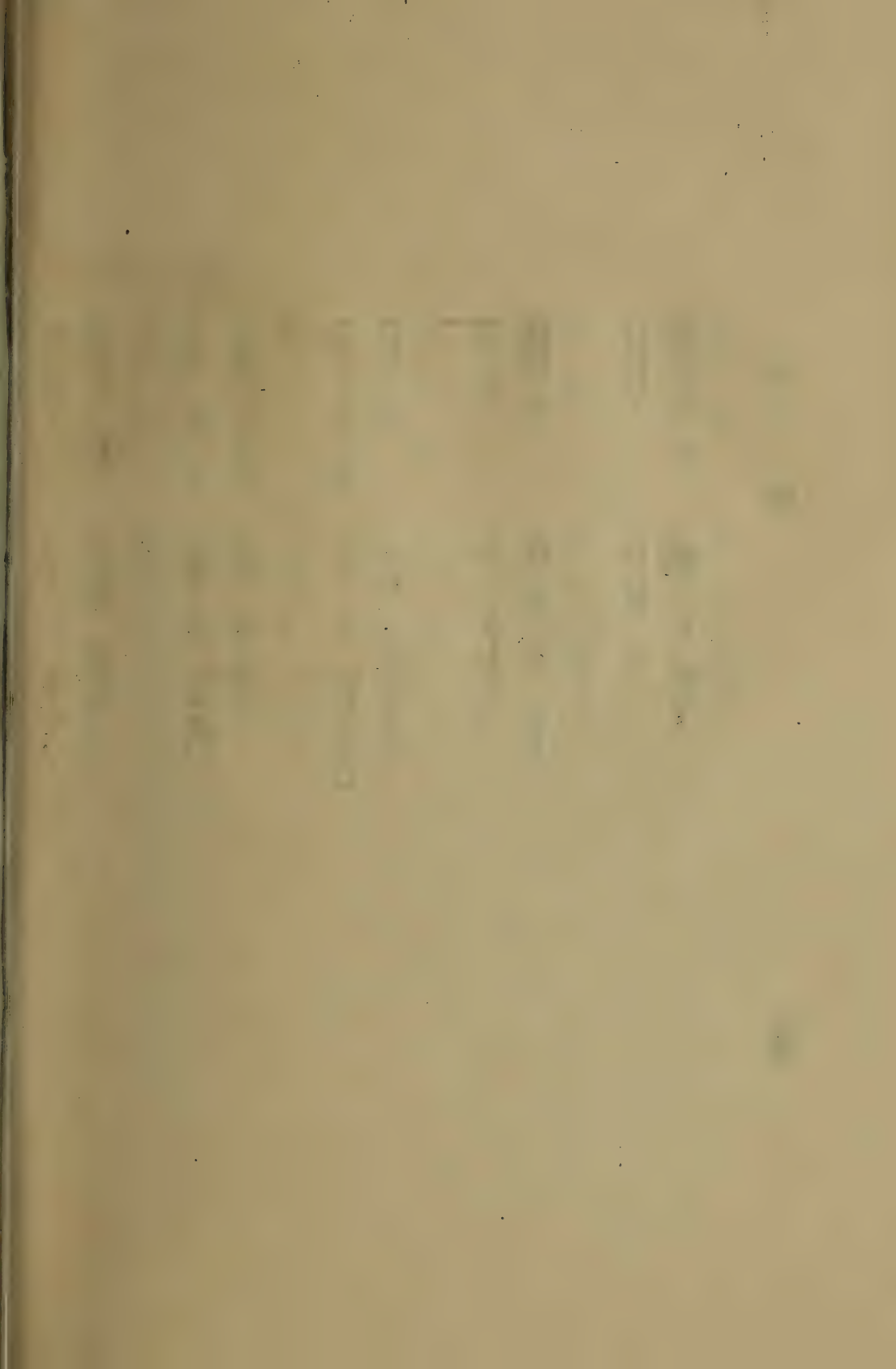
その跡　に　　出會へる　二人、
『爲吉　か。』　『あ』と、立ちどまり。

持つ杖の　さきを交して、
手ごたへを　互ひに受けつ。

『仕事は』と　高きが問へば、
『まだ』なりと　低きが答ふ。

『更けては、な、　わしは眠むたや。』
『さて、男、　いま一まわり。』

高下駄の　音ふみしめて、
四辻を　右と左へ――

別れ行く　笛の響に、
あめつちは　親子と聴ゆ。

史詩　豊太閤

われ、豊太閤の事蹟を見て、最も感ずるところはその外征にあり。彼、朝鮮を得れば、大明國に向ひしは勿論、明國を平らげば、印度、ペルシヤ、否々、世界をも討伐せしなるべし。然して、その目的とするところは、かゝる外界の事件にあらざりしなり。彼は、無意識的に、自家心靈の要求を滿たさんことを欲せしなり。一國を擧げて、その內部的安心を求め居りしなり。實は、その手段を選ばずして、之に盲進せしなり。されど、われは、光秀征伐時代の秀吉よりも、征韓時代の豊太閤を愛するものなり。先きには、機智あまりに多くして、人の同情を引かず。後には、大愚に似て、而も神々しきところあり。國家の內部的生命を與ふる文藝その物は、知らず識らず、彼に依つて、その眞意を發揮することを得たりと云ふべし。

戰捷の祈

（一）

東南　やうやく　雲　やわらぎて、
西北　はじめて　風　また　靜か、
三拾年功　われ　誇らずも、
四海　の　外　まで　威は　及ばんず。
徒手して　天下　を　握れる　ものは、
いにしへ　賴朝、今　はた　誰ぞや。
好友、あはれや、世界　を　知らず、

富士野の巻狩　たゞ止んぬるよ。

（二）

獨立　九年の　汗馬の　勞も、
なほ且　幕下に　英雄　さかえ、
勢　さながら　大わだつみの
泡立つ　如くに、ああ、鳴り響く。
肉　飛び、骨　さけ、氣は　碎くるも、
堂々　この士を　いかんが　默す。
微力に　起れる　この　わが身には
關白　何ぞや、早や　投げうちぬ。

（三）

去年の　この日に　諸侯を　集め、
聚樂の　屋形に　外征を　議す。

五人 の 宿老、五人 の 奉行、
中老 三名、みな 列なり つ、
備前 の 宰相 滿坐 に 代り、
讚辭 を 呈して 異議なく ありき。
十萬貔貅 は 直ぐ 立ちどころ、
艦船 七百 われ 今 率きゆ。

（四）

人間 僅かに 百歲 ならず、
快ならざらん や 無前 の いくさ。
美々たる 戰袍 われ人 かざり、
金銀 珠玉 の 大刀 佩かしめて、
大軍 肅々 旗幟 を たゞし、
雞林八道、明洲四百、
暹羅、晨旦 をも 一つに 統べば、

（五）

邊境(へんきやう)、日本 の 土 のみ 踏んで、
いつまで 祖先 の 武烈 を 瀆(けが)す。
京師 は 主上 の まします ところ、
豈、それ、畿内 に 跼蹐せん や。
叡慮 を うつして 北京 に 迎へ、
大唐關白 これ 秀次 か、
故國 は 秀家、高麗(こま) には 岐阜 の
宰相 秀信、最も よけん。

（六）

つゞいて、老將 また 舊臣 の
いさをに 報いて 國々 取らせ、

宇内の　形勢　たとへば　春の
うな原　廣くも　とく　治まらば、
わが身　は　身づから　愛兒を　追ふて、
とこ世　の　御國　の　神　とぞ　成らん。
露　とも　消え行く　浮世の中　の
のぞみ　は、その他に、また　あるべしや。

（七）

元來　無物　の　わが身　の　上に、
有形　の　野心　は　國家　の　爲めぞ、
限り　を　知らざる　この　あめ地　と、
誰れかは　空しく　ながらふべけん。
鶴松　三歲　をさなく　逝いて、
悲痛　の　靈境　われ　感じ得ぬ、
清水塔上　古今　を　いたみ、

丈夫 の 本領 その時 決す。

（八）

ああ、われ 賤しく おひ立ちぬれど、
日輪 孕みて 產れし 子 なり、
普天のもと、また 率土の濱 に、
多年 の 思 を 遂げでや 止まん。
今上皇帝 且 上皇 に
拜別 終はりて、親兵 二萬、
文祿元年 卯月 の なかば、
秀吉 來たつて この社 に いのる。

（九）

噫、いつく島がみ、往古 に 渡り、
潮路 を 守護する 御靈と 稱す、

われらが　出で行く　前軍　後備、
靈驗　いやちこ　あらしめ玉へ。
げに　これ　仙島、岸　うつ波　も
心耳　を　洗つて　梵唄　の　曲。
やがては　攻め入る　かの　むらさき　の
龍宮城　も　ま近し、あら、ありがたや。

（十）

供養　の　萬燈　つき夜　の　如く、
海上　遠くも　光　は　をどる、
百折廻廊　舞樂　と　變じ、
われ　また　登仙　羽化する　ものか。
虚空　に　花　ふり、蝶　あらはれて、
御代　泰平　とぞ、歌ひて　かなづ。
ほとけ　の　王國、異教　の　土にも、

わが目 は 開らけて、冥福 浮ぶ。

（十二）

ああ、われ 賤しく おひ立ちぬれど、
日輪 孕みて 產れし 子 なり、
普天のもと、また 率土の濱(ひん) に、
多年 の 思 を 遂げでや 止まん。
噫(あ)、いつく島がみ、往古 に 渡り、
潮路 を 守護する 御靈(みたま)と 稱す、
われらが 出で行く 前軍 後備、
靈驗 いやちこ あらしめ玉へ。

清正望岳賦

朝鮮 北境 いま 早や 盡きて、
豊 太 閤

攻め入る　あなた　ぞ　かの　兀良哈、
八千騎兵　は　いち城　拔きつ、
貨寶　を　收めて　南に　還る。
追擊胡兵　の　鋒さき　迎へ、
清正　身づから　しんがり　すなり。

時、これ、當年　七月　なかば、
五穀　も　みのらぬ　異邦　の　風よ。
夏　なほ　寒きは、日本刀　の
切れ味　さとつて、靡ける　さま　か。
王子　は　兄弟　俘虜　と　なり　つ、
知らずや、咸鏡　南部　に　あらん。
無謀　の　しれもの　いのち　を　忘れ、
夜叉上官　をば　おそひて　來たる、

たやすく　あしらひ、且　退きて、
進むは　いよいよ　平安道　か。
わが軍　たまたま　道　失ひて、
浪　蒼茫たる　海べ　に　出でぬ。

二十重(はたへ)　の　しき浪　御空　の　雲　に
つらなる　境　は　如何なる　國　ぞ。
噫(あ)、さなきだに、又　征衣　を　着ては、
生れし　故郷　の　戀しき　ものを、
見よ、見よ、西南　霞　を　開き、
はるかに　浮べる　わが　富士の靈。

譬へば、暗夜　を　迷へる　船　の
北斗　に　みよし　を　轉ずる　如く、
從ふ　兵士　は　皆　もろ共に

芙蓉 の すがた を 動かぬ 目あて。
將軍 よろこび 馬 より 下り、
かぶと を 脱して、再拜 跪坐す。

『ああ、われ、貴とき 義父、太閤 の
御もと を 半歲 辭し奉り、
日々 向ふは たゞ 西北 と
思ひし こと こそ 過ち なれや。
遠くも 來にける われらが いくさ、
わが 大日本 は かしこ の 空ぞ。

『勝利 の しらせ を 待つらん 人 の
あり とし 賴めば、いづこ の 果も、
われには 聚樂 の たゞ あたたかき
御殿 に 同じ』と、かしこみ 起きつ。

再び 馬上に 士 を 見渡せば、
きほひ は 凛々 あらたに 振ふ。

明使追放

（一）

金箔 粲たる 瓦 を 葺いて、
光明 あまねき 伏見の城 よ、
たたみ は 千疊 錦 を かざり、
柱 に 大和 の 古木 ぞ ひかる。
『殺生關白』 先年 逝いて、
棄君 この時 僅かに 四歲。
天下 の 大將 平和 を のぞみ、
ここ、今、明使 を 引見 すなり。

（二）

毛利 の 輝元 兵士 を 列ね、
二行 の 護衛 は 嚴しく ゆたか、
警蹕 靜かに 帷幄 は 開らけ、
太閤 七士 と すまひ を ただす。
正副明使 は 仰ぎも 得せず、
人手 に すがりて 御前(みまへ) に 進む。
膝行 ささぐる その 禮物 は、
金印 冕服(べんぷく) いかなる しるし。

（三）

天下 は よろこび、家康 以下 に
その 章服 をば おのおの 着させ、
手づから かむり を おし戴いて、

袖ひろごろも の いきほひ 揚る。
仰せ を かしこみ、かの 墨染 の
承兌(しやうたい) 冊書 を 讀み上げ はじむ。
あはれや、冒頭 その語 に 曰く、
『なんぢ を 封じて 日本 の 國王――』

（四）

行長 かたへに おののき 懼れ、
列坐 の 英雄 一語 を 吐かず、
秀吉 忽ち まなじり 裂けつ、
裶服(ひふく) は 破れて かんむり 飛びぬ。
『われ 今 日本 を 手中 に 握る、
王位 を 欲せば 身づから 可なり、
皇統 綿々 この 天朝 に、
夷狄 の 駄言は 以ての外ぞ。

（五）

『ああ、人、われ　をば　小猿　と　稱す、
まこと　に　かなへり　この　わが樣　は。
無禮　の　文字　を　得んとて、ここに
なんぢら　風情　を　引見　せんや。
惟敬　は　奸惡、詐謀　を　いだき、
明韓　二國　を　取りつくろふ　か、
攝津　は　小才、恥辱　を　知らず、
その罪　いづれも　誅死　に　當る。

（六）

『阿虎　は、直ちに、奉行の衆　と
兩使　を　鞭うち、とく　去らしめよ。
方亭、なんぢ　は　何　をか　爲さん、

北京 に 歸りて、わが意 を 告げよ。
秀吉 怒つて 大師 を 出だし、
再び 內地 に 進擊 すべし。
朝鮮 三道 わが目 に あらず、
明州 四百 を 屠るは 近し。

（七）

『ああ、われ 愚 なりや、この 欝忿 は、
諸公 と もろ共、豈 忍ばんや。
西南四道 の 勇士 を 募り、
明年 二月 を 發途 と なさん。
秀秋、このたび 主將 と なりて、
秀家、秀元、その副 たれよ。
小西 は 阿虎 と 先鋒 きそひ、
この あやまち をば 千古 に ただせ。』

（八）

金箔粲たる瓦を葺いて、
光明あまねき伏見の城よ、
たたみは千疊錦をかざり、
柱に大和の古木ぞひかる。
數百の兵船、十萬貔貅、
東西四方を意中に收め、
天下の大將媾和を遂げず、
ここ、今、明使を追放すなり。

蔚山城

大明、諸道のつは者集め、
三十三將いきほひ奢る、

右軍は　芳春、左軍は　如梅、
高策　その間　中軍　ひきゆ。
韓國七將　また　加はりて、
蔚山修築　なかばに　迫る。

たまたま　嚴寒、しはすの　空に、
草木　いのちの　かをりを　吐かず。
守將は　水路の　堡塞に　出でゝ
城兵　一しほ　土木に　努む。
土をば　重ねて　水　盛りかけば、
數丈の　銀壁　忽ち　成りぬ。

將軍　奮戰　歸ると　いへど、
四面は　全く　敵手に　落ちつ、
十日の　籠城、十日の　飢渇、

牛馬 を 屠つて その數 足らず。
血しほ の 氷 を 碎いて 食みて、
釜山 の 援兵 至る を 待てり。

黑田 の 孝高 梁山 に 在り、
使 を 發して 危急 を 報ず。
豐臣秀秋 諸將 を 督し、
五萬 の 騎卒 は 勇んで 進む。
清正 さながら その 意氣 自若、
內外 應じて、相合擊す。

敵軍 三脇 あなみ は 亂れ、
總督 揚鎬 今早や いづこ。
夜さむ の 平原、露營 は 倒れ、
凱歌 の 響 は 千里 に 渡る。

月色　皓々　根城　と　映じ、
殘兵　却つて　行ゑ　に　迷ふ。

薨去

（一）

六十三歲　太閤　老いて、
外國　いまだに　降り　を　乞はず、
四屯　の　精兵　四城　を　守り、
その餘　は　全く　まかりて　歸る。
七年征役　かへり見　すれば、
過ぎにし　醍醐　の　豪遊　のみ　か。
花　また　この世　に　散り行く　習ひ、
殿下　の　病　は　いよいよ　篤し。

（二）

この時　八月、德川公　を
御もと　に　招きて、のたまひけらく、
『われ、意　を　果さで、且　死に失せば、
中將　幼弱、世に　亂　あらん。
之をば　をさへて　鎭めん　ものは、
重鎭、なんぢ　の　外ある　べしや。
幼兒　の　行ゑ　は　われ　また　問はじ、
天下　を　擧つて　なが手　に　托す。』

（三）

家康　老猾、なほ且　おそれ、
感佩　迫つて　なんだ　に　むせぶ、
『殿下　の　百歳　萬世　の　後は、

嗣君 を 奉ぜぬ ものら ぞ なけん。
よろしく 神算、君、運らして、
治國 の もとゐ を 遺させ玉へ。
われ たゞ 不才 の 身は、畏くも、
ああ、この 重任 堪ゆべくもなし。』

（四）

ためらひ 退く あと 見送りて、
三成 長盛 諫めて 曰く、
『殿下 は 百戰 天下 を 握り、
一朝 他人 に 與ふは 如何に。
諸侯 に 大小 差別 は あれど、
すべて は 御恩 に むせべる ものぞ。
從二位 の 幼君 まさきく ませば、
關西 關東 など 叛(そむ)かん や。』

（五）

衆議　に　従ひ、すなはち、こゝに、
大老　中老　奉行　を　命じ、
片桐且元、小出　の　播摩、
秀頼　傅たるに　これ　定まりぬ。
多年　の　老臣　猛将　ども　を
御枕　近くも　皆　召し寄せつ、
『ああ、わが戰　勝ざる　なきも、
今、たゞ、一事　を　遂げずに　逝くか。

（六）

『欝勃　そびゆる　大樹　の　かげ　も、
えだ葉　を　刻めば　殘るは　幹　ぞ、
魏々たる　いらか　を　支ふる　ものは、

ふとしき立つ てふ かの 宮ばしら。
一人 天下 の 重きを 成さば、
萬民 等しく つどひて 來たる、
見よ、われ 日本 の 御靈 を 受けて、
平和 を 世界 の 果まで 求む。

（七）

『劍銃、弓矢 は 露電 に 似たり、
一たび 動けば、歷史 と 消えん、
めぐりて 倦まざる 天にも、地にも、
人々 一期 の 心 は 振ふ。
たとへば この精、うしほ の 如く、
滿ち足る 世 までは 平らか ならじ。
四民 の わづらひ、四民 の うれひ、
ああ、半途 にして わが手 を 免る。

（八）

『明國、わが死を若し漏れ聞かば、』
或は大學の復讎あらん。
元冠以來の恥辱を受けば、
われこの御國に神さび得んや。
駿河の宰相伏見に臨み、
必らず內外歸趣を示せ。
六歲嬰兒は大坂城に
利家保ちて、人たらしめよ。

（九）

『石田よ、淺野よ、とく赴きて、
四城のいくさを收めて歸れ。
二人の宰相そなへに立てば、

追撃 何ぞや、おそる に 足らず。
十萬 兵士 を 空しく 置いて、
あはれや、『閫境 の 鬼 たらすな』と、
天下 の 大將 一事 を 遂げず、
千古 の うらみ を いだいて 逝きぬ。

小海祠

天下 の 訃音 を 敵 漏れ聞いて、
窮鼠 の いきほひ 却て 猛し。
わが軍 海路 を せきとめられて、
義弘 僅かに 唐島 に 入る、
順天 守將 は 南海島 の
義智古城 に のぼつて 守る。

明將　劉綎　わが船　沈め、
入り江　を　封じて　次第に　迫る。
釜中　の　魚　たる　行長勢　は、
暗夜　に　乘じて　圍み　を　のがれ、
時　これ　霜月　十有九日、
島津　と　合して　名護屋　に　向ふ。

一兵　その名は　高宮　小八、
端なく　後れて、便船　を　得ず、
濱べ　に　うち出で、その　西みなみ、
故鄕　の　空　をば　空しく　ながむ。
卑怯　の　浦人　身　を　遠ざけて、
たゞ　攻め寄する　は　おほ浪　ばかり。
小八　が　よそへる　黑革おどし、
よろひ　は　破れて　つゞれ　の　まゝに、

やすらふ　家　なく、食らはん　資　なく、
なぎなた　一つ　を　夜襲　の　備へ。
あはれや、俊寛、敵地　に　ありて、
風雨　は　無情　の　手がら　を　誇る。

韓人わらべ　は　こと更ら　避けて、
その　ちゝ母ら　の　門戸　を　出でず、
かの　夜叉上官、また石曼子、
武勇　の　言葉　を　ひそかに　偲ぶ。
見よ、見よ、この士　は　瘦せ衰へて、
失せにし　その日　に　わだつみ　荒れぬ。

再び　難事　の　返る　を　恐れ、
島民　やしろ　を　小山　に　建てつ。
時日　を　定めて、あらぶる神　の

御魂を鎭むる祭をなせど、
歴史は亂れて、かれ舜臣の
愍忠海祠の一つに數ふ。

悲戀悲歌

三界獨白

一　燭のゆらぎ

一

ああ、君、わが愛、悲しき愛 の
御たね を さそひて 春 は 過ぎぬ、
三月 の 樂み、その 悲み は
若葉 の かげろふ、野邊 に 過ぎぬ。
うらゝかなる 日は 再び 見えず、
遠き に のこる は 聖堂すがた、
そびゆる あらゝぎ 時鐘 を 鳴らし、

あしたの 祈禱 に 呼ぶも 恐怖。

二

罪なき ものら は ころも を 飾り、
　こわね も 高らか 石段 を のぼり、——
ああ、うらやましき 乙女 の さまや——
　聖母 を 唱へて 席 に すはり、
やましき ことなく、隔つる 意なく、
　かれら は 聖式 の 蒸餅 を 取れど、
わが身 や エヴの子——妖蛇 に 捲かれ、
　ゆふべ の 祈禱 も 口 に 出でず。

三

見よ、かの カイン は その弟 を
　うらみて 殺せし 罪 に 由りて、

耕す　土　さへ　その果　を　擧げず、
　流浪　の　身　としも　くだちぬれど、
なほ且　ゼネヴ　の　印誌（しるし）　を　給びて、
　さすらふ　野邊　にも　子　をば　得たり。
わが身　は　却て　わが　分身　を、
　神　にも　見せずて、闇　に　遣りぬ。

四

ああ、闇——わが魂　なやめる　闇　は、
　わが目　を　閉して　われを　責むる。
こゝろ　の　窓　より　たまさか　見えて
　ひろがる　大地　は　聲　を　叫び、
血しほ　に　染みたる、その口　開けて、
　わが身　を、罪　をも、呑まん　と　する。
われには　ゼネヴ　を　呼ぶ　ちから　なし、

ああ、君、わが身 は 尼 を 斷念ぬ。

五

一たび この身 に 纏ひはせん と
のぞみし 黑衣 は、こゝろ 包み、
見ぬ子 の かたみ の 喪服 と 成りて、
わが 苦み こそ 神 と 盡きぬ。
老いたる 主教 は あまりに 聖く、
親しき 童貞 なみだ もろし、
光 を 受けたる 萬物 の うちに、
この罪 聽く者 ひとり 君 ぞ。

六

君 より ひそかに 懺悔 を せよ の
招きに 斷食――朝 を 來たり、

をみな の 恥辱 をば おほへる 被衣
　白き に 隱れて、彌撒 を 拜す。
たふとき かをり は 御堂 に 滿ちて、
　高き を 落ち來る 樂 の ひゞき――
わが魂 うつらに うれひ を 免れ、
　まさしく 向ふ ぞ 神 の 御前。

七

ひたすら 唱ふる 誦文 の 聲 も、
　うなじ と もろ共 低く 下だり、
十字 を 結べる 小腕 を 過ぎて、
　わが世 は 地獄 の 門 に かよふ。
見よ、聖ミカエル、また ガブリエル、
　魔鬼 をば 平らげ、道 を 拓き、
天 より 招く は 耶蘇 の 御體、

榮光(さかえ)は　金色——これや　犧牲。

八

『生きたる　人、また、死したる　人を
糺さん　爲めにぞ　あもり給ふ……」
われらは　信ぜり、この　公(かとりか)の
聖會、聖人……罪　の　ゆるし……』
こは　聽き慣れてし　御聲(みこゑ)　と　知りて、
ふと　目　を　あぐれば、——思はざりき——」
わが君、神父　の　くらゐ　に　ありて、
香臺　ひだりに　ひざまづけり。

九

立ちたり——その御手(みて)　銀水　きよめ、
三つなる　ペルソナ　いのり　念じ、

いのち　に　滿ちたる　秘蹟　の　蒸餠　を
　これ　聖體　とぞ　さゝげ給ふ。
その　かうがうしさ、その　あらたかさ、——
　われらは　思はず　かうべ　垂れて、
『十字架　に　かゝりし　主　の　肉身　を
　をろがみまつる』と　口　に　誦しつ。

一〇

かれ、また　葡萄　の　さかづき　揚げて、
　われら　に　誦文　を　求め給ふ。
われ　はた　唱へぬ、『十字架　の　上に
　流させ給へる　御血……』ばかり。
わが胸、忽ち　いたみ　に　觸れて、
　仰げば　奥なる　燭　は　ゆらぎ、
火がげ　の　もとより　見知らぬ　嬰兒　の

御墓 に あらはれ、『母』と ゐみぬ。

一

神父 の すがた ぞ いよいよ 崇く、
夢路 を くゆれる 香 の うちに、
脊な なる 十字 は 光 を 放ち
死すべき人 とも 思ひ 寄らず。
さながら キリスト、身づから 來まし、
わが爲め 御壇 に 懺悔 聽くか。
マリヤ の 御胎(みはら) は、ああ、聖(きよ)かりき――
われ ゆゑ わが子 は 闇 に 行きぬ。

二

ああ、君、わが愛、悲しき愛 の
御(み)たね を さそひて 春 は 過ぎぬ、

三月 の 樂み、その 悲み は
若葉 の かげろふ 野邊 に 過ぎぬ。——」
君、聖體 をば 分けはじめしも、
わが身 は 授かる 價値(あたひ)なくて、
痛傷(いたみ) と 悔悟(くい) もて 御堂 を 退き、
御空 の もとにて われ を 泣きぬ。

二　闇 の 横木

一

ああ、日 は 毛布 の 黑み を 帶びて、
月 また 血 の ごと しぼみ來たり、
あめなる 星々 その軸 もろく、
たとへば 無花果、地 にぞ 落つる。

諸天　は　巻き物　おのづと　巻きて
　山々　島々　うつり行きぬ。——
わが身　は　鉛　の　おもり　の　如く、
　空　より　釣られて　闇　を　下だる。

二

うづ捲く　黒雲　練りたる　壁　と、
　わが道　かこみて　魂　を　送くる。
刹那　ぞ　五百里、小暗き　坑　は
　風切る　いきほひ　ひゞく　ばかり。
あまりに　重きは　わが身　の　罪　か、
　悔ゆる　に　ひまなく　鎖　延ぶる——
かしら　の　黒がみ　さかしに　垂れて、
　わが手　も　便なく、落つる　速し。

三

わが息　殆ど　胸　より　絶えて、
血しほ　は　むらがる　眉　の　あたり、
忽ち　觸れたる　横木　を　握り、
之にぞ　すがりて　助け　呼びぬ。
と見れば、鐵門　の　なかば　は　引けて、
ひらめく　鬼火　に――『あはれ、わが身、
着慣れぬ　ころも　の　薄き　を　纏ひ、――
こは、早や、他界　の　すがた　なるか。』

四

かくこそ　叫びて、思はず　泣けば、
『さなり』と　闇　より　答へ　聽ゆ、
『いまし　ぞ　ゼゼベル、淫婦　の　友　よ。

額に　神より　印（しるし）　受けず、
第二の　滅亡（ほろび）に　これより　入れや。
　來たれ』と、くろがね　戸びら　軋り、
いろ　青ざめたる　馬の脊　高く
　乘れる　は　利鎌　の　黒き死　なり。

五

口　より　出づるは　火　と　その烟、
　硫黄　の　にほひ　ぞ　燃えて　のぼる、
陰府（よみ）、その　うしろ　に　つき從ひて、
　わが目　を　掠むる　つるぎ　あまた。
眞近く　起りし　もゝいかづち　の
　どよみ　は　奈落　の　底に　消えつ、
あらたに　叫びて、惡魔　の　むれ　の
　寄せ來る　地鳴（ちなり）　ぞ　胸　に　ひゞく。

六

われ、身を もだえて、すがれる 棒 こそ、
さながら 裁判 の 場 をや 限る——。
『よみ なる 判官 よ、わが 死の神 よ、
しばし の いのち を 許し給へ。
求むる物 あり、われ、そを 追ひて、
來りぬ この闇、暗き 坑 に。
ああ、かの 失せにし 玉 だに 得なば
わが身 は 陶器、碎く まゝぞ。』

七

馬の脊 聲 あり、『おろかや、いまし、
求むる 玉 には 惡魔 まとふ。
邪淫 の つちくれ さは 戀しくば、

來たりて サタン の 胎内(はら) に 入れや。
かれ こそ 赤龍(あかたつ)、かたち は 見せず、
なやめる いまし を 近く かこみ、
或夜 ぞ ひそかに、產む をも 待たず、
なが兒 を 奪ひて 食ひ去りぬ。』

八

『ゆるせや、見ぬ子 よ、さりとは 知らず――
のろひ は 免れじ――放ち遣りぬ。
ああ、われ 誰れ にか そを 訴へん、
神より 離れて のぞみ 盡きぬ。
第一、第二 の 天使 よ、來たり、
終末(をはり) の 管(くだ) をば 高く 鳴らせ。
汝(な)が手(て) に 燃え立つ 火焰(ほのほ) を 浴びて、
わが身 も 草木 と 燒けて 失せん。

九

『第三天使　の　喇叭　よ、ひゞけ、
御星　の　茵蔯、とくも　隕ちよ。
われ、汝が　苦き　に　身　を　投げ入れて、
河水　もろとも　ほろび行かん。
ああ、この靈魂　とく　滅びずば、
いかでか　あがなふ　深き罪　を。
ああ、われ、誰れ　にか　そを　訴へん、
神より　離れて　のぞみ　盡きぬ。』

一〇

物云ふ、力も　おのづと　ゆるみ、
すがれる　横木　を　落ちん　時し、
わが身　を　受くべき　魔鬼等　は　失せて、

奇くも　やわらぐ　胸　の　おそれ。
この時、『しばし』と、この坑　開らけ、
うへより　さし來る　光　見えつ、
聖母　の　御すがた　いと笑ましげに、
わが手　を　取りて　ぞ　熱き　なみだ——

二

『若葉　は　朽ちしも、その　靈魂　は
なが身　に　活く』とぞ、あはれ、御母。
わが身　は　引かれて　みどり　の　雲　に、
こゝろ　も　輕らか　空　を　のぼる。——
ああ、君、わが愛、悲しき愛　は、
住む世　を　異にし、いよよ　增る。
ときわ　の　樹かげ　の　いづみ　を　汲みて、
また　會ふ　時　をし　われは　待たん。

三　ときわの泉

一

物 みな 新たの いのち を 帶びて、
御空（みそら） の 上なる 清き 住まひ——
夜なき 國 には ともし火 つけず、
日 は わが かんむり、おもて 照し、
十二 の 星々 またゝき 止みて、
ちさき は 花がた、胸 を 飾る。
わが身 も 聖徒 の 御數（みかず） に 入りて、
無縫（むほう） の 細布（ほそぬの） 白き 給びぬ。

二

赦免（ゆるし） を 受けたる をみな の 凡て、

こゝには　稚き　愛　の　すがた、
マナ　より　あまき　は　その　物語り、
　宿世　の　記憶　は　夢　の　如し。
等しく　光　の　白衣　を　まとひ、
　金沙　の　御庭　に　群るゝ　さまは、
たとへば　遠野　に　あまた　の　羊、
　かすみて　浮べる　脊な　に　似たり。

三

あまたの　羊　の　飼ひ主、神　の
　御さかえ　照り添ふ　宮　に　あれば、
わが身　も　溢るゝ　めぐみ　を　浴びて、
　樂しき　とこ春　晝を　去らず。
たまたま、凝りにし　くれなゐ雲　の
　花びら　一つ　を　足　に　踏みて、

奇しくも　ゆらげる　平和　の　袖　に、
　感ぜし　ひゞき　は　天　の　あなた。

四

ああ、その響　を　追ひ行く　魂　の
　羽根　より　燃え立つ　ほのほ　見えて、
わが手　に　生命　の　樹かげ　を　汲めど、
　なほ且　寂しみ　涌きぞ來たる。――
上　には　みどり　の　あや虹　渡り、
　下　には　あを海　玻璃　の　男波、
その　透き通れる　岸邊　を　ひとり、
　心　は　戀しき　君　に　かよふ。

五

ああ、君、わが愛、悲しき　愛　の

きづな に 引かれて 懸る 地球(ち) にや、
ちいさき バアル の 偶像(ぐざう) の 如く、
熱 なく 回りて 圓く 垂るゝ。
さは云へ、宗教(をしへ) の 御光 しるく、
わが目 に 見ゆる は もとの 聖堂(みだう)、
黄金(こがね) の 香爐 に キリスマ 焚いて、
君、なほ いますか——遠き 御聲(みこゑ)。

六

あまたの 悔い ある もの等 の 爲めに
十字架 の 道行き、彌撒(みさ) の いのり、
御壇(みだん) に 焚く香 の けむり と 共に
繊弱(なよか)に のぼりて あめ に 聽ゆ。
ああ、その聲 こそ 一條 長く、
凪 なく 顫へて 胸 に ひゞけ。

來たれや、わが愛、小鳩 の 如く、
眞白き 御羽根 に 罪 を 打ちて。

七

わが手 は 待つ なり、卷くべき 君 を。
わが身 は 待つ なり、いだく 君 を。
一たび 心 に しるせし 影 は、
いつまで 相見ず 居らるべき ぞ。
亡ぶる ことなき わが魂 ならば、
いつまで 空しく 過すべき ぞ。
御神 は ゆるさん、心 と 心、
影 また 影 とし 會はん 時 を、

八

『祈禱 の うちには わが愛 あり』と、

君 はも 下界 に 歌ひ給ふ——
その愛、その君、今 幾萬里、
へだつる わが身 の 聲も 聽くや。
『祈禱(いのり) の うちには 生命 を 寄す』と、
君 はも 下界 に 仰ぎ給ふ——
いのち よ、わが君、今 幾億里、
へだつる わが身 の 聲も 聽くや。

九

ああ、君、わが愛、悲しき 愛 は、
主の日 ぞ 來らば、報(むくい) 得べし。
七 の 封印 六つ まで 開らけ、
とく その あめ地 消えも行けや。
ちいさき バアル の 偶像(ぐざう) の 如く、
熱 なく 回りて 垂るゝ 地球(ち) こそ、

その時　全く　かげなく　失せて、
君　はも　御空（みそら）　に　來ますべき　を。

血ぬれる鐘

『いかで、おきな よ、われ等 ふたり、
花見がてら の おもひ出 に、
春 も のどかの 空 に 高く
古き鐘 をば 撞かしめよ、
いかで、おきな。』

『いかで、——　おろかや、君は 酔へり。
さくら 棚引く うらゝ日 も、
われは 目醒めて、うつる時 を
かぞへ居れば ぞ、みやこ人、

ほろび　近し。』

聽いて、暫しは、めをと　ふたり
目　をば　見かはし　震ひしが、
聲　も　をみな　は　あだに　笑みつ、」
『されば、生れも來たる　もの
さわに　あるを。」

『さなり、生るゝ　子等　も　あれど、
死ぬる　ものら　は　歸り來ず。
若き　乙女　の　かほ　に　見えて、
つひに　隱るゝ　いろ香　こそ、
これや　ほだし。』――

『これや　ほだし』と、醉へる　をのこ

手もて　をみな　の　肩　に　觸れ、
『などて　おきな　は　斯くも　沈み、
あまき　さかづき　受けやせぬ――
鐘　を　撞けよ。』

『さなり、刹那(せつな)　は　死　をば　呼びて、
鐘　ぞ　鳴る時　やがて　來ん。
若き　をのこ　の　胸　に　燃えて、
つひに　ひろがる　ねたみ　こそ、
これや　おそれ。』

『いかで、おきな』と、めをと　ふたり
撞き　に　迫れば、その前　を
低き　うなり　の　聲　ぞ　過ぎて、
かれは　忽ち　夜叉　の　ごと

狂ひ立ちつ。

『待て』と　遮きる　さまに　おぢて、
かれら　ふたり　は　退きつ、
『許せ、おきな　よ、無禮(なめ)げ　なりき――
こは　も　何ゆゑ　世には　斯く
よき音　出だす。』

『さらば、君よ』と、こゝろ　解けて、
かれは　語れり、『この鐘　は――
云ふも　苦しや　――　われに　生命(いのち)、
あはれ、わが戀、わが　おそれ、
これや　わが世。

『君よ、三十(みそ)とせ　むかし　なりき、

われは　山門　――　寺をとこ、
妻　に　親しき　小姓　ありて、
われは　之をば　疑ひぬ――
若き時　ぞ。

『時　の　小姓　は　今や　智識、
名ある　御寺　を　領ずれど、
けがれ無き身　の　徳　に　照れる
眉間　に　傷　あり。――　われ　こそは
罪　ぞ　深き。

『妻　は　いたはし、こゝに　走り、
此世　の　わかれ　を　苦しみつ、
血もて　無罪　を　これの　裏　に
しるし終はりて、われを　見き――

斯くは　云ひぬ。

『「君は　これより　われを　まもり、
朝な　夕な　の　鐘　を　撞け。
人に　知らるゝ　時　し　來なば、
いのち　なき身　と　思へよ」と、
これや　わが世。

『晝の光　を　闇　に　つゝみ、
罪の根　のみは　はびこりつ。
わが　まぼろし　の　影　ぞ　薄く、
響く　おと　にも　おそれ　あり——
われは　老いぬ。

『されど、寂しき　脈　に　さへも

今や　むかし　の　血　は　湧きぬ、
若き　いまし　の　すがた　見ては、
　またも　わが身　の　春　は　來ぬ。——
　　こゝろ　苦し。

『むしろ　死ぬる　に　よきは　今日ぞ、
　われは　最後　の　かね　撞かん』——
低き　うなり　の　聲　ぞ　來たり、
　かれは　忽ち　夜叉（やしゃ）　の　ごと、
　　狂ひ立ちつ。

『待て』と、身づから　返り見つゝ、
　めをと　ふたり　を　ためらひて、
『君は　この場　を　のがれ給へ——
　わが身　苦む　さま　を　こそ

遠く　聽けや。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

鐘　は　ひゞきぬ、春　の　ゆふべ、
花　の　ふゞき　を　散らしつゝ、
鐘　は　ひゞきぬ、春の床　を
醉へる　人ら　の　歸る時――
かれは　如何に。

『あはれ、お竹　よ、けふ　を　共に
この世　離れん、さらば　ぞ』と、
一つ　撞きては　胸　を　もだえ、
二つ　撞きては　身　を　もだえ、――
まろび　伏しぬ。

* * * * * * * * * *

あくる あした の 花の夢 を
覺ます ひゞき は 聽え來ず。
あはれ、もろき は 血しほ のみ か、
さしも 名高き 唐かね も
朽ちて ありき。

田戸の海ぬし

一

田戸 に 山崎、
また 堀の内、
走り水 にも、

また　大津　にも、
春　の　うしほ　は
　朝ゆふ　寄せて、
けむる　霞　の
　奥　より　見ゆる、
淡き　猿島（さるじま）、
　島　とは　云へど、
田戸　の　おやぢ　が
　巣　に　こそ　似たれ。

二

おやぢ、頬赧（ほあか）　の
　かほ　むき出して、
髮　の　ほつれ毛
　二すぢ　三すぢ、

風にもまるゝ
　小舟(をぶね)の上を、
あさは沖より、
　岸よりゆふは、
かろくあま飛ぶ
　小鳥の如く、
しゆツしゆ漕ぐ手の
　手なみも速し。

三

おやぢ、その名は
　猪ノ助(ゐのすけ)ぬしよ、
海に生れて、
　海をぞ戀ふる、
妻はあれども、

また 娘(こ) は あれど、
ありし むかし の
血氣(わかぎ) の 名殘。
ゆるし 得ぬ 子 を
お濱 に 抱かせ、
かれは 寂しき
おもひ に 浮ぶ。

四

妻 の おやぢ は
七九(しちく) に 失せて、
今は その子 も
死ぬべき 時 を、
一つ 軒端(のきば) に
おなじの 住まひ、

もとの 仲 にも
返らば 返れ、
二十三年
共には 住めど、
ひとり びとり の
むしろ を 褥。

五

上總、房州、
かすみ に 醒めて、
曉 の ひかり に
猿島 浮けば、
おやぢ 頬赧 の
かほ むき出して、
またも きのふ の

舟唄　あはれ。
しゆッしゆ　漕ぐ手　の
手なみ　を　見せて、
田戸　と　島　と　の
わたし　を　通ふ。

六

過ぎし　時代　の
ちよん髷　結ふて、
鬢　の　ほつれ毛
二すぢ　三すぢ。
おやぢ、もとより
その歳　知らず、
問へば、『わが身　は
死ぬこと　なし』と。

浦の 人々
　うやまひ懼れ、
田戸の 海ぬし、
　こは その 稱へ。

七

むすめ お絹 が
　世 を 知りそめて、
父母 の 仲 をば
　返す と すれど、
母 は 寂しく
　縫ひ物 つゞけ、
『あれは 龍宮 の
　いたづら小僧。』――
猪ノ も 笑みつゝ、

かたへに立ちて、
『されば──汝が父
身は海坊主。』

高地の靈語

ああ、造化の一角なる
二百零三高地よ、
識あつて待ちしか、この
非情非理の亂り世。

人は文明たゝへて、
あまき酒にほろ醉ふ、
されど、なれは血に醒め、
闇の如く寂寥。

うちに　つゝむ　地熱　の
深き光　かすめつ、
ひとり　寒威　零度　の
空　に　高く　そびえつ。

脊　には　死屍かさなり、
谷　は　人　の　腹わた、
雪　に　赤く　染まるは
うちし　敵　と　その仇。

野犬　こゝに　來たりて、
性　を　更へし　おほかみ、
凍る肉　を　食みても、
誰れ　を　恨む　この民。

のろひ　多き　罪　をば、
嗟、なまぐさく　吹く風、
われは　之に　乘りて　ぞ
渡り來ぬる　死の畔。

骨　と　骨　の　間に
祝ひ　の　種　播きたり、
肉　と　肉　の　間に
萠ゆる　種　を　播きたり。

百年　劫果　含めて
あざり行かん　その種、
とこしなへに　新たの
生命　延さん　その羽根。

嗟(あ)、再びは　のろはで、
　風よ、北に　舞ひ行け。
われは　黎明(あけ)　の　靈　なり、
　西に　そは　のび行け。

さらば、高地　——　わが　乘る
　駒　は　ひかる　あけぼの、
遠く　進む　すがた　を
　今ぞ　見よや、ほのぼの。

旭日吟

（遊子、故郷の濱邊に立ちて）

（一）

ああ、とこしへの　朝日子よ。
緑したゝる　松原に、
あしたの　浪を　かき分けて、
登る　すがた　の　勇ましき。

われも　初めて、朝がすむ
けしき　ぞ　いとも　麗はしく、
この世　に　生れ來し　時は、
かくや　いきほひ　猛りけん。

ちから　限りに　泣く聲　の
いづる　涙に　うれひ　なく、
自由に　めぐる　ひとみ　には
ちりも　穢(けが)れ　は　とゞまらず。

五感(ごかん)　の　もとゐ　明らかに、
まよひ　の　風　の　吹き立たず、
母の　乳ぶさ　に　口　觸れて、
淸き　いのち　を　呼吸しつ。

いはひ、よろこび、樂み　の
うちに　育(そだ)ちし　そのまゝ　は、
なが　み光　の　まのあたり
いや増す　ごとく　ありにけん。

（二）

ああ、とこしへ の 朝日子 よ。
緣 したゝる 松原 に、
あした の 浪 を かき分けて、
登る すがた の 勇ましき。

われ 學問 を ならひ初め、
ふみ 讀む 机 前にして、
夕べ に 至る その頃 は、
かくや たゆまで 勉めけん。

ころも を 振ふ 千仭 の
岡 を 觀じて 意氣 高く、
この 大丈夫 足 洗ふ

萬里 の 流れ 身に 秘めつ。
人 は 云ふてふ 螢雪 の
たとへ も 愚か、夜 更けて、
鳥 の 啼く音 に ほゝゑみ の
かげ もの云はゞ、如何なりき。

心 の うちに のぞみ あり、
身 の 苦み を ことゝせず、
學の道 に さち ありて、
胸 に まどひ の ひま 出でず。

たゞ 一すぢに わかちから
進み行く 世 の 樂み は、
なれが 日足 の すぎすぎに

とよさか登る　さま　に　こそ。

（三）

ああ、さりながら、朝日子　も
高き　に　つれて　名　を　得じや。
ああ、朝日子　も　曇りなば、
深き　あはれ　の　動かじや。

戀　と　名譽　の　二すぢ　に
わが道　分れ　入りて　より、
われ　疑ひ　を　いだき初め、
われ　悲み　を　感じ來ぬ。

（四）

われ　初戀　を　知りそめて

若き血しほに觸れてより、
もゆる思はあめつちの
果にも渡るこゝ地しつ。

われには餘る苦みを
詩にも歌にも歌へども、
胸に秘めたる一たまの
たから示さん折失せつ。

その麗はしきをとめ子の
行ゑ追ひつゝ、幾歳か、
嘆く目あてのなきまゝに、
そは只おなじ箱なりき。

再びめぐり會ふ日さへ、

ありし　昔は　語れども、
わが寶　こそ　奥深く
ひそみて　光　なかりけれ。

然れど、ひそかに　取り出でゝ
放てば、闇　も　かゞやきの
風　に　吹れて、絶壁　や
高き　をとめ　の　立てる　見ゆ。

呼べど、答へず、ほゝゑめど、
かれ　喜び　の　色　見えず、
ああ、まぼろし　か、足引　の
山　の　ふもと　ゆ　崩れつゝ。

ひらめく　袖　は　薄がすみ

あかき に 消えて うつり行き、
浪立つ 髮 は 青雲 の
白き 御空 に かげ も なし。

ああ、われ なやむ もの なりや、
こゝろ の 平和 絶えて なし。
ああ、わが思 深うして、
摑む は 熱き 夢 ばかり。

（五）

われ 名 を 求めそめて より、
空しく 爰に 年 を 經つ。
秦 の 始皇 が 英略 も、
われには 靴 の 塵 と 見え。

三千　宮女　亡びては、
野中　の　花　と　いづれ　ぞや。
萬里　の　城　も　くづほれて、
下行く　水　と　また　いづれ。

ああ、アルプス　の　高き　より
敵　の　平野　を　見おろして、
おのが　立ち場　の　雪　を　蹴つ、
うちほゝゑみし　ナポレオン。

ウオータルロー　草　茂く、
吊(とむら)ふ　虫　の　音　にも　聽け。
英雄、ひと日、雲　晴れて、
セントヘレナ　の　月　如何に。

消えて 殘るを『名』と 云へど、
ありて 實なき これ 如何。
老子 一たび『無』を 叫び、
姿 を 深く つゝみけり。

ああ、功名 に あくがれて、
われは 迷ひし ことも あり、
頓悟 の 域 に 身 を 入れて、
さとる と 見えし 時も あり。

（六）

ああ、疑 の なかりせば、
如何に 樂しき 世 なりけん。
ああ、悲 の かげ なくば、
如何に うれしき われ ならん。

さばれ、樂しと 云ふ ものゝ
亡び行くべく 定まらば、
うれしと 見ゆる その事 の
つひに 消ゆべき ものならば、

見よ、夏草 の 生ひ立てど、
露 の もろき に 就くごとく、
わが 疑 と 悲 の
長き を むしろ いのち なり。

『無限』の 池 に 石 投げて
面に ひろがる さゞ浪 の、
一輪 一輪 に 亂れ來て
『われ』てふ ものは 拾ひ得ず。

（七）

ああ、朝日子（あさひこ）　よ、とこしへに
若き姿　ぞ　麗はしき。
われは　わが身　を　求めつゝ、
かくも　心　は　うつろひぬ。

うつる　心　に　且は又
『死』てふ　なやみ　の　加はりつ、
東西　光　うすらぎて、
南北　闇　に　消えん　とす。

さびしく　立ちて　夕風　の
そよぐ　に　まかす　墓　ならで、
戀も　名譽も　疑も

やすらに　受くる　神　なきや。

（八）

ああ、われ、今や、故郷（ふるさと）　の
濱邊　に　立ちて　もの思へば、
昔ながら　の　あけぼの　に
わが魂　は　湯あみしつ。

千重　の　男波（をなみ）　を　かき分けて、
靜かに　登る　朝日子（あさひこ）　よ。
無限（むげん）　の　亂れ　引きまとめ、
われを　圓き　に　就かしめよ。

叙情五篇

伊吹の螢

伊吹山　木々　失せて、
　生ゆる　草葉　短し、
夏　の　夜風　に　しめり、
　煙草（たばこ）　の　火　も　冷たし。

けむり　直ぐ　消ゆれども、
　消えず　殘る　光　よ。
時に　後（おく）れし　ほたる、
　あはれ、重く　飛ぶ　見よ。

悲戀悲歌

さかり　は　十日　過ぎぬ、
　名ある　宇治　に　石山、
おのが　同士　と　別れ、
　いかで　寒き　この山。

何に　こがれて、斯る
　こゝろ細き　さまよひ。
わが身　はじめて　愛しき
　なれを　見たり、この宵。

暗き　ともし火　つけて、
　風　に　なやむ　その樣、
ふわり、ふわり　と　靡く、
　二つ　三つ　の　人魂。

恨み　ある　ものとせば、
　後生(ごしやう)　の　爲め、くよくよ、
こゝに　ことづて　すとや、
　わが　頭上　を　渡るよ。

さらば、無言(むごん)　の　身　こそ、
　われに　寄する　なが骨。
あはれ、露　には　痩せて、
　高き　を　慕ふ　こゝろ根。

螢を踏みつぶせる折に

風　に　涼しき　夜なか、
　粟津が原　の　みち　へ、
かげも　撰ばで　とまる——

ほたる、何の　いけにへ、

病める　ものならば、右、
　ひだり、流れも　あるを、
廣き　まなかに　出でゝ、
　犬　に　食はる　生うを。

小さき　その羽根　折れて、
　飛ぶ　に　苦しくば、また、
草葉　に　逃るべきを、
　投げて、蛇　の　腹わた。

無駄に　亡べと、よもや
　神　も　つくり　置かざらん。
觸るゝ　を　避けて、ともす

その火、頼む　爲めならん。

それも　罪なき　蟲に、
噫（あ）、入らぬ　取越し苦勞、
之を　憐む　味かた、
敵　と　なりし　を　弔らう。

高き　わが下駄　の　齒に、
松　を　漏れて　生き死ぬ、
月の光　を　踏まで、
あはれ、なれを　つぶしぬ。

雲翩々

ああ、翩々（へんぺん）として　飛ぶ雲　の

妙なる　さま　を　仰ぎ見て、
速き　あらし　の　袖　漏れし、
わが身　の　行ゑ　思ふ　かな。

見よ、見よ。
古人　も　歌ふ『はたて』さへ
ちぎれ、ちぎれて、また　別　の
形　を　浮ぶ　その色　や、
濃き　を　逃れて、風足（かざあし）　の
薄き　端には　光　あり。

いや白き　その　ひかり、
照らすが　まゝに　染りつゝ、
一朶（だ）　一朶　に　入れかはり、
また　立ちかはる、そのかげ　の

先き を 爭ひ 走れども、
一步 はづせば、幾萬里——
それ 幾萬里、青き空。

如何なる 靈 の 乘るなれば、
かく 安らかに 渡る ぞや。
われは 片羽(かたば) を うち折りて、
胸に 憩(いこ)ひ の かげも なく、
上に 向ひて あせれども、——
あせる ほど、遠ざかる。

ああ、手は 亡び、足 亡び、
からだ は 亡び失する 時、
雲よ、ながごと、白妙(しろたへ) の
のぞみ や われも 分ち 得ん。

常世の光

（グリュックの『ダイアナ讃歌』の曲に合せて新たに作れる）

あめ地　初めて　二つ　に　分れ、
御空（みそら）　を　踊りて　照り出でたる　光。
とこ世　の　おもて　を　籠めたる　闇　は、
音なく　破れて　かゞやき渡り、
四隅　は　新たに　くらゐ　を　定め、
よろづの物　皆　生命（いのち）　を　浴びぬ――
あめ地　初めて　二つ　に　分れ、
御空　を　踊りて　照り出でたる　光。

靜けき　とこ闇　おのづと　破れ、

御空を　踊りて　照り出でたる　光、
御神(みかみ)の　夢　より　漏れたる　笑み　の
くらきが　中をや　かゞやき渡る。
物　皆　新たに　形状(かたち)　を　受けて、
生命　の　流れ　は　四隅(よすみ)　に　振ふ――
あめ地　初めて　二つ　に　分れ、
御空　を　踊りて　照り出でたる　光。

ねむりは醒めたり

ねむり　は　醒めたり、わが　國民(くにたみ)　よ、
千歳(さい)　つたはる　御稜威(みいつ)　を　仰げ。
けはしき　山々、するどき　流、
どよめく　わだつみ、かすめる　野原、

皆　呼ぶ、皆　呼ぶ、わが　日の本を。

ねむり　は　醒めたり、わが　國民よ、
二千代　重なる　榮え　を　開らけ。
家國　の　うれひ　も、その　わづらひ　も、
われら　が　希望　も、はた　いきほひ　も、
皆　呼ぶ、皆　呼ぶ、わが　日の本　を。

ねむり　は　醒めたり、わが　國民　よ、
三千とせ　鍛へし　歴史　を　振へ。
世界　の　文明　なやめる　ひまに、
われら　が　理想　も、はた　藝術　も、
皆　呼ぶ、皆　呼ぶ、わが　日の本　を。

進むは　生命、拓くは　いのち、

皇祖の　御教へ　そのうち　に　あり。
一つの　言葉　に　不易　の　御門、
國是　の　發展　この民　に　あり。
　皆　呼ぶ、皆　呼ぶ、わが　日の本　を。

われらが　日に　日に　求むる　ものは、
劍　に　あらざる　御靈　の　光。
常世　を　貫く　ちから　に　依りて、
仁義　の　寶　を　亞細亞　に　護せん。
　皆　呼ぶ、皆　呼ぶ、わが　日の本　を。

ねむり　は　醒めたり、わが　國民　よ、
三千とせ　鍛へし　歴史　を　振へ。
世界　の　文明　なやめる　ひまに、
われらが　理想　も、はた　藝術　も、

皆　呼ぶ、皆　呼ぶ、わが　日の本　を。

短曲二十一篇

一 海の響

夢は　おぼろの　花　の　如く
咲きて　見ゆれば、冬の床　も、
ゆふべ　寂しき　海　を　出でゝ、
龍の　宮居　の　玉座　なりき。
ねむり、南に　かしら　沈め、
沈む　かしら　に　香　ぞ　かゝる、
肌　に　つめたき　絹　の　さわり——
これや　寐ざめ　の　かをり　遺す。

ひとり　あたゝか　胸　の　うれひ、

悲戀悲歌

臥して、聽ゆる　濱　を　たどり、
ものに　醉ひたる　乙女すがた、
いとも　しなやか　浪　を　寄する。
あはれ、かくこそ　死　にも　入らめ——
海　の　ひゞき　よ、永劫　の　おもひ。

二　無言の石

云はず、語らぬ　石　を　いだき、
われは　この世　を　泣きに　泣きぬ、
人　の　いふなる　戀　に　あらず、
おのが　受けたる　苦　にも　あらず。
苦　にも　戀　にも　更らに　增して
胸　の　さびしみ　あふれ來なば、

もゆる 思ひ の 肉 は 燒けて、
なみだ ばかり ぞ 熱く 流る。

われに 神 なく、且は 死 なく、
あり と いふべき この かなしみ、
今や 生命(いのち) の 糧 と なりて、
つきぬ わが世 は 石 と 共ぞ。

かれは 『無言』 を 絶えず 生めば、
われは なみだ を そゝぎ繼がん。

三 自然のあゆみ

岩 を めぐりて 行くは 何ぞ、
河つ姫 にや、河つ男(を) にや。

音は　立つれど　すがた　見せず、
見せぬ　すがた　の　裳裾　觸れて、
こゝに　白ぎぬ　あと　を　引くや。

行けよ、流れよ、はやき水　の
澄みて　盡きせぬ　深き道　を――
自然　の　あゆみ　も　斯くぞ　あらん。
われは　物もひ　立ちて　居れば、
目　には　靜かの　かげ　も　浮きて、
身　さへ　もろ共　岩　を　めぐり、
隱れ　去るらん　こゝち　すなり。

岩　を　めぐりて　行くは　何ぞ、
河つ姫　にや、河つ男　にや。

四 殘る憂ひ

われは 高き 磯邊 の
岩 に よりて 默(もだ)せり、
遠つ海 の 疾風(はやて) の
音 に、日 さへ かげれり。
こゝろ こそは この胸
深く 照らす 眞帆船(まほぶね)。

駈ける 道 に 一すぢ
殘る うれひ 悲み、
白く 曳いて、消え行く
天靈(かみ) の 跡 ぞ 身に 入(し)み、
われの 顫ひ おのゝく

肉 を 破る 寂しみ。

あはれ、立てよ、わが魂(たま)、
なれ の 領 ぞ この濱。

五　細き指輪

ほそき 指輪 の ぬし は あらん。
君 は 御手(みて) をば 固く まもり、
大理石 もて 成れる 如く、
人 の 觸るゝ を い避け給ふ。
うべや、ゆかしく 歌ふ 譜 には、
高き しらべ の 籠る 見えて、
海 の 四方 より 渡る 風 も
こゝに 合唱(がしやう) の あまつ樂座(がくざ)。

君よ、御空に　戀は　すとも、
しばし　眞砂の　上に　坐はれ。
春の　かげろふ　はゆく　燃えて、
白き砂　にも　熱は　あるを——
いづれ　卷かるゝ　身　にし　あらば、
來たれ、ひとしく　あつき　胸　に。

六　夢の子

あはれ、わが身の　戀　を　云はゞ、
色は　紫紺　の　とばり　深く、
奥は　紙燭　の　火かげ　暗く、
胸　の　ほのほ　の　燃ゆる　上　を
すぐる　夢の子——あと　を　向きて、

『來たれ、いまし』と、ひそか聲　の
なほも　小暗く、深き　奧に、
身　をば　糸　もて　引く　に　似たり。

されど、覺むれば、朝　の　ひかり
窓　に　わが身　の　ねむり　吸ひて、
いとも　樂しき　夜間　の　おもひ
晝は　かわける　世　こそ　わぶれ。――
君　に　あかるき　定命　ありて、
われは　こを　しも　うつし得じな。

七　薰ゆる火かげ

ともし火　もてる　は　如何なる　子　ぞや。
闇夜　の　あらし　に　ゆらぎて　立てど、

なほ且 その影 大地 に 投げず、
照らす は 世の樣 世 の 有樣 の
奧なる ほろび と その かなしみ と、
沈める いのち の 流れ と 愛 や。
常世 を つらぬく 光 の すゑ の、
漏れ來て、あたりに くゆるよ、火かげ。

聖なる 御堂 の 御壇 に 載れば、
或は 教職 キリスマ 焚いて、
十字架 を 導く 脊な にも 照らん。
さは云へ、こは また 移し も 得じな。——
ともし火 もてる は 如何なる 子 ぞや、
闇夜 の あらし に ゆらぎて 立てり。

八 こはの寂しみ

夢 に 地獄 を 深く 探り、
奇しき ともし火 われは 得たり、
ほのほ、うれひ の 色 に 照りて、
あをき 光 は 死 をぞ 招く。

聖き 御山 の 堂 に 燃えて、
世々に 傳はる それ の 如く、
永劫 の さびしみ こゝに 引きて、
暗く そのかげ ゆるゝ のみぞ。

すゞろ 運びて、此世 に 取れば、
活ける そよ風 照り を 增しつ、
佛龕 の 御佛 いのち 映えて、
われは おのづと 合掌 なしぬ。

夢は さめたり――されど、いまだ
君は わが身に いのち 投げず。

九 檉の木

傳教大師が 印度の 地 より
得來てし 檉（てい）の木、根を 一もと の
枝葉は 高きに 繁りて あれど、
その幹 なかばも、その根の もとも、
寂しや、分身（わかれ）の 若芽を 斷ちて、
たとへば 英雄 子 なきが 如く、
天台 教理を 絶する 如し。
藏（ざう）、通（つう）、別（べつ）、圓（えん）、四教の うちに
三千 寺坊の かげ さへ 消えて、
今 はた いづくに 昔を 訪はん。

大師　が　入淨　以來　の　をしへ、
高き　を　遺して、利機　をば　生まず。

あはれや、樒の木、御山　に　ひとり、
法燈　暗き　を　護る　に　似たり。

十　小暗き道

われは　夢　見ぬ――君　と　ふたり、
つらき　無言　の　裏　を　いだき、
胸　の　奥なる　熱　に　觸れて、
深き　眞洞　の　底　に　落ちつ。

うすく　ほのめく　燈火影　に
前の　御かほ　ぞ――いかに、あはれ――

いとも 白けて、ねむる いき も
旣に 絕えたる 身ざま、死ざま。

膝 に つめたき むくろ 一つ、
重き 呼吸 は 身 にも 迫る、
上 を 仰げば、黑き石 の、
『罪』と 叫びて、おほひ下だる。

さなり、わが魂、これを 避けて、
なほも 小暗き 道 を 戀ふる。

十一 まごふ怖れ

われは 夢見ぬ——海の上 を
君 と 二人 し 蛇 に 卷かれ、

舟　と　もろ共　深み空　の
あをき　最中(もなか)　に　呑まれ行くよ。

力ある　胸　浪　と　どよみ、
熱き　こゝろ　は　雲　と　振ふ、
われに　君　こそ　斯くて　あらば、
まとふ　おそれ　の　何か　あらん。

舟や　かたむけ、潮よ　來たれ、
なほも　海へび　かたく　卷けよ。
おなじ　燃え立つ　火焔(ほのほ)　あげて、
呑めよ、下せよ、沈む　身等　を――

あはれ、安かれ、君　の　かげ　は
われぞ　死　までも　送り行かん。

十二　うれひ一すぢ

鐵 の うるし を 練りし 壁 と
固く とぢたる、闇 を 破り
曉 の 光 の 照らす 如く、
わが身 胸 より つらぬかれて、
いだく 希望（のぞみ） は けふも 亡び、
うれひ 一すぢ 流れ去りぬ。
ながれ去りにし うれひ なれど、
またも 覺むれば、またも 來たり、
沈む こゝろ の 目 には 見えて、
遠く 地平（ちへい） の 線 に 渡る。――
君 は かくこそ われ を 引きて、
ひろき この世 の 野邊 に 住むや。

われ　に　流れて　入るか、去るか——
うれひ　一すぢ、今は　いのち。

十三　時劫の森かげ

時劫　の　森かげ　露　は　しとゞ、
わが　おほ御神　の　足　を　受けず、
　重なる　落葉　の　下行く　水　は、
岩　をば　めぐりて　人　を　刻む。

小暗き　うちより　かしら　見えて、
無言　は　その世　を　つゝむ時　し、
　重なる　落葉　の　ゆらぎ　と　共に、
延びたり　大なる　右手　と　左手。

身づから その手 を 樹 には かけて、
見よ、立ち上れり 石 の すがた、
　あらくれ男(をのこ) の 胸 いと廣く、
常世(とこよ) の 風 をば こゝに 吸ひぬ。

ああ、かれ、戀 なく、苦み なくに、
はじめて この世 に 出でん と するか。

十四 いさゝ聲

重く 垂れたる おのが 髮 を
取れば、『母よ』と いさゝ聲 の
脊な を めぐりて、膝 に 下だり、
酷(つら)き こゝろ の 目には 見えて、

兒等 の うす影 胸 を 纏ふ。
打てど、拂へど、數 を 知らず、
神 の アバドン、蝗 率ゐ、
爐なる けむり に 涌くが 如く、
宿世 來世 の 風 に 乘りて、
つぎへ つぎへ と 群るゝ 影 に、
おそれ おのゝく、寂し ゆふべ。

かれは をみな と 生れ出でゝ、
產まず、生れぬ 刹那 追へど、
なほも 等しく 海の苦 あり。

十五　鍵を與へよ

鍵を與へよ、陰府の鍵を。
いづれ死ぬべきものゝ身もて、
われはあめなる門を戀ひず。

あめに空しく君を入れて、
清き天使を見なんよりも、
あめに空しく君に連れて、
清き天使とならんよりも、
われら諸共身をば投げて、
暗き眞洞に沈み行かん。

鍵を與へよ、陰府の鍵を。
われらいち度も二度も死にて、
胸のうれひを深うしなば、
雲の消えては見ゆる如く、

戀 の 記憶 ぞ 朽ちず あらん。

十六　鏡を碎けよ

鏡 を 碎けよ、わが姉、妹、
映(うつ)れる すがた は 皆 穢れたり。
世に 戀 ありとは 心 の まよひ、
振り袖 重き を 左手(ゆんで) に 取りて、
その身 の 穢れ を 飽くまで 泣けや。
なが夫、なが戀、なが 依る はしら、
いづれも 右手(めて) には 遠き を 引いて、
近き は 夜る の 戸、空しき むくろ。

仇なる 小夢(さゆめ) に 醉ひたる この世、
誰れ をか 恨みん、をみな の 魂(たま) よ。

酒の香 高きに 口づけ すとも、
醒むれば あしたの むくろ と むくろ。
鏡を 碎けよ、わが姉、妹、
映れる すがた は 皆 穢れたり。

十七 蛇の河姥

むかし この石 天を 落ちて、
此世 の 小春 に 目 をば 覺めぬ、
へび の 河姥（かはうば） 之を 慕ひ、
うろこ 輝く 腕 に 卷きぬ。

石 は 泣く泣く 羽がひ 折りて、
水 に 投ぐれば、右 の 羽根 は
瀬 をば のぼりて 鯉 と 浮び、

折れし　左　は　鱒　と　下だり、
落つる　なみだ　は　一つ　每に
ちさき　尾ひれ　の　數　を　產みつ。
年に　いち度　は、眷屬(やから)　すべて
こゝに　過ぎ行く　世　をぞ　のろふ。

秋　の　月夜　を　深く　覺めて、
聽けよ、宿世(すくせ)　の『われ』や　如何に。

十八　熱き眞砂

熱き　眞砂　の　上　を　撫でゝ、
われは　獨り　し　物を　思へば、
遠き　深み　の　波浪(なみ)　は　打ちて、
手なる　下より　ひゞき來たる。

おのが　小胸（をむね）も　爲めに　振ひ、
千々の　亂れは　濱の　小砂利。
なれよ　小砂利よ。ひろき　海に
幾代　打たれて、斯くや　圓き。
なれを　讀みつゝ　ひろひ行けば、
ひとつびとつに　光　添へて、
經にし代をこそ　われに　語れ。

あはれ、海邊の　熱き　砂利よ、
此世は　萬年　永く　繼げば、
われも　いましの　年に　添はん。

十九　酒　興

注（つ）げや、わが愛、今　一ちよくを。

明日は　酒興　の　來べき　か　知らず。
ふたり　この日　を、手に　手を　取りて、
こゝに　歡樂　滿つれば　滿つる。
誰れか　酒の香　あまし　と　いふや、
なれが　いろ香　も　褪す時　あるを。
さなり、けふ　のみ、たゞ　この刹那、
われは　心　に　自由　を　得たり。

天　を　呼ぶ　君、地　を　擊つ　わが身、
しばし　短き　いのち　に　醉はん。
明日は、醒むれば、また　この愛　の
おなじ　味はひ　得べしや、君よ、
時劫、見えざる　鎖　を　曳いて、
われは　悲哀　に　繫がる　身　なり。

二十　悲哀の俘

酒に向へど憂愁(うれひ)は去らず、
取れる盃なみだを湛ふ。
こゝに醉へるはわが肉のみぞ、
いづこ如何なる心の糧(かて)よ——
遠き奥よりかなしみ曳いて、
君よ、わが身は悲哀の俘。
失せし戀となかまへて問ひそ、
胸の苦悶を刻むは久し。

この世なつかし、この世は憎し、
これやわれのみ醒めたるこゝろ。
いづれ亡ぶるこの胸、この身、
私慾私憤に敵あるべしや——

遠き奥よりかなしみ曳いて、
君よ、わが身は悲哀の俘。

二十一　苦悶の鎖

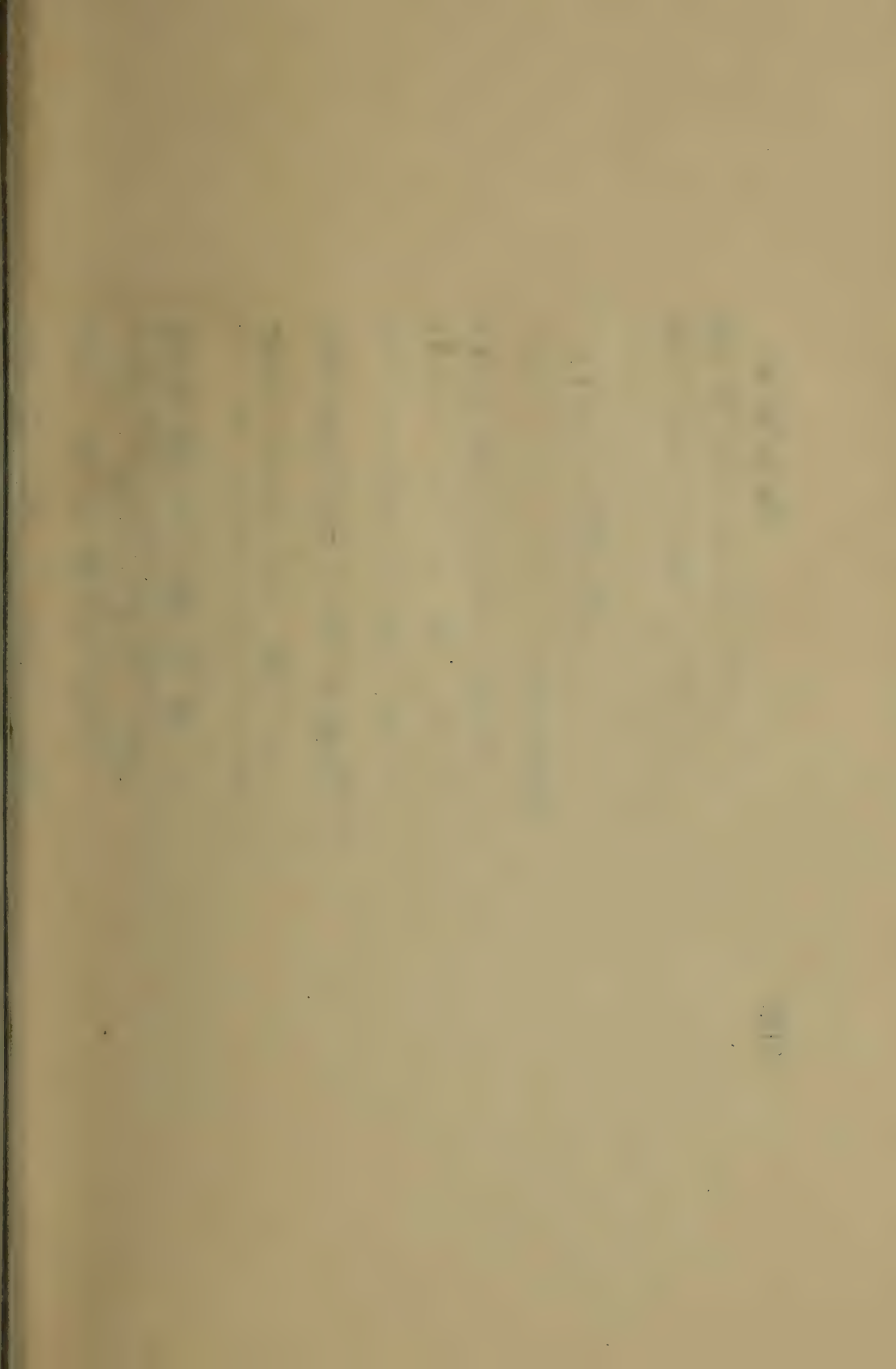
（故野口寧齋君に）

ああ、君、苦悶をいだいて逝きぬ、
わが身はなほそを胸にし生くる、
生くると死ぬるは、例へば影の
その身に添へると添はぬに似たり。

父母より受けたるこの世のもだえ、
一息毎にもいのちを刻み、
その音天地の間に落ちて、
久遠のさゞ波その輪をひろぐ。

ああ、君、その輪 の ひろがる なべに、
底なき 記憶 の 淵 にや 沈む、
わが手 を 延ばして 救ふと すれば、
殘るは まぼろし——苦悶 の 鎖。

延び行く その端、君、今 陰府(よみ) に、
われ 他の端 をば こなた に 握る。

叙事小曲 脱営兵

（本舞臺、中央にアーチ形を構へ、その内は凡て悽愴たる墓場、月夜の景。下手アーチ形の側に樂座の設けあるべし。）

樂座（合唱）

小夜吹く　嵐も　ねむり　に　入りて、
奈良　の　孤寂　を　招く頃、
並み立つ　石塔　荒れにし　庭　を
照らす　は　月かげ　――　人の影。

（脫營兵、おづおづ登場。）

脫營兵（獨白）

ああ、營所をこゝまで逃げては來たが、心はわしといふ身體を逃げる

ことは出來ない。――今日、國元から手紙が來て、開けて見れば、女房が二人の兒を遺して死んでしまつたと――その上、永年世話になつた、義理ある母の大病。二人の兒はどうして居る。村のものと云つては、いづれも、揃ひも揃つて薄情な人ばかり。不斷から、わしの家を穢多同樣に取り扱ひ、――　とても、世話を見て吳れやう筈はなし。――これは、御國の爲めには惡い事と知つては居るが、兎や角の心配から、透を見て、營所を逃げて來たものゝ――あとはわしが自訴して出るとも、また、百萬の軍隊でも出來ない奇功を、わし一人でやつて死なうとも、それはわしの決心一つにあるのだ。――ああ、それにしても、胸がどきまぎして、もう、今から地獄にでも落ちて居る心持がする。この物凄い墓場は、たゞ無言で、わしを笑つて居るやうだ。もう、かうなつては、賴るものは神、佛、ばかり。――どうか、神さま、佛さま、暫くわたしが自由を許して下さりませ。お鑁の樣子さへ見て、安心が出來ますれば、この身體は粉末微塵になつてもよろしうムい升。賴み升。賴み升。――ああ、何だか胸が苦しい。――それは

さうと、この邊に尋ねて來た墓のある筈。――おゝ、之が女房の埋つて居るところか。――お民、もう、會ふことは出來ないのか。子供を殘して死んだ上に、今、お袋の大病。わしは御國へ對して濟まぬことだが、營所を逃げて、こゝまで歸つて來たわい。情けないことになつて呉れたなア。――おお、向ふを來るは何者。――

樂座（合唱）

その影　あり　とは　知るや　否や、
足音　ぞ　ひそみて　進み來る――
罪ある者　をば　からめ取る　と、
惡魔　の　一隊　か、はた　追ひ手。

脱營兵（白）

やア、こは不思議の怪物ども。――どこかに隱れて、やり過して呉れう。

（と、隱れる。）

樂座（合唱）

死を　さながらの　深き夜　に、

出で來たりけり　魔鬼(まき)の　群(むれ)——

　これや　羅刹。

（どろ〳〵にて、覆面黑衣の怪物、數名登場。そのうちの頭領、運命神奇なる杖を以て他を差圖し、脫營兵の隱れ居るを示めす。）

樂座（合唱）

天網(てんもう)　のがれ難し、

運命、人　を　のろふ。

（脫營兵、恐れおのゝく。怪物、無言にて、之を引き出す。運命神の杖、鬼火を發す。渠、之を差し延ばして、その尖をまわせば脫營兵くるくるまわる。）

運命神（獨唱）

脫營兵

影よ、影よ、
　人は影なり。
闇を食ふ
　人は影なり。
黑き杖の
　ちから結びて、
われはこゝに
　汝をのろはん。――
刼風、毒龍、ラルロ。
　　（杖を以て印を結ぶ。）

樂座（合唱）
　杖もて印を結べば、
　先づ露兵現はる。
　　（露兵、二名現出。運命神、消ゆ。）

露兵二
やア、こは日本兵。
露兵一
何、日本兵が――
（兩兵、左右より脫營兵を蹴る。）
露兵一
われらは日本軍の爲めに殺され、遂に冥途へ送られたが、
露兵二
今、呼び戻されて、來て見れば、こゝに憎き日本の兵士。
露兵一
さいはひ、意氣地のない樣子――
露兵二
こゝが最も良い仕返し時――
一、二
綱を以てしばつてしまへ。

（脱營兵、縛せらる。）

樂座（合唱）

その　奇しき　綱　には、

　千斤　の　魔力　あり。

その　重き　繩目　に、

　人、手　さへ　すくみたり。

露兵一、二

えい。

（と、また蹴り倒す。）

樂座（合唱）

家なる　妻　には　會はで　別れ、

恩ある　老母　は　やまひ　篤し――

營所　を　のがれて　歸り來てし

心は　さすがに　優しけれど、
あはれ、御空を　落ちし　鳥、
胸に　傷持つ　苦しさ　よ。

露兵一

何をもがくのだ。

露兵二

そこ動くな。

（さ、また左右より蹴る。）

脫營兵

ヤア、默つて居れば兎や角と——目の黒い間は、この身も日本帝國の軍人だぞ。

露兵一、二

何だ、この死にそこない奴が。

（また蹴る。）

脫營兵
ちエい。

（さ、立ち行かんさすれば、身は後ろ手。どろ〳〵にて、運命神また現はれ、結べる印を解けば、露兵消ゆ。これより段々、月光暗くなる。）

樂座（合唱）
本意なき　繩目　に　引き繫がれて、
ひそかに　ぬぐへる　淚　の　まなこ——
月　さへ　曇りて　小暗き　この場、
ためらふ　前には　老母　の　御かほ。

運命神（獨唱）
劫風、毒龍。ラルロ。

（また印を結べば、どろ〳〵にて、老母の幻影、現出、運命神、消ゆ。）

脫營兵（白）

おお、母上――

老母幻影（獨唱）

あけ暮れ　鎭守（ちんじゆ）　の　神　に　詣で、
祈りし　願ひ　は　いまし　故ぞ。
わが身　は　年波（としなみ）　安く　越えて、
この世　を　今こそ　渡り來ぬれ。
先祖　の　家の名　をば
かまへて　穢す勿れ。

脫營兵（白）

それでは、母上は、もう、あの世へ――申し、申し、母上――

（どろどろにて、運命神、また現はる。）

運命神（獨唱）

ラルロ。

脫　營　兵

樂座（合唱）

見る見る　變りて、妻　の　すがた。

（どろ〳〵にて、老母の幻影、妻の姿となる。運命神、消ゆ。）

脫營兵（獨唱）

おお、お民　か――子等　を　如何に。

妻の幻影（獨唱）

朝ゆふ　食事　の　席　に　坐はり、
　いのりし　言葉　は　君　が　爲め。
二人　の　子等　をば　夜る　の　火かげ、
　寂しき　孤獨　を　まもりたり。
　　御國　の　爲めに　盡し、
　功績　を　示めし　給へ。

脱營兵（獨唱）

さはれ、二人　の　子等　は　如何に。

樂座（合唱）

ああ、わが妻　よ　と　近づけば、

また　現はれし　運命神（うんめいじん）。

（どろ〳〵にて、運命神現出、妻の幻影、あさずさりして、消ゆ。）

運命神（獨唱）

天網　のがれ難し、

運命、なれ　を　のろふ。

（神、また杖をまわせば、脱營兵、くる〳〵まわる。月光、明くなる。）

脱營兵（獨唱）

あはれ、老いたる母に別れ、
なほも妻にはあざけらるゝ。
今朝のたよりを受けずあらば、
もとの心は續くべきを――
敵は滿洲にあらず、
妻子ぞほだし。――
あはれ、如何なる天魔入りて、
斯くやわが身を迷はしむる。

運命神（獨唱）

そこに無言の敎へあり、
そこに無形のつるぎあり。
切れや、こゝろを繋ぐ綱を。
解けや、その胸照らす文字を。

脱營兵（獨唱）

われは　營所　を　のがれ來たり、
ああ、神　にも、佛　にも、
この胸、この身　は、見捨てられしか。

樂座（合唱）

解けや、その胸　照らす　文字　を。
切れや、心　を　繋ぐ　綱　を。

脱營兵（獨唱）

この胸――この綱――この身――この手。

（怪物、すべて出で來たり、脱營兵の上にうち群がり、運命神の杖につれて大くまわる。大どろ〳〵にて、舞臺を眞暗にし、更らに營所の門前を現はす。）

番兵（獨白）

今のは夢であつたか。――けふ來た手紙を心配して、つい〱としたのであつたか。――こんな弱いことでは駄目だなア。

樂座（合唱）

身　を　もて　國　を　護る、

死すとも　おそるべしや。

（夜中行軍の一隊號令に從つて歸り來たる。番兵直立、之を迎ふ。喇叭の音にて幕。）

冥想詩劇 海堡技師

はしがき

こは、世の所謂悲劇にあらず、喜劇にあらず、さりとて、又在來の夢幻劇にもあらず。その主人公の冥想、一貫して、之に始り、之に終るの故を以て、ここに之を冥想劇と稱したり。

われ、口語を以て、一種の詩劇を作らんと欲すること久し。この著は、乃ち、その手始めなり。されど、讀者よ、之が辭句中に、たま〳〵、文語法を挿入せし所あるを見て、直に之を笑ふこと勿れ。作者、多少の用意なきにあらず。乃ち、平旦なる筋を渡る時は、そのせりふは全く口語に從ひたれど、感情の激したる所、嚴格なる想念の顯はるゝ所、獨白等に於ては、時に或は口語に近き文語體を用ゐたり。蓋し、かゝる場合は、その言葉の主が殆ど俗界を脫したる心持ちあり、觀者に一時、この人物の外境を忘れしむべき必要あるを以てなり。

この劇を場に上すものありや、否やを知らずと雖も、われはこの體を以て、是より更らに一步を進めんと欲するものなり。

登場人物

知事
代議士數名
縣會議員數名
赤鯛王（日本代表）
鎚奴（希臘代表）
珊瑚姫（印度代表）
眞珠星（南洋代表）
百合子（希伯來代表）
浪の靈金むく
おなじく銀むく
おなじく瑠璃兒

技師長星野玄道
お杉
名主吉次
おなじく妻お高
おなじく娘お花
僕右作
潜水夫重助
男女土方多勢
船頭數名
技師下役數名
士官、官吏、多勢
陸軍大臣

序の幕

第一　名主宅燒香の場

（本舞臺、中央、名主の座敷、お花の死骸を置き、その枕もとに線香などの用意あるべし。下手に入口、枳殼の垣根をあしらふ。）

吉次（登場しながら）

お高、玄道さま　は　まだ

見えぬか。

お高（線香を焚き加へながら）

はい、まだ　見えませぬ。

先刻（せんこく）　人　を　遣（つか）はして

お知らせしたで、もう、やがて——

吉次

さらば、御座（ござ）ろが、この　變事——

お高、困つた　ことじや　なあ。

お高

さればで　ムんす、良き緣で、

玄道さま　と　わが娘

婚儀（こんぎ）　を　あす　の　けふ　一と日、

俄（にはか）に　病みて　この樣　は、

まさしく　戀　の　ねたみ　ゆゑ

杉が　害毒——

吉次

やあ、おろか！

證據　も　ないに　人の子を

恨むは――

お高

それは、今　醫者　の

お言葉　にても　知り給へ。

玄道さま　の　お宅　まで

きのふ　あがつた　輩のこと、

そこに　名高い　珊瑚樹　の

實　を　飲ませたが　この終末。

吉次

さあ、その如く　疑へば、

疑ふ筋　は　ある　なれど、

まさかに　それは――

お高　いや、確か——

（お杉、生垣の蔭にて立ち聴き、恐れをののく。この時、玄道、花道より登場。）

お杉　おお、玄道さま。

玄道　お杉さん。

お杉　わたしは　人を　殺しヤせぬ。

玄道　刃物を　以ては　殺さねど、お茶　には　毒　を　入れて！

お杉　ええ！

玄道
さ、それは　どうでも、人前(ひとまへ)　を
けふは　知らぬ　と　云ひ張れよ。

お杉
はい、存ぜぬ　と　申し升。
よく〱、まあ、來ては　下さつた。
わたしヤ　獨りで　この家　の
御門(ごもん)　を　這入り　かねて居て。
どうぞ、お先き　へ。

玄道
さあ、行かう。

（兩人、門を入る。お杉、下に顫へて居る。）

お高
玄道さま　か。

吉次

これは　良く――

玄道　さらば・御免　を　被りて――

（先づ線香を焚きて、悲みのこなし。）

さて　この度　の　御變事（へんじ）　は、

詳しく　聽けば、不思議　よな、

のぞみ盛り　の　若い身　を、

よくも　緣なき　死に分れ。

されど、わが身　は　その初め

江州　比叡（ひえ）　の　山ごもり、

十二ケ年　の　業　さへも

つひに　空しき　尾なが鳥。

森　の　ふる根　を　飛び出だし、

まよひ　苦む　その果　に、

こゝに　まゐつて　侘び住ひ、

計らず　國　の　大計　を
思ひ付いたが　わが　生命、
しばし　の　世をば　樂み　の
友　と　定まる　その人　は、
ああ、今は　早や　かげ　ばかり——

お高
そんなら、末は　お獨り　で——

玄道
されば、獨り　を　忍びつゝ
もとの　坊主　が　する　事業、
海　の　眞中　に　海堡　の
島根　を　築く　たくらみ　も、
こゝに　わが身　を　引き止めて
慰むもの　あれば　こそ。
乃ち、死人　が　思ひ出　も

わが家　の　珊瑚　ふる樹かげ——

お高

さあ、その珊瑚　毒　あれば、

濃い紫　の　實が　因果。

お杉

ええ！

お高

その胸　に　答へては、

白状　せずに　居られまい。

吉次

お高、そりヤ　また　何　云やる、

證據　も　なしに　口外　は

却て　そちの　咎　じヤぞや。

お高

それじヤ　と　云ふて——

吉次

だまり居れ。——

いや、なに、玄道先生　よ、
娘　は　死んでも　怨むまい、
君が　事業　の　護り神。
さては、獨り　を　之が爲め
送り給ふ　の　御決心、
却て　さい先き　よしと　見て
こゝに　一獻　祝ひたい。

玄道

いや、先づ　それは　置き給へ。
われ、全國　を　托鉢　の
巡歷　こゝに　十餘年、
破戒　の　僧　の　よるべなき
その　半生　の　苦み　を

この　二とせ　に　操り返し、
要路　の　人　を　說き勸め
やうやく　出來た、糸ぐち　は――
これぞ　光　や――身の外　に
わが身　の　慾　を　誘ひて、
殘る　まどひ　の　かげもなく、
死に行く人　の　たましひ　ど、
淸き心　を　末長く
くらべ見る　のが　何より　ぞ。
さはさりながら、この　お杉
招き給ふ　は――

お高
さあ、それは――

吉次
お高　の　獨り合點　以て、

何か　問ひたき　ことあり　と――

玄道

それは　無駄事、吉次どの、
われも　お杉　に　用　あれば、
これより　つれて　歸り升。――
なげき　給ふな、お花子　は、
親　の　ゆるし　の　あるからは、
われに　取つての　家の妻。
庭の　珊瑚　の　根　を　堀りて、
そこに　最後　の　和尙ぶり、
妻　と　僧と　を　葬りて、
海堡技師　の　世　に　入らん。

吉次

あつぱれ、めでたき　御覺悟　や。
お花　も　さぞや　冥途　にて――

お高
よろこぶ　ことで　ムんしよう。
玄道（また、線香を焚きて）
昨夜　居たなら、死に　のぞみ、
云ふべき　こともあつた　のに——
ああ、殘念な　別れかた。
あすよりは、かの　樹かげ　にて、
わが爲す　わざを　看て呉れよ。
（お杉に向ひて）
これ、お杉さん、そなた　にも、
花子　は　長い　お友だち、
線香　一つも　手向け　して、
死人の靈　に　分れては
どうじヤな。
お杉　左樣　致し升。

（お杉、おづ〳〵上つて、線香を焚き、わツと泣き出せしが、何言も云はず、またもとの坐に下りる。この間、お高、吉次、玄道の思入れ、それ〴〵あり。）

玄道

他行の爲めに死に目にもあはで別れたかなしみは、ああ、吉次どの、お高どの、推了しても下されい。――それではけふの葬式は晝後の事に致したい。今はこれにてお暇を――さあ、お杉さん。

お高（たまり兼て）

これ、お杉。

お杉（身をすくめて）

わたしは　何も　知りませぬ。

吉次

まあ、けふは　行け。

（玄道、庭に下りて、お杉の前を過ぐる。）

道

さあ、來やれ。

第二　珊瑚樹下舟出の場

（本舞臺、中程より土手、石垣の上なる亞鉛家根の小庵。椽がはの隅近く、二抱へ程の珊瑚樹の古木、其實はいまだ半ば赤し、根には、新しき墓標を立てる。庭に、熟して落つる黑き實を散らす。下手並に正面、直ぐ海の體。）

右作（庭にありて）
これにて　いやな　墓堀り　も
やうやう　方が　附いた　わえ。
こんな　をかしな　葬式　は
三界　初めて　見た　ものだ。
旦那　が　長い　袖　を　着て、
あたま　散切り和尙　とは、
これも　けふ　見た　話しだね。
珊瑚　の　かげ　は、こよひ　から、
ちひさい　寺　と　成り居つた。
お杉（奧より出で來りて）
右作さん、まあ、腰かけて、
お茶　でもや。
　　右作　これ、お杉さん、
お前は　うまい　ことを　した。

ひょつくり　ひょつと、いろ戀　の
かたき　が　死んで　から　成れば、
この家　の　人　の　あと釜　は
お前　の　外に　誰れ　あらう。

お杉

そんな　無駄口　云うた　とて、
わしには　わしの　胸　が　ある、
どん百姓　の　土くさい、
お前　の　知つた　ことじヤ　ない。

右作

うはさ　を　すれば　影　と　やら、
旦那　は　風呂　の　お歸り　じヤ。
お茶　でも　飲んで——

お杉

お歸りよ。

（玄道、登場、手拭を下げて、風呂より歸れる體。）

お杉、右作

お歸りなさいませ。

玄道

おお、お杉さん、來てか。

お杉

はい、

こよひ　來いと　の　御言葉　に、

わたしヤ、時刻　を　待ちかねて。

玄道（椽がはに腰をかけて）

それは　よくこそ。――これ、右作、

あの　無作法な　掃き方　よ。

もつと　奇麗に　掃除して、

墓　の　まはり　を　こわすまい。

右作

はい、はい、それでは　直し升。――
ああ、人間　も　から　成つて、
死んで　しまへば　まづいもの。
旦那は　長う　生き延びて、
海堡（かいほう）　と　やら　いふ物　を
うまく　出かして　下されい。

玄道

わしも、務めて　爲るからは、
お前も　無事に　ながらへて、
わしの　仕事　を　見てくれよ。

右作

右作　は　これで　病氣なし、
たゝかれやうが、ぶたれうが、
死ぬる　いのち　は　持たぬ　わえ。

お杉
わたしも、それじヤ、右作さん の
からだ を 分けて もらひたい。

玄道
然し、杉さん、人の身 は
いつ 死ぬる かも 計られぬ。
たとへば、旅に 出た人 の
つま子 に 會はず 倒れたり、
をんな に しては、また、腹 の
子供 を 見ずに しまつたり、
富者 は 慾 に 死ぬ あれば、
貧しき者 は 飢ゑて 又、
ほかに うち死に、狂ひ死に、
戀 の ほむら に 燒け死に も、
雷 に 打たれて 死ぬも 死ぞ。

また、他の人を殺したら、
おのれも死ぬる罰を受け、
火責め、水責め。拷問の
苛責は既に地獄ざた。
しかし、杉さん、人間は、
どうせ死ぬなら、國の爲め、
人の爲めにも成つて死に、
誰れしもいやの犬死には
すまいものじヤぞ。

お杉

それは、皆

おなじ心でムんしよう。

右作

さすが旦那は和尚さん、
死の講釋はうまいもの。

海堡技師

わしも　これから　心して、
犬死にヤ　すまい。

玄道

は、は、は、は、は。――

右作　も　けふは　疲れたらう、
歸つて　休め。さりながら、
あすは　いよいよ　わが仕事
仕初める　から、早く　來い。

右作

それでは、旦那――お杉さん、
あとは　お前　に　頼み升。

お杉

承知しました。あす、お前、
早く　來てあげ　成さんせよ。

右作、退場）

玄道

お杉さん、この　手拭　を
あちら　へ　懸けて——

お杉

あげましよう。

（お杉、手拭を受け取りて退場）

玄道（庭に下りて）

ああ、珊瑚の樹　ぞ　わが　救ひ主、
いまし　は　水底（みそこ）　の　玉枝　を　離れ、
水ぎは　に　吹き來る　大氣　を　吸ひて、
かくもや　育つか　古木　の　すがた。
若し　こを　見ざれば、この　拾餘年、
空しき　さまよひ　尙　踏みとめず、
わが身　を　蔽はん　陰　だに　無けん。
心　は　あらし　と　狂ひに　狂ひ、

わが　追ふ道　には　つゞら　の　坂路、
本來　小規(せうき)　を　畫する　嫌ひ、
われから　進んで　難事　に　當る——
ああ、その難事　も　目あて　は　なくに、
空想　のみ　こそ　燃え立ちにしか。
四十とせ　孤獨　の　熱　をば　保ち、
この　靜　開けし　田戸海(たどうみ)　見れば、
わが世　の　いのち　も　おのづと　融けて、
自由に　流るゝ　うしほ　の　極み、
遂ぐべき　のぞみ　は　輝き出でゝ、
はびこる　この樹　の　樹かげ　を　住家、
わが身　の　胸　にも　光　は　滿ちて、
戀　こそ　うづもれ、その奥　までも、
身づから　信ずる　心　ぞ　照らん。
わが妻、わが戀、若し　靈　あらば、

わが爲す　事業　を　樹かげ　に　護れ。

（お杉、茶を入れて、再び登場。）

お杉

お茶　召しあがれ、玄道さま。

玄道（椽に上りて）

いや、濟みませぬ。

お杉（あまへる體にて）

玄道さま、

あなたが　こよひ　疾く　來いと

わたしを　呼んだ　その事　は——

玄道

ほかでも　無いが、たゞ　一つ——

先づ　見せたい　は　この急須。

（玄道、立つて奥に入り、急須を持ち出づる。）

これは　どうした　急須　じやな。

お杉（見て驚き）
これは　昨日　二の棚　に
置き忘れたが——

玄道
その證據、
中に　這入つた　黒い實　は——

お杉
紫ずんだ　色　見れば、
あの　珊瑚樹（さんごじゆ）　の　實　の　やうで——

玄道
誰れが　入れた　か。

お杉
わしヤ　知らぬ。

玄道
いゝや、何程　隱しても、

こゝで、知らぬ　は　云はされぬ。
如何に　毒　とは　云ひながら、
この實　ばかりじヤ　殺せまい、
ほかに　入れた　は　何ぐすり——
この茶　は　そちに　飲める　かや。

お杉

ええ、それは——

玄道

さあ、飲める　かや。

お杉（煩悶のこなし、遂に決心して）

あの、玄道さま、わたしヤ　今
尼（あま）に　成りたう　ムり升。

玄道

その決心　は　御もつとも、
然し、髮を　剃らうが、剃るまいが、

人を殺してその罪を
のがれうことは六ケしい。
急須のなかの毒藥を
一緒に棄てに行きがてら、
そちを招いたその譯は
海の上にて話したい。
さいはひ、こよひ月は雲、
暗きをしほに、これ、お杉。
（と、玄道、うながすこなし。）

お杉　はい。

玄道
わが舟に乘つて呉れ。

お杉
あなたの御座るところなら、
天竺までも御一緒に――

玄道
それでは、海の上に出て——
舟の用意はしてあれば、
あれへ——

お杉
それでは、まゐり升。

（兩人、用意の舟へ下りて行く心。）

第三　富津の海人柱の場

（本舞臺、すべて闇夜の浪間の體、遠く伊豆、房總の山々を黒める。）

金むく（金色の着附けにて）
銀むく　出たか。

銀むく（銀色の着附けにて）
海堡技師

金むく　出たか。

瑠璃兒（瑠璃色の着附けにて）

　璃瑠兒　も　出たぞ。

　　　　　金むく

　　　　ま近かに　寄れや。

銀むく

　眞闇（まやみ）　の　海　は——

　　　　　瑠璃兒

　　　　われら　の　領（りやう）ぞ。

金むく

　歌ひて　共に——

　　　　　銀むく、瑠璃兒

　　　　浪間（なみま）　を　踊れ。

三者（合唱、踊る。）

　われら　三人（みたり）　は

浪間に浮きて、
浪のうね〱
その夜を踊る。
遠きひゞきは
われらの——
金むく
舟が來た。
銀むく
實(げ)に舟が——

璃璃兒
舟が來たなら、

三者
逃げ込まう。

（三者、引き込むと、玄道、身づから舟を艤し、お杉と共に登場。）

海堡技師

お杉
玄道さまや、この闇に
寂しい　海の浪　分けて、
どこまで　舟を――

玄道
進む　とや。
こゝまで　來たが　おもはくで――
五拾四尋　の　底　深み、
石　を　築いて　海堡の
第一工事　初める　は、
乃ち、こゝぞ。

お杉　それならば、
かねて　お話し　した　通り、
富津の海　で　ムんすか。

玄道

それぞ――初めて　そちに　聴き、
思ひ當つた　この工事、
そちを　女（をんな）　と　云ひながら、
さかしい　智慧　は　玄道　が
身に　あり難く　受け繼ぎて、
あす　より　多勢　手　を　下だし、
われは　世外（せぐわい）　の　監督者。
世にも　人にも　のぞみ無く、
たゞ　一心　を　この海　に
さゝげまつゝた　國の贄（にへ）。
十とせ、二十とせ、その末　は、
第二　第三　工事　をも
自然　の　島　と　築きあげ、
そち　が　願ひ　は、敵國　の
あだ　に　備ふる　砲（はう）　として、

その數　あまた　据わるべし。
その時　こそは　おほ君　の
宮居(みやゐ)　も　安き　東京灣、
觀音崎　の　こなた　には
塵も　非禮(ひれい)　は　受けさせぬ。

お杉

それで、わたしが、この日頃、
人には　馬鹿　と　歌はれて、
語り暮した　おもはく　も
嬉しう　かなひ升　わいな。

玄道

それは　もつとも、さりながら、
深き底　より　つき上げて
浪　の　おもて　に　島　三つ　は、
たゞ事　にては　出來(でき)まいぞ。

お杉

わたしヤ　心で——

（この時、いな妻あり。）

玄道

祈るとや、

たゞ　それ　のみで　かなふまい。

そちを　こゝまで　つれ來た　は、

ほかに　大事　を　頼む　爲め。

お杉

お爲め　に　成らう　ことならば、

そりヤ　何ごとも——

玄道　してやる、と。

そちも　よく　知る　やまと武、

その尊　には　妻　ありて、

御名　を——

お杉

立花姫　とやら、

をつと　の　難儀　救ふ　爲め、

丁度　この海、このあたり、

おん身　を　投げて――

（また、稻妻雷の音。）

玄道

失せ給ふ――

されば、そのこと、そち　にして、

左程　わが身　を　思ふなら――

お杉

ええ！

玄道

また、死んで　吳れまいか。

昔から　云ふ　人ばしら、

二拾、三拾、年を　經て、
海堡島と　浮きあがり――

お杉

いやじヤ、わしヤ　いや、死んだなら、
お顔　見られう　筈は　ない。
死ぬる　代りに、わたくし　を
尼に　して、のう。

玄道

これ、お杉、
そちは　この世　に　返つても、
生きて　居られう　ものか。そも、
賢い　だけに、そちは　又
戀の　妄執　深ければ、
海に　沈みて、わが爲めに
國の　工事　を　根に　長く

護つて　呉れよ。

（斷行の機迫ることなし。また稻妻、大雷の音。）

お杉

いやじや、いやじや。——

ああ、その　お顏、その　お目　よ。——

誰れぞ　助けて　下さんせ。

（また、稻妻。）

稻妻　までが　あの通り

わたしを　責めて　おどす　のか。

（また、大雷。）

ああ、かみ鳴り　も　また　わしを——

たとひ　稻妻、かみ鳴り　が

責めに　責めても　厭はねど、

あなた　と　いち度　死に別れ、

住む世　違へば、またと　又

なんで　わたしが　浮ばれう。
生きて　さへ　居ば――

玄道（にじり寄りて）
これ、お杉――

（稻妻、大雷。）

お杉
あれ、また、雷が　鳴る　わいな――

（玄道の手にすがり付きて。）

わたしヤ　千年　會はいでも、
あなた　と　同じ世　に　住んで
居たう　ムんす。

玄道　これ、お杉、
こゝで　稻妻、大雷　に
打たれて　死なば、どうするぞ。

（玄道、お杉を振り拂ふ。）

お杉（身を避けて）

ああ、その　こわい　お顏つき――
こんな　難儀（なんぎ）と　知る　ならば、
來はせぬ　ものを――

玄道

これ、お杉、
ええ、聽き分け　は　出來ないか。

（玄道、お杉を捕へる。）

お杉

どうぞ　助けて　下（くだ）さんせ。
わしヤ　死にたうは――

（お杉、泣き伏す。）

玄道

ええ！　ないと――
かう　しばつても、まだ、無いか。

（玄道、お　を縛す。）

お杉（縛られしまゝ涙をぬぐひ）

ええ！　玄道さま、もう、今は
覺悟　致して　ムり升。
どうとも　思ふ　存分　に
されるが　わしの　本望ぞ。
人　の　はかない　身の上　を、
あの、先刻　の　御講釋、
思ひ當つて　ムり升。
せめて　犬死に　せぬ　やうに、
お爲めに　成つて——

玄道

ああ、お杉、
そう　聽き分けて　呉れる　なら、
そちが　罪業　うすらいで、

（毒薬入りの急須を出す。）

この　毒薬に　殺された
お花　も　さぞや　喜ばう。
急須　の　毒　と　もろ共に
この　ひろ海　に　沈むなら、
罪と　なやみは　無くなつて、
そちが　心も　清い　ぞや。

（急須を投げ込む。）

それでは、かわいさう　なれど、
この　おほ石　に　從つて、
水底　の　神　に　成つて呉れ。

（石をお杉の身に結びつける。）

お杉

ああ、情け無い——

玄道　これ、お杉。

お杉（手を合はして）
何んにも　云はぬ、玄道さま、
どうぞ、末とも　この　わしを
おぼえて　居つて　下されや。

玄道
わしも　男じヤ、この上は
そちが　願ひを　無には　せぬ。

お杉（全く覺悟して）
さらば、わたしは　水底にて——

玄道（石を手離さんとして）
きつと　護つて吳れよ、杉。

お杉
南無——玄道さま。

玄道
杉、さらば。

お杉
南無阿彌陀佛！（お杉、沈む。）

玄道
ああ、これが――

（分れかと、玄道、暫く歎息、やがて舟中に立ち上る。）

玄道
南無――復　浮ばね――南無阿彌陀佛！
ああ、天、ひそみて　わが　この秘密、
一心不亂　の　つとめ　に　照れよ。
わが世　は、乃ち、海　その物　ぞ、
わが身　は　浮木　の　響　に　燃えて、
燒け死ぬ　罰をも　辭する　に　あらず。

（玄道、また舟を艤して退場。あとに月、雲を出づる。）

金むく

銀むく　出たか。

銀むく
金むく　出たか。

瑠璃兒
瑠璃兒(るりこ)　も　出たぞ。

金むく　ま近かに　寄れや。

銀むく
眞闇(まやみ)　の　海　は――

瑠璃兒　われら　の　領ぞ。

金むく
歌ひて　共に――

銀むく、瑠璃兒
浪間　を　踊れ。

三者（合唱、踊る）
われら　三人　は

浪間に浮きて、
浪のうねうね
その夜を踊る。
遠きひゞきは
われらの母ぞ、
いづこ如何なる
住まひにありて、
身をば生みしか
知るよしなしも。

中の幕

第一　第一海堡懷舊の場

（本舞臺、すべて海上新築の石垣島、土手様のところに、短き松など植わる。所々に青草をあしらふ。男女の土方、大勢晝飯を食ふ體。）

男一（下手より、空畚を擔ぎて）

早く　成りたや
　沖べ　の　浪　に、
女男（めを）　の　白裳（しらも）　の
　　もつれ合ひ。

男二（上手より、おなじく）

ぬしは　梅　なりヤ、

わしヤ、うぐひす　よ、

それと、かをり　を

探り　寄る。

（いづれも、晝飯の仲間に加はる。皆皆、無言にて箸を運び居る時、一人の若き女土方、奥の方より、土を盛りたる畚を擔ぎて、登場。）

女一

あらしヤ　吹くなら、

海堡（かいほ）　まで　吹けよ、

あすは　おぬし　と

朝ごもり。

男一同

やんや、やんや、やんや。

女數名　やんや、やんや、やんや。

女二

姉さん、うまくなつたのう。

女一

何んだいな、お前たちやア、もう、終まひかけか。

男三

そうよ、飯でも食ふのが極樂だ。毎日、朝の四時頃から、晩は暗くなるまでも、働くばかりじやアたまつたものでねい。

男四

金は取れるとしても、そう働けるものじやアねい。

女二

まア、考へて見ると長いものじヤ。毎日、毎日、富津から來て、かうやつて土ばかり運んで居るが、おんなじ事で面白くも

ない。

男五　うまく云つて居らア。おまやこの海堡の

お蔭でよ――

男三　そうよ、男も出來たし、子供も四五人。

女二　お前も色が出來た癖にさ。

男五　違ひねい。そうして、見りやア、つまら

ねいなアおれ達ばかりよ。

女三　なアに、いゝのを拵へるさ。

一同　そうだ、そうだ。

女四（辨當を提げながら）

お杉ヤ　かわいや、
　海堡の　底で
思ふ男　の
　人ばしら。

男一　いよう、留の伯母さん、何も厶いませぬが、どうぞお茶づけでも――

女四　おや、どこの兄さんかと思つたら、八兵衛ぢゞいかい。

男一　かわいさうなこと云ふな。――それはさうと、お杉といやア、毎日、毎日、歌はれて居るのだが、技師の親方が止めない

なアどうしたのだらう。

男二

そりやア、もう、一と昔も先きのことだからさ。

女四

然し本統のことなら、棄てゝも置けないだらうによ。

若者

そこに　不思議な　ことが　ある、どれ、今、おれが　演説　を——

（若者、立ち上る。）

女　ヒヤ〱。

男　辯士　頼むぞ。

若者（様子をつくろひて）

そもそも、諸君、この島　が

出來はじまりに　於きまして、
底に　沈めた　その石　を
直しに　行つた、重助　が
女　の　死骸　を　見つけ出し、
びつくり、ぎよつと　仰天の
急に　あがつて　來ましたが、
『かまうものか』と、技師長　は
どし〳〵　石　を　投げ込ませ、
二度と　再び　その人　の
影は　見えなく　成りました。
これが　お杉で　あつたらう、
お杉に　違ひないもの　と、
世間で　『お杉ヤ　かわいや』の
唄が　出來た　は、わたくしが
十か　十一　の　あばれ時。

今では、人は　技師長　の――
こゝだ――自分　の　色　を　さへ
殺して　までも、海堡　の
工事　に　盡す　熱心　を
讃めて　居るので　ムい升。

男　ヒヤ〳〵。

女　本統にえらいお方だなア

若者（一しほ樣子をつくろひて）
ところが、こゝに　不思議な　は、
わたくし共　の　盛り上げた
土に　生えます、草の葉　を
透かして　見ると、うつくしい
をんな姿　が　見える　とか、
技師長どの　は、あさゆふ　に、

これを　葉毎に　すかし見て、
見當る　時に　限つては
口の內　にて　獨り言。
これは　諸君　も、つねに日頃、
御覽に　成つた　ことでしよう。

一同
ヒヤヒヤ。

男三
諸君はよくわかりました。

女一
虎ちやんの演說は本統にうまいものだ。然し、この草の葉はお杉さんの幽靈が見えるのか知らん。

男四
なアに、そりやア、寺の和尚さんなどの

云ふ心の迷ひではあるめいか。

（二人また三人、技師長の爲る體を眞似て、草の葉を透かし見る。この時玄道皆々の不意に登場。）

玄道

さあ、お前達、もう、晝飯もすんで、休息も出來たらう。また一いき働いてもらはう。

（皆々がや〳〵と退場。玄道、靜かに之を見送る。）

ああ、人間　と　いふもの　は、
兎角、異性　を　ちから草、
かうして　男女　もろ共に
働かすれば　勇み立ち、
たとへば、遠き　みどり野　の
露　に　群れ跳ぶ　女男鹿　や、
あまた　分れて　また　つどひ、

疲れて　歸る　ゆふぐれ　に
山　の　けしき　を　畫く　如、
わが　いとなみ　も　おのづから
早や　第一　を　成し就げて——
思へば、あはれ、之が爲め
贄　と　成つたる　お杉女　よ。
この　海堡　の　島根　には、
萠ゆる　草葉　も　なつかしく、
手に　取つて　見る　葉ずゑ　には、
南無阿彌陀佛　と　沈み行く
そちが　姿　ぞ　忍ばるゝ。

（葉を取て透し見る時、唄聽ゆ。玄道、ぞつとすることなし。）

唄（かげにて）

お杉ャ　かわいや、

海　堡　技　師

海堡の底で、
思ふ男の
人ばしら。
玄道（感に迫つて）
許して呉れよ、ああ、お杉、
今となつては、むざむざと
殺すにや及ばなかつたに。
（下役、登場。）
下役
技師長、船がまゐりました。
玄道
それでは、今から第二工事を見まわらう。

第二　第二海堡潜水夫の場

（本舞臺、すべて海面、中央に、工事の番船やどる。）

船唄
伊豆にヤ　伊豆石、
　男にヤ　船頭、
あつい　むな板
　深み　に　浮けて、
船は　五百石
　あら海　渡る。
案じ召さるな、
　お案じ召すな、
乘せた　こゝろ　は
　石　よりヤ　かたい、
おまや　風　なら、
　わしヤ　また　浪よ、

海　堡　技　師

戀　に　もまれて
　　勇みは　増さる。
待たれ、待たしヤれ、
　　けふも　亦　酒で、
歸りヤ　お前　の
　　膝まくら　か、よう。

船頭一
　さア、來たぞ。ひかへた。

船頭二
　よし來た。
　　（艪を控へて、石船、下手に止まる。）

下役（番ぶねの上にて）
　太平の船だな。

船頭一
　左樣でムい升。

下役

それでは、石はこの邊に投げ込むのだ。

船頭一

さア、こゝださうじや、投げ込め〳〵。

（石を投げ込む最中に、玄道の船、上手より來たる。）

下役

技師長、これで、石ぶね　は　十三杯で　ムり升。これから、底　を　とゝのへに、もぐり　を　またも　入れますが――

玄道

そうか。――工事　も　はかどつて、第一は　もう　出來上り、この第二　さへ　やがて　又

かしら　を　出すで　あらうから、
これで　首尾よく　第三が
出來れば、われも　御用ずみ。
拾年　先きに、この三つ　の
海堡島　と　猿島　に
要塞砲　が　据わる　なら、
東京灣　は　無事なもの。
田戸　の　海邊　の　靜けさ　は、
乃ち、これが　前表　だ。
まあ、精出して　君達　に
やつて　貰らはう。

下役

それ　こそは
わたくし共　が　日々に
望む　ところで　厶り升。

この大工事は、初めから、
技師長どのがお骨折、
たふとい山のお位を
見棄てゝまでも成さるとか。
受け給はれば、塵ひぢも
またおろそかに成りませぬ。
玄道
いや、御苦勞なことだわい。――
やあ、重助よ、お前にも
日ごろ大儀を掛けて居る。
重助（番船の中にて）
これが河童の役目だよ、
もぐりもこゝに長いこと。
海の底での石なぶり、
まだその石にゃ飽かねども、

めづらしかつた　おほ魚　の
左右に　泳ぐ、行列　も
今は　普通の　ことゝ　成り、
たまに　攻め來る　赤鯛（あかだひ）　を
こわい、こわい　の　氣も　失せて、
ひとり　思へば、わが身　にも
尾ひれ　つかぬが　不思議　だよ。
やがて、旦那　の　からだ　にも
右が　生（は）れやう。

玄道

は、は、は、は、は。

いつも、お前は　面白い、
お前に　會ふは、わが樂（げらく）　の
樂しい　ことの　一つ　だぞ。
この　いとなみ　の　ある限り、

變らず　やつて　貰ひたい。
水底の　石　と　もろ共に
われら　試驗　を　積んだから、
第二工事　は　さすがにも
最初　の　やうに　難でない。

重助

いや、もう、旦那、御もつとも、
この勢　で　行く　時は、
あとの　海堡、第三　を
水に　もぐらず　致すやう
成りたい　ものだ。

玄道

は、は、それは
如何に　成らうか――さりながら、
お前　の　役　を　たとふれば、

海堡技師

高き　御空　を　揚げ雲雀
歌ひ　あがつて、人の目　に
見えぬ　光　を　浴びる　如、
深き　に　入りて、若し、お前、
心の眼　開らき　得ば、
あまつ御實、金むく　の
落ち穂　を　拾ふ　ことも　あろ。
高き　深き　は、人の世　を
くゞつて　後に　わかるのだ。

（この時、石船、空に成りたれば、歸り行く。船頭、また唄を歌ふ、文句は先きのより拔きたるものにして、節も亦同じ。）

船頭（船を牖して、歸りながら）
待たれ、待たしヤれ、
　けふも亦　酒で、

歸りャ　お前　の
　　膝まくら　か、よう。

下役
石が　かた付きました　から、
さあ、重助　を　支度して
這入らせましよう。

　　　　玄道
　　それが　よい。

重助（潜水の用意をしながら）
これから　またも　底へ　行て、
乙姫城　の　そと圍ひ、
石　を　なぶつて　來ましようか。
仰せ　の　通り、金むく　の
落ち穗　が　落ちて　居たならば、
仲間　に　割つて　分けましよう。

然し、むかしの　土左衛門、
をんな　で　あつた　やうな　のは、
もう、眞つ平だ。
玄道　は、は、は、は、は。
下役（重助を沈めんとして）
重助、よいか。
重助（潛水器の中より）
おお。
下役　さらば。
（重助、綱につれて沈む。）
玄道（じつと見て居たるが）
ああ、沈んでも、また　無事に
浮ぶ　もの　さへ　あるに――
下役　ええ。
玄道

なに、重助 が 浮き沈み、
まことに 活きた 世の手本（てほん）——
面白いなあ。

下役

は、いかさま。

第三 第三海堡水底の場

（本舞臺、すべて海底の體、中央に大小の伊豆石、あまたころがる。當場、特に、紅、白、青の電氣を使ひ分くること。赤鯛王はその頭に鯛の形を、鎚やつこは背にかな鎚を、眞珠星、珊瑚姫、並に百合子は、又かしらに各々その名の形を戴く。）

赤鯛王（あとのものを導き來りて）

さあ、君がた は こちら にて
しばし 休息 致されよ。

海堡技師

鎚奴
まことに　けふは　結構な、
世にも　稀(まれ)なる　あるじ振り——
眞珠星
われ〳〵共　は、日の本　の
いと新らしき　酒(さか)ほぎ　に、
醉ひも　さながら　風ぐるま——
珊瑚姫
目も亦　共に　くるくると——
百合子
めぐる　こゝ地　で——
四者
ムり升。
（四者、石を座に腰かける。）
鎚奴

赤鯛王　の　御馳走　を

この　鎚やつこ——

眞珠星
眞珠星(しんじゆぼし)——

珊瑚姫

珊瑚　も——

百合子
百合(ゆり)　も　もろ共に——

鎚奴

お禮　を　申し——

四者
上げまする。

赤鯛王（また、腰かけて）

それは　重々　ありがたい、

君がた　諸氏　の　おん仰せ、

あまり體(てい)よき　もてなし　を
致しかねた　が、身に　取りて
不本意ながら――　さて、諸君、
孰れも　遠い　國々　の
海　から　お出で　下されて、
さぞ　面白い　お話　が
聽かれる　ことに　相違ない。
身の上ばなし　も、いち場　の
座興(ざきよう)　に　ならう。さあ、諸君、
今から　お聽き　申したい。

鎚奴

それでは　こゝな　鎚やつこ、
先づ　お話し　を　初めよう――

(立ち上つて、こなしを爲ながら。)

脊中　に　負うた　この鎚　の

由來 を 云はゞ、その昔、
ギリシャ の 古代、神人(しんじん) の
御代 に ヘーファイストス神、
父、おほ神 に 棄てられて、
海 の テチス の 宮ずまひ。
假りの 御母 の ふところ に、
渠、冥想 の 熱 を 受け、
天(あめ)をば 戀ふる 悲み を
この 黑かね と 鍛ひ上げ、
形 が 出來た 鎚 を 以て
再び 鍛ひ上げた のは、
アガメムノーン の かな杖 と、
また アヒレウス の ちから楯。
二つは 時 の おもひ出 に
のこりて 今も 輝けど、

海 堡 技 師

その　もとゐ　なる　くろ　鎚は、
乃ち、僕　の　この脊な　に。

（座に着く。）

珊瑚姫

さらば、珊瑚　も、その昔、
死なぬ　いのち　を　給はつた
その　故よし　の　あらまし　を――

（立ち上る。）

印度の國　に　大教主、
釋尊　生れましまして、
諸方　の　民　を　救ひ上げ、
功德　を　ひろめ給ふ　うち、
南の海　に　龍王　の
むすめ、龍女　も　これを　聽き、
妙華　は　開く　浪の間　に

玉を　さゝげて　湧き出だし、
佛の　み前に　禮讃　の
偈を　說き申す　その　時ぞ、
不滅　の　救ひ　給はつて、
娑竭羅龍宮　の　玉垣　を
歡喜　の　光　さしめぐり、
王も、しもべ　も、その家　も
成佛　の　果　を　得ましたが、
今や　かの國　亡びては、
その果　を　示めす　ものも　無く、
ほとけ　の　御手　に　一たびは
觸れて、育つた　赤えだ　を
保つ　眞玉　は　わたし　のみ。

（座に着く。）

眞珠星

海堡技師

次ぎには　こゝな　眞珠星、
僕は　野そだち　海そだち、
いふべき　よしも　ムらねど、
輪番（りんばん）　ならば　止むを　得ず。

（立ち上る。）

そも　わが　もとの　宿世（すくせ）　とは、
水　を　離れた　あを空　の
野もせ　に　散らふ　露の玉。
日　の　入る頃に　目を　覺めて
きらり　煌（きら）めく　まなざし　も、
日の出　と　共に　眠りては
仰ぎ見る　もの　更らに　なく、
あかるき闇　に　とざゝれて
晝　を　送るが　不興さ　に、
そこを　或日ぞ　すべり落ち、

南大洋　に　あれ浪　の
木曜島　の　海中　に、
暗き　を　追ひて　しろ眞珠。
含む　青、赤、濃い綠、
黄いろ　も　しほ　に　磨かれて
盡きぬ光　を　放てども、
人は――おろかの　物さぐり――
薄い　あこやの貝　に　のみ
まよひ居れば　ぞ、今、こゝに
かしこき友　を　求め得て、
僕が　よろこび　如何ばかり。

（座に着く。）

百合子（立ち上りて）
いと　ふつゝかな　この　百合子、
わたしは　皆と　かけ離れ、

スリヤ の 陸は、ガリラヤ の
湖水 の ふち の 山小百合、
神のまゝ なる ころも 着て、
あす を 勞めず 績がねど、
また、けふ 咲かす 花しべ を
ゆふべ の 爐火 に入れるとも、
あまつ御ごゝろ 斯くと こそ
信ぜば、如何で、歎かれう。
飲み食ひ の 爲め 死なん より、
いのち の 糧 を 身に 占めよ。
曾て キリスト、わがそば を
通り給ひて、『見よや、人、
ソロモン さへも その榮華
斯くは 極めし ことなし』と、
身をば ゆび指す その 御手 の

淸らに　しづく、水の面　を
深くも　忍ぶ　わが影　は、
光　と　凝りて　この　花藻。
あとに　棄て置く　から蘂　を
人は　頻りに　讃むれども、
まことの道　を　受けつぐは、
乃ち、この身、この　わたし。

（座に着く。）

赤鯛王

諸君　の　つぎは　この　あるじ、
赤鯛　も　また　日の本　の
立ち場　を　申し　上げましよう。

（立ち上る。）

神代、伊弉諾、伊弉冊　の
御子　に　ふたり　の　みこと　あり。

海堡技師

姉は　その名　を　おほひる女、
宇內　を　照らす　御光　に
山河　草木　くらゐ　を　得、
おとは　すさの男、すざましく
怒れば、山　を　泣き枯らし、
海　を　泣き乾す　おほあらし。
女男　の　御はしら、あめ地　を
一つに　治め立ちて　より、
人に　生々　活動　の
力は　湧いて、滾々と
盡くる　ことなき　うまし國、
神　の　御末　を　いたゞいて――
ながれ　亂れぬ　文運　よ――
いまだ　われら　が　これを　繼ぎ、
他國　に　走る　機　を　生まず。

されば、鎚どの、珊瑚姫、
眞珠御星　と　百合どの　の
よたり　を　お招き　申したは、
諸氏　が　齎らす　冥想　と、
不滅　と、自然、信仰　を
わが　活動　に　搗きまぜて、
こゝに　天下　に　雄飛する
新代（にひよ）　の　浪　を　揚げる　爲め。
諸君よ、如何に。（座に着く。）

鎚奴
お言葉　は
至極　同意で——
四者
ムり升。

眞珠星
海　堡　技　師

たゞ　聽きたいは、先刻も
異樣な音　の　坐に　ひゞき、
われら　の　胸を　ゆすつたは——

赤鯛王
それは、乃ち、われら　今
腰　を　かけ居る、おほ石　の
うへより　落ちて　來た　ひゞき。

珊瑚姬
して、この石　は　何の爲め——

赤鯛王
これは、そのかみ、兩尊　の
奇しき力　に　大八洲
生ませ給ふた　例に　依り、
人の心　の　智慧　を　以て
島　を　生み出す　たくみ事。

早や 第一と 第二と は——
只今 御覽 の 通り——よく
作り終つて、第三 の
工事 に 專ら かゝり 居り——

百合子
成程、骨 の 折れること。

珊瑚姫
人間も 亦 神わざ を
つとむる やうに 成つて 來て——

鎚奴
かういふ 物が 出來る のも、
この 日の本 の 人々 に
絶えぬ 歴史 が あれば こそ。

眞珠星
且は、世界 の 國々 の

海 堡 技 師

大勢、こゝに　迫り來て、
これが　うへ越す　骨折り　の
始まり　なるか。

鎚奴

さも　あらう。

珊瑚姬

さあ、

赤鯛王

されば、次ぎには、二はしら
女男　の　兄弟　あれし　如、
潛む力　の　延び行かば、
世に　歌ふべき　人物　も
生れる　ことで　あらう。

百合子

そう　成つて——

貰らうのが――

鎧、眞珠
われら の 望み――
（この時、重助の潜水器、下だり來る。）

百合、珊瑚
あの影 は――

赤鯛王
は、は、は、あれこそ この石 を
直しに まゐる 潜水夫。

鎧奴
人の さまたげ 致すのは
不本意。

眞珠星
されば、珊瑚どの。

珊瑚姫

眞珠星どの。

鎚奴

百合子どの。

百合子

さあ、鎚どのも　もろ共に。

赤鯛王

どうか、あちらへ　移られよ。

（孰れも退場。こゝに、潛水夫の仕事を見せること、三色電氣の光に、種々の遊魚を走らすべし。）

詰の幕

第一　玄道退隱祝ひの場（夢の一）

（本舞臺、すべて某會場の庭園。後ろ一面に幕を張り、幕の前にテーブル、椅子等の備へあり。技師長退隱祝ひの席。陸軍大臣、參謀總長、衆議院議長、神奈川知事、代議士、縣會議員、士官・官吏等、玄道と重助とを取り卷いて、立つあり、坐するあり。かげなる軍隊の洋々たる奏樂聲裏に、酒宴、酣なる體。そこへ下手より、發起人の一人、登場。）

發起人

今日は、先刻、發起人の一人が申し上ました通り、參謀本部の計畫にかゝる海堡工事が完成致しましたので、こゝにムる技師長星野玄道君が、そのお役を御退隱に成られまするに付き、われわれは之を祝する爲め、同君並に潜水夫重

海堡技師

助君と共に、諸君をお招き申しましたところ、遠方のところを、お出下さつた陸軍大臣、參謀總長、並に衆議院議長閣下を初め、神奈川縣知事閣下、軍人官吏のかたがた、代議士、縣會議員、その他諸君の御來臨を恭うし、われわれ發起人等の面目に厶り升。これから、また、工事に關係致しました土方どもが、祝ひの餘興として、土方踊りと申すを御覽に入れるさうで厶い升。

（役員、目くばせすると、下手より、男女大勢の土方登場、舞臺の中央に輪を作り、音頭取り、その眞中に入り、唄を歌ひつゝ大鼓を打つと、一節毎に、踊り子、疊句を和す。）

土方踊の唄

おまや　何處　行く、
海堡　の　島　へ、

をとこ　欲しや　の
　土畚擔ぎ。
　　（こら、さッさい。）

ぬしは　何處　行く、
　海堡　の　うへで、
をなご　欲しや　の
　働き振り　よ。
　　（こら、さッさい。）

兎角、浮き世　は
　をとこ　と　をなご、
ぬし　と　お前　の
　相持ち所帶。
　　（こら、さッさい。）

海　堡　技　師

戀も出來たりヤ、
　海堡も出來て、
國は泰平、
　家には安樂。
　（こら、さツさい。）

めでた、めでたの
　わが日の本よ。
あすは、朝日も
　光を増さう。
　（こら、さツさい。）
（土方一同、踊り終つて退場。）

陸軍大臣（立ち上つて）
いや、どうも、面白い踊りであつた。――これより、諸君に

共に、星野君の萬歳を祝しましよう。

（一同、立ち上る。）

海堡工事擔當技師長、星野玄道君萬歳。

一同　萬歳。（一同、坐わる。）

陸軍大臣（進み出でゝ）

星野君、あなたもこれで御滿足であらう。工事もあの通り立派に出來上れば、たとへ御退隱になつてもあなたの御手柄はいつまでも亡びませんぞ。この陸軍大臣も、嬉しさの餘り、充分の歡を盡しました。今日はこれでお別れ申し升。

（大臣、二三の軍人と共に退場。）

參謀總長（進み出でゝ）

星野君、わたしも隨分醉つたわい。これで、御免を被らう。——然し、觀音崎要塞の秘密を成し遂げて呉れたあなただから、昔なら、退隱どころではない——打ち首だわ。

は、は、は、は。それだけ、あなたは大切なお方だ。この參謀總長、實にあり難い。――これで、御免。

（參謀總長、二三の軍人と共に退場。）

衆議院議長

星野君、あなたが多年のお骨折は、つひに大事業の成功を見たのです。この衆議院議長、國民の代表者として、この席に列ることを得ましたのは、甚だ光榮の次第。どうか、御退隱の後も、御老體を御大切に――今日は、これで御免を被り升。

神奈川縣知事

この神奈川縣知事も、一言、お別れを申し上げ升。承はりますれば、この後とても、矢張り、この田戸の海邊にお住ひ爲さるる由。あなたの如き人物がこの縣下に住はれるのは、縣民すべての喜ぶところでムい升。

（衆議院議長、神奈川縣知事、退場。それより、あ

との軍人、官吏、代議士、縣會議員等、各々玄道に
默禮して退場。あとに、今まで無言にて答禮しつゝ
ありし玄道、夢心地にて、重助と殘る。）

公衆の聲（諸方より、舞臺のかげにて）
玄道君萬歲。

（玄道、重助、驚くこなし。いつしか、後ろの幔幕、
おのづから外れ落ち、テーブル、椅子等、煙に包ま
る。この時、大浪の音きこえて、上手より、一人の
土方、あわたゞしく登場。）

土方
旦那、大變でムい升。只今、おほ津浪が打つて來て、海堡
は皆碎けてしまひましたぞ。

玄道
え、こりヤ　夢　では　無いか――ああ、
三拾年來、おほ勢　の
人手　に　掛けて、やう〳〵に

造り上つた　海堡は、
津浪の　爲めに　碎かれて、
われら　すべて　の　骨折　も
また　海底　に　沈んだ　か。

重助――

重助　旦那――

玄道　早く　來い。

（玄道、上手へ行きかけると、その身體、意の如くならぬこなし、やがて、重助並に土方と共に、煙の中に消える。あと、浪幕をおろし、浪に因める音樂にてつゞける。）

第二　茫漠たる海底の平原（夢の二）

（浪幕を切つて落すと、本舞臺、花道にかけて一面の野原、雷氣の光にて、海底なることを示めす。金むく、銀むく並に瑠璃兒の着附け以前の如し。）

金むく　おい、銀むくよ、この頃は
富津の海　も　かわり來て、
浪　の　おもてにヤ、いそがしく
照る　月かげ　を　踏み破り、
くろ船、あまた　行きかへば、
うか〳〵　うへにヤ　浮ばれぬ。

銀むく　そりヤ、金むく　の　いふ通り、

海堡技師

殊に　速くて　こわいの　は、
水雷　と　やら　いふ　船ぞ。
きのふも　鯛　と　おほ鯔　は
これと　競爭　して見た　が、
日頃　自慢　の　速力　は
とても　話しにャ　ならぬ　わえ。

瑠璃兒

人間　の　子　も　なかなかに
瑠璃兒　が　思ふ　程じャ　ない、
馬鹿にャ　なるまい、さまざまの
工風　を　凝らす　魔物　ぞや。
船は　まだしも、この底　に
石　を　築きて、三つ　までも
海堡　と　やら　いふ　島　が
出來たわ。

金むく

それも　よいけれど、

要塞地　だと　布れ込みて、

自分　ばかり　が　主人がほ。

銀むく

から、他の人　を　許さねば

われら　が　磨く　風景　を

繪に　さへ　作る　ものは　ない。

瑠璃兒

且、から　やつて、夜もすがら

潜み居る　の　も　退屈で——

金むく

たまに　うち出す　大砲　の

音　と　けむり　が——

銀むく

氣散（きさん）じ　よ。
かわつた　世界――
　　　　　瑠璃兒
　　　　　　あらたの世――
金むく
曉の光　が　目を　覺まし――
銀むく
山から　のぞく　度毎に――
瑠璃兒
どんな　心で――
　　　　　三者
　　　　　　見るだらう。
金むく
して、また　知らぬ　鎚やつこ――
銀むく

また　眞珠星、珊瑚姫——
瑠璃兒
　百合子　なんど　の　渡り來て——
金むく
　かの　あたらしい　島々　の——
銀むく
　めぐり　を　圍む　幔幕（まんまく）　に——
瑠璃兒
　青むらさき　の　しほ浪　を——
金むく
　貯（たくは）へ寄する　いそがしさ。
銀むく
　その　しほ浪　の　高まりて——
瑠璃兒
　人の都　を　動かさば——
　　海　堡　技　師　へ

金むく
　如何なる　さまに　色めいて――
銀むく
　世　の　文明（よのめい）　は――
　　　　　　三者
　　　　　　　定まらう。
金むく
　何しろ、これを　監督（かんとく）　の――
銀むく
　赤鯛王　が　骨折り　は――
瑠璃兒
　並み　大底　の――
　　　　　　三者
　　　　　　　事じヤ　ない。
金むく

そら、また、あんな――

三者

人間　が――

（三者退場、花道より、一個の若作くりの僧形、悠々として登場。）

僧形

ああ、悠々　の　この　天地、

行くとし　限る　ものも　なく――

いづこ　の　果に　生れたか、

たゞ　一笠（いちりつ）　の　わが心。

親なく、子なく、妻も　なき

身は　あま驅（が）ける　鳳（ほう）の鳥、

野　越え、山　越え、海　越えて、

渡る　あなた　も　冥想（めいさう）　の

つばさ　の　下に　輝くよ。

海堡技師

わが　世の光、わが望み

見ゆる　限りは、路ばた　の

樹かげ　に　結ぶ　夢に　さへ

無量の　いのち　溢れ來て、

ほろび　の　闇　は　いつまでも

忍び入るべき　すきぞ　なき。

ああ、われ　ながら　こゝ地良　の

旅路　では　ある。

（段々、本舞臺に來たる。下手より一女、登場。）

一女、お花のおも影）

のう、御僧、

わし　をも　つれて　行つてたも。

珊瑚　の　樹下　に、わが靈　は

どうして　獨り　忍ばれう。

二十餘年　の　とし月　を

無言で　居たは　お前　ゆゑ、
お前　が　そばに　住む　爲めぞ。
僧形
如何なる　人の子　なればか、
われを　追ひ來て、斯くまでも
深き　水底（みそこ）　の　花　と　咲く。
こゝは　世びと　の　力　以て
いき　する　道は　絶えたるに――
とくとく　歸り給はれよ、
死てふ　おそれ　に　捉（とら）はれう。
一女
いや、いや、お前が　住める　なら、
わしも　靈世（たまよ）　に　活きられう。
（この時、上手より二女、狂亂のすがたにて登場。）
二女（お杉のおも影）

のう、のう、御僧、なつかしや、
わしャ、これまでも　お前　ゆゑ
待つて　居ました。

僧形

また、しても、
そちは　何もの。

二女

なさけなや、
もう、見わすれて　ムる　とは。
わしャ　お前　ゆゑ　三人　の
子　まで　拵へた　仲じャのに――

僧形

これは　怪しかる　をんな　かな、
穢れし　こと葉　云ひかけて、
一意　修業　に　勵む身　を――

二女

いや、いや、そうは 云はされぬ。
第一、第二、第三 の
海堡 は わしが 生んだ 子ぞ。

一女

憎い女 よ、わが良人 に
人 の 繼子 を 生まさうか。

二女

そりャ こちら から 云ふ ことぞ、
おまや からだ も 痛めずに――

一女

そんなら おまや 賣女 かや。

二女

お前 こそ その 辻君 の
わざ を 仕掛けて、この人 を――

一女
いゝや、わたしの――
　二女
　いや、わしが――
（これより、樂座の唄。二人、舞ふ。）
樂座
男　一人に、をんな　は　二人、[illegible]
　思ひ合ふたが　敵　味かた、
昔、つれ立ち、寺小屋行き　の
若い　友垣(ともがき)、その時　破れ、
　戀　の　ほむら　は　胸を　燒き――
二女（ことば）
わたしャ　お前を　殺しもしたが――
一女（ことば）
わたしャ　お前に　殺されたろが――

忍ぶ　心は　かはりやせぬ。

（この時、大砲一發。舞臺、眞暗に成る。）

第三　珊瑚樹下冥想の場

（舞臺、序の幕第二の體に返る、たゞ異なるは、三拾年來の古びかた、且、墓標を石に替へて、青き苔を生ぜしむ。珊瑚の實、全く熟して、黒きを特に目立つ程散らすべし。低き浪の音。）

玄道（夢より覺めしこなし）

ああ、うと〲として見たら、
二重　の　夢で　あつた　のか。
いま、退隱　の　祝會　を、
あつた通りに、ありありと
見た　のは　よいが、大切　の

海　堡　技　師

海堡（かいほ）が　波に　碎けた　は、
どう　思ふても、夢　は　夢――
また、うな原　の　みな底　に、
ふたり　出て來た　若い子　は、
まさしく　お花　また　お杉、
なかに　立つたる　修業僧（しゆげふそう）、
それは　わが身　で　あつたわい。
思へば、古い　ことながら、
これまでに　爲た　わがわざ　に
結びて、今の　心　にも
若き　血しほ　の　涌く　爲めか。

（立ち上つて、なつかしげに海の方を望む。右作、登場。）

右作　旦那、もう、早や、お目覺めで――

玄道
おおさ、うと〳〵して見たら、
早や ゆふぐれ に 成つた のか。
右作
左樣です かえ—— けふは 又
近頃 に ない 御宴會。
玄道
工事 も 全く 出來上り、
こゝに 役目(やくめ) も 濟んだもの。
わしも 年ゆゑ けふ からは
いよいよ 退隱(たいいん) するからと、
皆が 招いて 呉れた 席、
これまで あつた 出來事 が
胸に 一杯 浮び來て——
老い の なみだ か——ほろほろと

海堡技師

すわつた　膝　を　ぬらしたが、
今、また、夢　に、その席　で
あつた　通り　を　ありありと
見た　のは　よいが、大切　の
海堡　が　波に　碎けたで、
わしは　驚き　うなされて
覺めかゝつたが、また、廣い
靑うな原　が　見えて來て、
浪の靈　寄る　その底　の
眞中　に　見たは、若い時
死んで　別れた　花　と　杉、
ふたり　が　迷ふ　さまながら――

（大砲一發。）

島　より　響く　大砲　の
昔に　目覺めた　晝の夢。

右作、昔と　今と　では、
田戸　の　沖べ　も　かわつたな。
（また、すわる。）

右作
かわりましたぞ、島　だとて、
かしこに　見える　猿島　の
ちへのみ　照つた　太陽　も、
今は　一あし、二あし　と
よい　踏み石　が　出來まして、
その日、その日　の　海づら　を
暮れ行く　道が　安からう。
これと　申すも、旦那さま、
二つには　又　おふたり　の
死靈　が　させた　お手がら　で――

玄道

右作は わしの 身の上 を
よく 承知して 居る 筈だ。——
わしが 秘密 を 知る ものは
お前 の 外に ない 如く、
あの 海堡 の 底 までも
國 の 秘密 を 知る わしは、
昔なら、早や 事濟み の
うち首 と でも ならう もの——
參謀本部 の 持て爲し を、
けふは、つくづく 感じた ぞ。

右作
それも 旦那 の 熱心 に
感服 してゞ ムりましよ。——
お茶 でも 召した その上 で、
わしは 御飯 の 支度 でも

致しましようか。

玄道

さう　頼む。

右作（茶を出して來て）

それでは、旦那、今　暫く、

いつも　の　深い　御思案　に

耽つて　居つて　下されい。

（右作、退場。玄道、また立ち上つて椽先きに出で、

海づらを見渡して沈思。）

道（なかば朗吟の調にて）

駿河の御富士は、琵琶湖　を　抜けて、

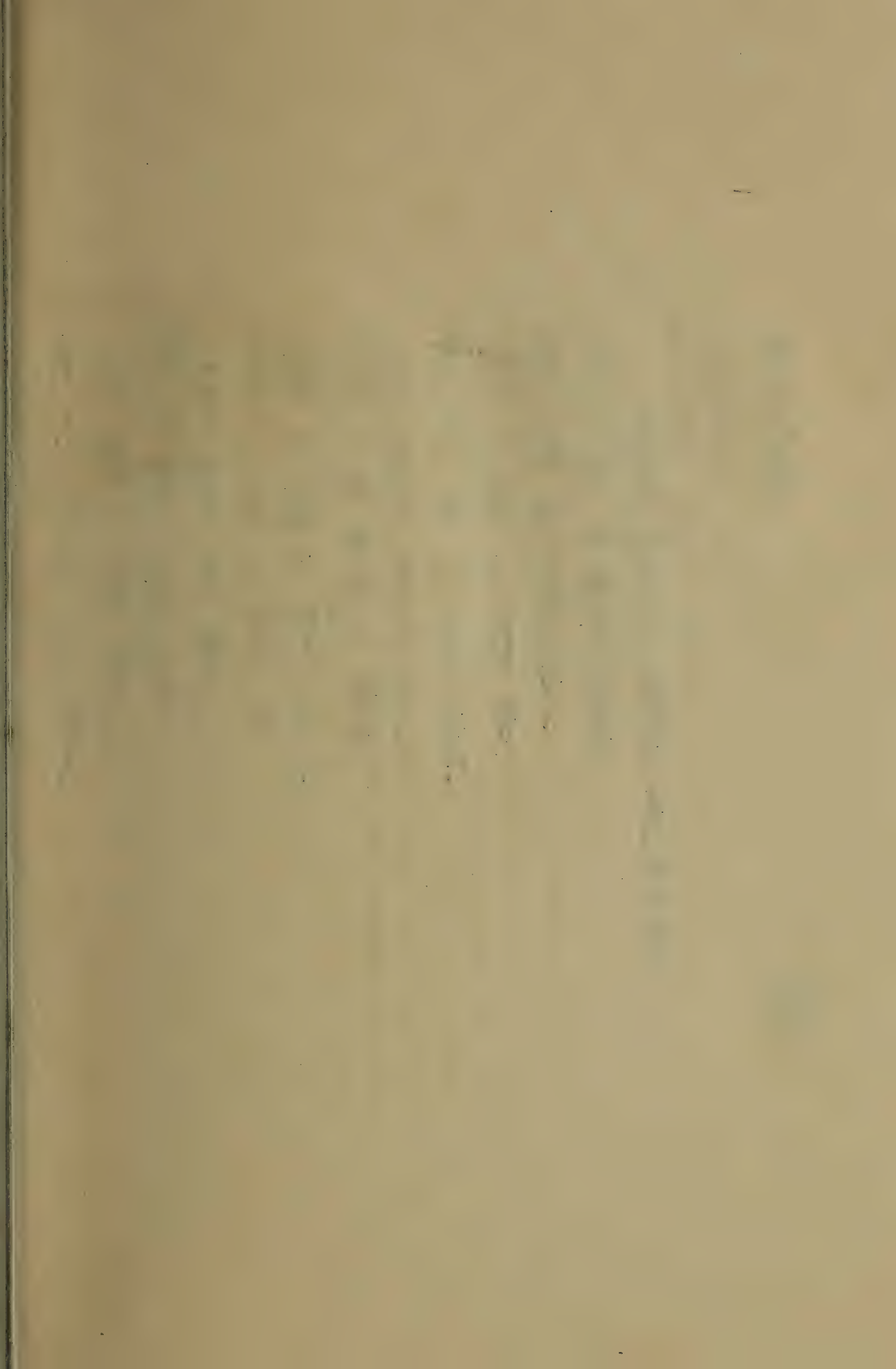
ひと夜　出でし　と　昔し語り、

かの　海堡　こそ、伊豆なる　山　を

二つ　砕きて、生れにしか。

三拾年來、毎日　行きて、

育て上げたる　いとし子ら　よ。
兄なる　一郎、中なる　二郎、
末は　三郎、その名　さへも
島　には　似つかぬ　愛情　籠めて、
曉の光　に　ゑみ　を　增せば、
かたへに　浮べる　この　猿島　の
古き　繋り　も　あれよかし　と、
あらたの　眞土　に　松　杉　植えて、
なかに　紀念　の　珊瑚樹　の　實。
芽ばへ　を　出だして、御空に　延びて、
早く、わが子ら、かしら　蔽ひ、
自然　の　御神　の　しら露　吸ひて、
活ける　浪かぜ　凌ぎ立てよ。
まことの母　とも　云ふべき　ものゝ、
一は　よどめる　海の底　に、

また、その　ひとつは　この木の根もと、
　共に　無言　の　とはの　眠り。
ゆふぐれ　靜かに　死の影　寄せて
　われを　寂しく　包む　時ぞ、
落ち來る　木の實　も　靈ある　如く
　家根　の　亞鉛　を　たゝく　音　は、
ひゞき　も　紫　血しほ　を　聽かせ、
　黑み　行くべき　たま　を　招く。
ああ、わが　五體　の　消え去るのちは、
　田戸　の　沖邊　よ、なれを　護り、
生れし　島根　の　その數　三つに、
　三つの　靈火　は　夜ごと　燃えん。
　（珊瑚の實、家根と庭とに落つる。また、低き浪の音。）

闇の盃盤

はしがき

この集に收めたるものは、明治三十八年六月出版のわが第三詩集、「悲戀悲歌」以後の作なり。この間にわが思想と情調とに變遷ありたれど、こと更に之を區別せざりき。紙數の制限あるにより、こゝに收め得ざるも多くあれど、そは次集出版の節にゆづり、兎に角、長短六十篇之をわが第四詩集として公にすることとなしぬ。

短曲　三十五篇

春曉

またも　思ひ　に　なやむ　日　こそ
來ぬれ、板戶　の　ひま　を　漏れて。
白む　臥所　に　夢　の　かをり
殘る　暖み　つつむ　われ　や。

寧ろ　このまま　眠り入らば、

死をも　知らずに　世　こそ　變はれ、
覺むる　心　は　苦　をも　招き、
苦　をば　いだきて　男泣(をとこな)き　す。

人　の　知らざる　憂ひ　多し、
身　をば　起さん　力　失せつ、
白む　臥所　に　夢　の　かをり、
ゆらむ　節々(ふしぶし)　花　を　開く。

春　の　あした　の　ねむりごこち、
いまだ　生(うま)れぬ　身　にも　あれや。

行く春

闇の盃盤

春　の　行きにし　跡　を　追ひて、

われは　出で來ぬ　森　の　樹かげ、
朝日　寂しく　光　投げて、
陰府(よみ)　に　結べる　夢　の　世界。
青葉　顫ひて　息　を　凝らし、
小徑(こみち)　をののく　露　は　繁し。
あはれ、その露　色　も　淸ら、
昨夜　まみえし　戀　の　まなこ。

ランプ　綠りの　部屋(へや)　も　浮きて、
中に　見え透く　罪　の　ふたり。
それと　一人　を　いだき寄せば、
影　よ、まぼろし——胸　に　わが手。
春　ぞ　行きける、露　ぞ　繁き、
草葉(くさば)　踏みかね、われは　覺めぬ。

黄がねくちなは

月は 更けたり、眠る 草を
靜に 縫ひ來て 光る 君よ、
黄がねくちなは かげ に ばかり
音をは 曳きつつ 夢 に 入りぬ。

床は ぬくめる 闇の 樂土、
花は 頻りて、花は 降りて、
痿えし わが身は 痿えし 腕 に
痿えし 長物 捲きて あるを——
せめて このまま 土に 籠り、
土に 隱れて 行かば 如何に、

斯る　戀路の　君と　われ　と。

君は　くちなは――されど　ゆかし――
月と　消え行く　翌る朝は、
人に　かしづく　人の妻　よ。

黑き花

（妻を失へる老人に）

黑き流　は　みなぎりて、
黑き影　をば　浮べたり、
浮ぶ姿　は　見えねども、
まなこ　つぶれば　ありありと――
ありし　昔の　おもひ出　や、
うれひ　に　映る　愛の花。

若き　かをり　に　返る　ほど、
深き　に　沈む　その花　や、
底なき淵　の　闇　ぬけて、
隠れ行きし　か、しほれし　か。
殘る　ひとり　の　胸　は、ただ、
うつろ　と　なりて　みなぎりぬ——
黒き　かをり　の　黒き影、
さらに　黒き　を　増す　ばかり。

寧ろ夜なれや

『肉　を　洗へ』と　曉の波　の
遠き響　を　近く　聽けば、
みどり　淀みて　解けし　魂　の
かをり　ゆかしく　われを　打ちて、

眠り心　の　目　こそ　覺むれ、
九里　の　海岸　いまだ　狹霧
かすむ　中より、白き　七五三(しめ)　や——
これぞ、ねぢれ　も　荒く　延びて、
御靈(みたま)『深み』の　秘義(ひぎ)　を　圍む。

斯くも　夜(よ)あけ　は　つらき　ものか、
われ　と　海　と　を　二つ　分けて、
われを　小さく　目覺めしむる。
寧ろ　夜　なれや、とこしなへに
夢　を　われ等　は　一に　なさん。

闇を例へば

闇(やみ)　を　例へば、海の主　の

涌きて 夜ぞら の 星を 凌ぎ、
足 は 大地 の かげ を 踏めど、
その手 二つ は 空 に 延びて、
來たる ものをば 待てる 如し。

さなり、わが世 は それの 下に
咲きて にほへる 夢 の 園生、
むしろ 覺めざれ、戀も 花も
とはの かをり に 笑みて あらん。
光 照りなば、花の露 も
戀 の 生命 も しほれ行きて、
あはれ、短き 榮え を 見じや。

夜る ぞ わが身 を いだく とてか、
肉 の まなこ を 暗ましむる。

闇の闇

あまつ鏡　の　空　を　落ちて
千々に　碎けし　缺けら　一つ、
われは　ちいさく　闇　に　照りて
映す　御影　を、神よ、知るや。
北　に　住ひて　磨く　星　の
凄き　またゝき、それに　あらず、
遠き　沖ら　の　磯　に　燃えて
罔象　かかぐる　火　かも、あらず。

いとも　寂たる　海　の　ほとり、
われの　光　は　鋒　を　隱し、
砂　の　奥なる　熱　を　追ひて、

過ぎし　百世(もゝよ)　の　跡　を　戀ふる。
生きて　死ぬる　に　何の　恨み、
『今』を　映せや　闇の闇　に。

闇なる岡

目　をば　閉ぢて　思へば
あはれ、親し　この闇。
肉　を　さそふ　物　みな
こゝに　云はゞ　口蝮(くちばみ)、
時雨(しぐれ)　晴れし　青野　を
ぬめり　行きて、ああ、神、
われに　殘る　たゞ　これ
遠く　響く　泡浪(あわなみ)。

それか、あらず——燃えて
　胸に　滿つる　靈(たま)の香(か)、
天(あめ)は　深く　薫(くゆ)りて、
　足場　高き　この岡、
光　若しも　涌き來て
　照らば、やがて　世の外。

君は暗きを

君は　暗(くら)きを　おそれ給ひ、
世なる　光　に　出づと　すれど、
おもへ、手に　手を　こゝに　飾る
戀　の　花束(はなたば)、糸は　切れて、
乾れし　地のへ　に　しぼむ　時ぞ。

君が 御口 を 漏るゝ 笑み の
日中 咲きなば、やがて 移る
弱き をみな の 末も 見えて、
をとこ心 は 鐵 と 冷えん――
闇は 晝 より、肉は 靈に、
勝る 秘密 の なからましや。

とはも 斯くこそ――愛しき 君よ、
それと かをり を 探り寄りて、
今を 燃え立つ 熱と 熱と。

涙の戯れ

濱 は 拾里 の 床 を 延べて、
こよひ 迎ふる 客 も なきや。

波元白浪(なみもとしらなみ) 横に 長く、
銀 の 細聲 消えて 起り、
瑠璃 と 散りぼふ 海の子等 は
おめず、臆せず、むつれ遊ぶ。

すくと 高まる うね の 上に
純金(むく) を 刻める 裸形(らぎやう)をのこ、
さつと 落ち來る おもに 浮きて
玉 を 磨ける 亂髪(おどろ)をとめ、
ほくそ笑みつゝ 見えて 消えぬ。

こゝろ 寂しき われも、今は、
海 の 御魂(みたま) に 透きて 立つや、
またも かれ等 は 出でて おぢず。

冷たき砂

ゆふべ　冷たき　砂　に　坐わり、
天　を　仰げば、いまだ　星　の
ゑめる　姿　は　一も　見えず、
青き色　のみ　上に　下に
なやむ　わが身　を　つゝむ　世界。

昔し　失せにし人　の　戀　の
恨み、歎き　か、海の響、
胸　の　奥にも　絶えず　繼ぎて、
廣き　濱邊　ぞ　身をば　責むる。——
われは　十年　罪　を　悔いて、
こゝに　初めて　君に　詫ぶる。

骨は 褪すとも、心 のみは、
君よ、眞一度 陰府（よみ） を 出でて、
淸き ほゝゑみ われに 示せ。

よみ返り

夢の まくら に 闇 を 繰く
波よ、亡者 の よみ返り か。
神 は 地塊（ちくわい） の 軸 に 觸れて、
陰府（よみ） の 柱 は 根 より ゆるぎ、
底つ石棺（いしびつ） 蓋 は 開きて、
而も 歡喜（くわんぎ） の 叫び ばかり——
黑き ころも に 靈 を 包み、
今か、光明 仰ぎ のぼる。

あはれ、そのかげ聲と共に
天の御中に進み行くや、
遠きわらひの續くひまに、
またも眞近き鯨波ぞ起る。
肉の小部屋に籠り聽けば、
魂は幾萬海を振ふ。

御靈うぶや

うごめくはこれ何者ぞ、
牢獄に等しき闇を――
ひとつかとまなこ据られば、
その數は增して行くなり、
まとへるぞみな墨ごろも――

黑法師――無爲の行列。
暗きより暗きに入りて、
かへり見る光だになし。

わが靈のなやむ產屋か。
相向ふかゞみの法師、
相映り、幾多生まるゝ
代のかげの並ぶその脊よ。
その脊をばいくつ越ゆとも、
この無言、つひに死ぞなき。

過ぐるぬくみ

君はわが手をい避け給ふ、
まこと戀にはありやえらび。

こ世の　すがた　を　受くる　先し、
知るや、眞(ま)やみ　ぞ　世界　なりき。

魂(たま)　は――こゝろ　を　狹く　限る
室　の　なければ――觸るゝ　ところ、
そこに　乃ち　もの　を　いだき、
過ぐる　ぬくみ　を　たどり　合(あ)ひぬ。

その子、その子　は　やゝに　分れ、
かゝる　光　の　もとに　來たり、
木　とも、獸(じう)　とも、身　とも　見えて、
かほ　は　互ひに　知らぬ　ばかり。

君も、さあれば、かたち　攀ぢて、
もとの　ぬくみ　を　共に　得ばや。

二の無言

ああ、君、まなこ　の　光　を　去れよ、
きらめく　世界　は　死　の　おもて　のみ、
相見し　おもひ出　かたち　を　燒けば、
飛びかふ　言葉　の　羽　を　さへ　借らじ。
魂（たま）　もて　相戀ふ――これ、二　の　無言――
おもへば、眞（ま）やみ　の　定め　を　あゆむ。

まこと　の　戀――ああ、いまし　と　われと
異なる　耳　あり――その　足音　を
攻め入る　魔　と　しも　互ひに　聽くか。
こゝろ　の　おそれ　は　肉　をも　振ひ、
暗き　を　直ちに　手と　手を　ひとつ。

ああ、君、刹那ぞ、この刹那ぞや。
無言に住する常世の蜜は
斯くこそ過ぐなれ、ふたりの胸を。

黑き素船

黑き素船を透かし見れば、
砂にしやがめる影とまがひ、
沖の小島の薄き見れば、
人の思ひに沈むけはひ、
空に住へる月を仰ぎ、
寂びしわが身の魂と見たり。
われはそのまままなこ閉ぢて、
消ゆる世界を今ぞいだく。

浮けよ、沈めよ、千々のなやみ、
千々の悲み、身をば乘せて。
苦なるいのちは――繁き矢なり――
積みて重なる夢の小船。
さして行くへをこゝに問はじ、
この夜、この時われは活きん。

渦卷く心

闇の烏に聲もあらば、
暗き地獄の窓を開けん、
斯くも思ひに沈む『今』を
われに奪はんものはありや。
鐵のうるしに固く閉ぢて、

神 の 嘉(よみ)せし 光 さへも、
見よや、こゝには 影 も なくて、
靈(たま) ぞ エーテル かをり 高き。

胸のうち こそ 元の 世界、
日 をも 星 をも 生まば 生まん、
燃えて うづ巻く 心 ありて、
物 を 形取る ひゞき 包む。
燃えよ、わが靈(たま)、戀 の 如く、
われを 燒きても われは あるを。

地なる響

暗き 濱邊 を たどり來たり、
水際(みぎは) 眞近く 砂 を 握る。

闇 の 盃 盤

握る　眞砂の　もろき　うちに、
闇の力　は　その尾　振ひ、
手　をば　つたひて　胸に　響く。

君よ、御空　の　星　を　說きて、
地なる　ひゞき　を　忘る勿れ、
遠き　深み　の　浪　は　寄せて、
幾重　打ちては　疊む　砂　ぞ。
たとへ　もろく　ぞ　碎け去りて、
手　には　殘れる　形　なくも、
永劫　の　憂ひ　を　布くは　如何に。

暗き　濱邊　に　砂　を　握り、
君に　云ふべき事　ぞ　多き。

千とせの重み

ああ、この　楠の木、眞直ぐに　延びて、
天をば　窺きし　その罪　ゆゑか、
斯くまで　曲りて、斯くまで　くづれ――
病者の　さま　なり――肌への　苔も
苦悶の　血あせ　に　にじみて　朽ちぬ。
野望に　生ひ立つ、その　活く幹　の
飽くまで　もたげし　かしら　は　折れて、
千とせ　の　重み　や　いち時　に　受けし。

劫果の　破壞――こは、わが世　の　苦　をば
却つて　全く　ぬぐはん　ものぞ――
かれ、こを　拒みて　身づから　忍び、

（サタン　か）死力　の　限りを　盡し、
なほ且　はびこる　ふと枝　を　われは
仰ぎて、新たの　力　を　得たり。

あけぼの

いとねむげ　の　浪は　先づ　覺めて、
陸と　海と　こゝに　分れ初め、
海と　空と　沖べ　に　連る、
遠く　近く　浮ぶ　帆かけ船、
眞帆　を　揚げて　さ走る　進み　の
いとゆるやか、夜　こそ　あけ離れ、
海　の　つばめ——こは　朝の使——
輕く　飛びて、世の目　覺め果てぬ。

砂山なる 砂 を 萌え出でゝ
露 を 帶べる 小草(をぐさ) 薄みどり、
深み淵 の 色 に 照り添ひて、
わが心 の、これや、苦なき時。
亡びん にも 亡ぶ影 見えず、
活くるに また 活くる 惱み なし。

ゆふぐれ

人げ も なき 濱 の ゆふ暮 は
死かげ の 谷、陰府(よみ) に 似たる かな。
雲 は 幾重、横に また 縱に、
王閻摩羅(わうえんまら)、瓊矛(ぬぼこ) の 頻投(しきな)げ、
青き空 に そりたる 細太刀、
脊なる 山 は 低く 棚引きて

寂びし靈(たま) の 逃げ去る を 圍み、
目 を あぐれば これ 淀める 淵。

飛び行く にも 光の羽根 なく、
傳ひ行く に つながる島 なし、
風は 靜か 浪の穗 を 搖りて、
わが生命(いのち) の 末 を 示す のみ。
今か 此世(こよ) は たとへ 消ゆるとも、
この寂び こそ 活くる道 あらめ。

落日

むかし 御神(みかみ) の 命(めい) を 受けて
此世(こよ) を 領ぜし、あまつ彦 の
それの 如くや、御座(みざ) は 落ちて、

光　まばゆき　黄金ぶすま、
雲　は　静かに　浄　を　圍み、
殘る　衆生　の　のぞみ　吸ひて、
銀の鏡　の　音も　なくに、
あはれ、世の日　は　舞ひて　沈む。

斯くも　赫耀　浄　に　入る日、
放つ　その矢　の　一つ　だにも
焦れ渡らん　影　は　失せて、
有る　は　親しき　闇　の　深み、
暗き　中より　浪　を　聽けば、
純の　黄金　の　榮え　ぞ　はゆき。

樂の音

高き より 落つる 樂のね、
君 や 搖る むらさき の 幕——
ねぢれ立つ 段階(きざはし) の もと、
われは たゞ ちいさき虫 か。
戀 のみに こゝろ 引かれて、
ゴス式 の 窓 も 小暗(をぐら)く、
色がらす 赤 また 青 に、
わが胸 は うたれて なやむ。

その なやむ ちさき胸 こそ、
今 にして、嚴たる 御堂(みだう)——
『ハレルヤ』の 聲に、わが 戀ふ
御すがた よ、神と 浮べど、
かの 御手 に きらめく 指輪、
持ちぬし は 既に ありけり。

凝りし涙

海の　おもて　を　渡り來たる、
白き　男波　の　音ぞ　愛しき。
われに　乙女　の　腕　も　あらば、
堅く　擁きて、共に　共に
消えて　千尋　を　忍ぶべきを。

われは　磯邊　に　うづくまりて、
北　を　受けたる　岩　に　似たり。
右も　左も　此世　の　風　の
吹くが　まにまに　心　荒れて、
憂きが　上にも　憂きを　重ね、
凝りし　涙　ぞ　斯くは　高き。

闇の盃盤

あはれ、男浪 よ、われは 男、
なれ を 友 とし こゝに 立てば、
すさぶ 胸 にも 愛 は 涌き來。

胸のしぶき

君 と 暗き に つれ立ち 行かば、
なほも この手 を 避け給はん や――
神の光 は 御冬 の 濱 か、
われら ふたり を 砂上 に 竦め、
黑く 並べる 寒影法師。

たゞに その影 隔つる 晝 は、
戀 を 呪ひ の 惡魔 の 巣 なり、

われは、君　なる　羽がひ。の　もとに、
寧ろ　御靈（みたま）　の　ぬくみ　を　得ばや。
君　は、然れども、定め　の　あり　と、
おぞや、御こゝろ　太陽（ひ）　に　憚りて、
岩　に　繁吹（しぶ）ける　波　にも　似たり。

夜　の　ひゞき　に　沸き立つ　潮　ぞ、
胸　の　しぶき　は　火焰（ほのほ）　と　燃ゆる。

光のゆふだち

ああ、初島（はつしま）、南　向ける　島、
今か　その目　覺めたる　ありさま、
黑き潮　に　かしら　を　もたげて、
低き身　にも　罪　をや　拂へる。

いまだ 戸ざす 灰色濃雲(はいいろこぐも) は
既に 高き 日かげ を 見せねど、
雲間 よりぞ 降り來る 金じき、
時に あらず 光 の ゆふだち。

此世 は 寒き 御冬 の よそほひ、
波の穗 をも 雪か と まがへど、
ああ、初島、南 向ける 島、
かゝる あした 覺むる子 さち あれ——
射照(いて)り そゝぐ 朝日 の 雨あし、
これや 聖(きよ)き 救ひ の かんむり。

追憶

むかし 別れし 君 の 影は

若き光を髮に湛へ、
市の眞中にわれを呼びて、
『來たれ、いましを母と共に
尋ねわびぬ』と、熱き淚。

われに冷えたる胸は踊り、
もとの情けの火こそ燃ゆれ。
引くがまにまに追ひて行けば、
古き冠木の門はあらず、
家に坐れば、知らぬ床に
知らぬいろ香の花を活けて、
母もその娘もすがた消えぬ。

あはれ、夢なり――古き愛よ、
十とせその身を今は如何に。

永劫の力

あはれ、御空の　一つ星、
戀しの　君　は　いづこ　ぞや。
共に　波元　に　手　を　取りて、
なれに　誓ひし　樂しみ　も、
今は　覺めたる　夢うつつ。

その　初戀　の　おもひ出　は、
夕べ　の　波　と　もろ共に、
なれに　響きて　のぼれども、
胸　に　答へ　の　なければ　か、
われは　あまたの　愛乙女　に、
または　稀なる　人妻　に、

おもひ を 寄せて なやむ身 ぞ。
戀 には 二つ あるべしや、
なやむ は 永劫 の ちから なり。

のろひ

闇に 手 あり、幾多 の
生 を もとめ、偶々
君 が 胸 に やどりぬ、
無爲 に 飽ける その魂。

狹き 獄舍 に ありて、
斯くや もがく その身 を、
『世 にも をどり 出でなば、

さらに　延さん　いのち緒。』

されど、來なば　光　に
　こゝろ　先づは　縮まん、
斯くて、かしら　もたげて、
明き　御空　のろはん。

呪ひ　に　こそ、あこがれ、
　闇の　ちから　活く　なれ。

のろひの岩

北に　黑雲　涌きて　出でば、
海　の　あらし　と　漁夫　は　發る、
君　を　見初めて　こゝに　三とせ、

戀の うれひ は 廣き胸 の
浪 を 無言 に 荒れて 渡る。

斯くて 死ぬべき 身 にし あらば、
むしろ この世 の 苦 をも 燒きて、
殘る思 は 沖 の おも に
一つ小高(こだか)く 深み 拔けて、
青き 寂しみ 君 を 招き、
君 を 呪ひて 岩 と 爲さん。

されど、人妻、近く 見ては、
三とせ 言葉 を 知らぬ 風 に
われは 吹かれて、深く 活(い)きん。

二つ花藻

君と　ふたり　し、濱の　ゆふべ、
波に　卷かれて　海に　入りぬ、
そこも　波　あり、濱　も　ありて、
靡く　磯風——戀　の　いぶき——
かしら　渡りつ、袖　を　拂ひ、
深く　染(し)み入る　靈(れい)の　かをり。

青き　光　に　青き　ながめ、
われら　藻　の　ごと　石　に　立ちて、
二つ　並べる　影　は　無言——
近く　神秘　の　岸　は　開らけ、
さらに　か青き　岸　を　迎ふ。

君　と　われ　とは　永劫(とは)に　斯くや、
即かず　離れぬ　二つ　花藻、

つねに　沈思　の　底に　醒むる。

沖のテナス

夕べ　繪ぎぬ　に　藍を　溶きて、
遠く　延べたる　海　の　眞中、
天に　小高く　かしら　上げて、
ひとり　暮れ行く　烏帽子岩　よ。
白き　泡浪　裾を　めぐり、
音も　ゆるがぬ　しゞま住ひ。

なれを　遙かに　一つ星　の
青ぎ　またたき、それも　落ちず、
草　の　つゆ　なく、花の香　なく、
寂し心　の——これや、いのち。

夢は　深み　の　底に　入りて、
育て來たらん　玉は　何ぞ。

冲　の　テチス　は　月を　孕み、
深き　眞やみ　に　沈み行くよ。

石をいだいて

石　を　いだいて、われは　眠る。
夢　に　遠波　遠く　寄せて、
白き　眞砂　の　うへ　を　洗ひ、
青き　草葉　の　道　を　濡らし、
高き　深山　の　裾　に　入みて、
木々　の　樹ずゑ　は　朱に　染まり、
谷と　谷と　の　もだし合ひて、

深き 秘密 は かげ を 照らす。

それよ、しぐれ の 過ぎし 跡ぞ、
冷えて 覺めたる 旅 の ひと夜。
あさ日 寂び照る 石 の うへに
落つる なみだ も 血しほ 爲して、
秋 は 身 を 切る 亂れ燒き刃、
盡きぬ いのち を 痛ましむる。

細き水の緒

曾て、君、あたゝか なりし
おもかげ よ、秋野 の すゑ か。
萩 は 散り、すゝき は 立ちて、
悲しみ の 風 ぞ 西 北、

一もとの樹よりそよぎて、
その蔭のうら寂ぶ野路、
枝を分け、枯れ葉踏み行き、
われは今胸の思ひ出。

野は盡きておもひは盡きず、
戀はまた速き流れか。
近ひゞく琴のね止みて、
白絹のほそき水の緒――
石のへに見る夢のごと、
わが秋は暮れて行くなり。

眞白男涙

（寒き濱邊に立ちて米野口君の南遊を思ふ）

友よ、旅路 は 椰子 の 樹かげ、
暑き 葉ぶき の むろ を 出でゝ、
幾代 寂びれし 一つ島 の
磯 に しば打つ 眞白男浪――
君や、身づから 詩 とぞ 碎け、
こなた 小寒 の 濱 に 通ふ。

遠く 南の風 は ぬるみ、
あはれ、島かげ いとも 無言、
夢 の まなこ を 過ぐる 如く、
うすら絲 の すそ を 引きて。
君 が こゝろ は 胸 に 響く。

これぞ まぼろし、うつゝ ながら、
友よ、互ひ の 聲 を 離れ、

しばし自然の寂(さ)びに飽かん。

月と猫 外貳拾篇

月と猫

橙の 樹の間 を 漏る月 の
影は、ふるひて、座に 落ちぬ。

誰が ゑみまけし 魂(たましひ) の
かた碎け ぞと、そも 小猫——

白き 小猫 は 走(わし)り來て、
ただ つくねんと 見守(みまも)りぬ。

泡と つぶ立ち、玉と 散り、

闇の盃盤

散りては　つどふ　その碎け。

白き　小猫は　ざればみて、
つかむと　すれば　手を　照りぬ。

月と　猫　とは、その夜　より、
わが座を　和す　靈　なりき。

わがゆらぎ

暗き日　と　明き夜　は、今、
きぬごろも　受けつぐ　けはひ

一日　の　物もひづかれ、
さし引き　は　空しき　袖か。

堀端 の 枯葉やなぎ の
ちからなく さやぐ ゆふぐれ。

その さやぎ 胸に 渡りて、
わが心 いづれ の 影ぞ。

水ぞら を さへぎる 枝か、
水の面 に 黒める 幹か。

暗き日 と 明き夜 は、今、
目まどひ や 胸 の くるめき。

たそがれ は 迫り來りて、
われ のみ の ゆらぎ ぞ 殘る。

喘息

苦しきまゝに
　ふと　わが目を　さます――
小ぐらき　寐間の
　小ランプ　くるめきて、
その　いきざしも
　今　はた　迫り來つ

たゞ　じり〳〵と
　あぶら　を　喪る息　は、
油煙に　むせび、
　燃えさす　その光。
くらむ　と　見れば、

一咳(ひとせき) 胸を 突き。
喉(のど)もと までも
いのち は こみ上り、
血は くつ返る
刹那(せつな) ぞ なつかしき——
わが世 は さめて、
わが世 を いだく時。

闇の盃盤

夢 は 失(う)せにし 玉 の 如く、
覺めて 摑(つか)む と すれど、あはれ。
艶(つや) も 光 も 跡 を 絶ちて、
闇 の 盃 盤

闇 に のべたる 片手 ばかり。
ゆるむ 節々 ちから 添はず、
戀 も のぞみ も なかば うつゝ。

まなこ 開らけば、暗き かもゐ、
あやし まぼろし これを めぐる。

鬼 よ、羅刹 よ、夜叉 の 首 よ、
われを 夜伽 の 靈 の 影 か。

死 はも わが身 を 獄 に つなぎ、
肉 は 魂 とも 燃えて のぼる。

見えぬ 火の中、水の中 の

畏怖 と 威嚇 は 迫り 來れど、
酒 の かをり に 泡 の いのち、
甘き 歡樂 ねむり 誘ふ。

闇の 盃盤 闇 を 盛りて、
われは 底なき 闇 に 沈む。

かくて 夢 より 夢 を 浮び、
とこしなへ にも 生 に 醉はん。

朝

おもひ惱み の 夜 を 過ぎて、
呼ぶ聲 あり と まよひ出つ。

（かしら　に　細月　の
たゞ　消え殘る　雲の影。）

われ　や　空なる　あこがれ　の
もぬけ　の　門　を　見張り人。
（ゆん手　の　御寺　より、
うち出す　鐘　も　夢　の　聲。）

胸　の　透垣　透　通り、
見ゆる　は　君　の　すがた　のみ。
（濱邊　の　路草　に
いとたゆげなる　露　の　目見。）

われは　疲れぬ、けふも、亦、
空しき戀　を　いだきつゝ。

（踏み行く　海路（うみぢ）　より、
日　ぞ　きらゝかに　登りける。）

重き　この身　を、君　ならで、
やすむる　御手（みて）　の　あるべしや。
（ああ、また、松原　に
わが世　を　歎く　朝は　來ぬ。）

葉卷のくゆり香

ひそかに　君が
　つけたる　卷煙草、
葉卷（はまき）　の　くゆり
　この身　に　染めて　より、
かさねて　飽かぬ

出會ひ　の　苦しさ　よ。

よそ目　を　避けて
　會ふ　度毎に、君、
熱るゝ　胸
　ほむら　を　訴ふとも、
別れし　跡　よ、
　思へば、人の妻。

獨り　し　あれば、
　いよいよ　なつかしや、
くゆらす　煙　の
　中より　見え來　なる——
くちびる　燃えて、
ひとみ　を　凝らす　人。

眉間の色香
　拂へど、妄執（まうしふ）か——
知力を卷きて
　覺むば、且、凍り、
紅蓮（ぐれん）の熱は
　身を燒く阿鼻地獄。

罪呼ぶ聲は
　底より響くとも、
はだへは裂けて、
　血しほぞ踊る（をど）われ、
君もて遊ぶ、
　君、われもて遊ぶ。

互ひ　の　いのち
　今更ら　惜まれて、
苦しむ　ひま　を
　樂しき　夢の世　ぞ。
戀　こそ　籠れ、
　葉卷　の　くゆり香　や。

醉中吟

四疊半、酒の香　こもり、
蠟燭　の　光　は　暗く
またゝきて、ねむり　を　誘ふ。

黑檀　の　艶――南國　を
忍ばす　か――潤み　帶ぶる　は、

三の絲　切れし　細棹。

そを　執らん　力　も　添はず、
歌ひ女は　柱に　倚りて、
醉中　の　淨にや　入れる。

いそがしく　めぐる　眸　も、
今は　たゞ　伏し目　に　隱れ、
さながらや　安坐　の　佛。

手向けたる　金ぶち猪口　の
底　にして、照らす　名文字　ぞ
酌ぎ足せし　酒　に　ゆらげる。
奇しき　は　猪口　か、その名　か。

黄がねなす　あまき　しづく　を
飲みほせば、花　降り來たる。

降る花　は　白き　曼陀羅華——
その毒　に　染みて　や、わが目
くれなゐ　の　燃ゆる　色　あり。

その色　の　消え去る　闇　に、
芥子粒　の　圓き　たましひ
あつまりて、巨靈　と　見えき。

その跡　に　つづくは　黒き
ころも數——これ、『悲み』ぞ——
手　を　垂れて、よよと　泣き行く。

暗やみ ぞ――また、その跡 を
音も なく 追ひ來る 菩薩、
『ほゝゑみ』の 蓮華 に 乘れり。

『これ なり』と、われは 叫びて、
高飛ぶ や 饑ゑたる 鷙鳥、
『救へよ』と、身 もて すがりぬ。
『君 も 亦 醉へり』と、答詞――
ながむれば、かをり ゆかしき
歌ひ女 の 膝 に ありけり。

褄とる君

一

褄 とる 君 の
闇 の 盃 盤

足音(おと)は、深山邊の
奥なる杉の
林に闇を俯(ふ)せ、
黒がねとざす
めぐりを脊屈(せぐゝ)みて、
落ち葉の上を
拔き差す狼の――

それかも、暗き
高樹の樹(こ)ずゑより、
したゝり落つる
夜つゆもをのゝきて――
たゞさへ、かゝる
折には、身に入(し)むを――
と絶えて、跡の

ときめく 胸 の 寂び。

悽 とる 君 の
しのび は、墨染め の
死 と こそ 響け、
されども、しめやぎて——
まさ夢くるゝ
軋れば、醉ひごゝち。
手に 手に、森 の
香 を こそ さぐり寄れ。

二

悽 とる 君 の
別れ は、燭臺 の
火 は 燃え行きて、

流るゝ　蜜蠟　の
名殘　は　凍り、
そのかみ、水盤　に
油　の　玉　の
水漬き　を　おもひ出　の——

それ　かも、胸　の
秘密　を　あばかれて
かばひ　も　得せず、
こゝろ　は　引かれつゝ、
再び　會はん
たより　の　無きが如、
わが身　は　全く
冷えたる　うるし闇。

棲とる 君 の
足音(おと) は 野狐 の
逃ぐる と 聴ゆ、
されども、慕はしく――
おもひ の くるゝ
閉づれば、きぬぎぬ の
痛まし。ふたり、
世 を こそ 隔つらめ。

女露男露

ゆふ立ち 晴れし
御空(みそら) の おもて をば、
青み は 重く
電絲(でんし) に たるみ あり。

その線(すぢ)づたひ
走(わし)る は 露 ひとつ、
『眞中(まなか) に とまり、
孕み の 機 を 待たん。』

ちいさき 胸 の
きらめき 散らぬ 間 を、
『やよ、待て、しばし』
と、露 の また 一つ、
『一なる 女魂(めたま)、
なが身 の 秘(ひ)め力(ちから)
許せよ、共に
短き ながめ ぞや。』――
『二(に)の魂(たま)、わが脊(せ)、

君、若し　そを　知らば、
われら　の　望み
今　こそ　滿ち足らめ。』
渠等　は、斯くて、
ひとつに　煌めきぬ、
落ちし　は　二つ、
消え行く　元の露。

闇中悲歌

ああ、闇の矢　よ、
うつろ　の　胸　を　射て、
その數　あまた、
拔きさす　餘地（よち）　も　なし。
われ、針ねずみ、

針　みな　逆生(さかば)えて、
まろべば　深き
痛手　の　疼(うづ)く　のみ。

樂しき　小夢(をゆめ)
その影　晝の間　の
光　と　消えて、
こゝろ　は　うるし室(むろ)。

戸ざせる　窓　の
しめり　は　黑くして、
暗き　に　乾く
御靈(みたま)　の　見ゆべしや。

苦しき　肉　の
癡(し)ひ目(め)　を　しぼりづる

涙 や、實にも、
　やみ夜 の 闇 映す。
神ら は 亡び、
　望み も 失せし 世 ぞ、
おのれ を 追ひて
　生き死ぬ 物 の 呼吸（いき）——

はじめ の 呼び に
　潜（ひそ）める 獸（しし） 動き、
次ぎなる 吸（ひ）き に
　むくろ は 開けつゝ。
ああ、この闇 に
　醒めたる われ は あり、
刹那 に つゞく
　死の苦 を こそ 思へ。

隣りの　水車
　かたこと　音絶えず、
わが胸　深く
　悲痛を　刻むなり。

にほひ杉

大谷川　行く水　早く
さそふとも、御空に　高ら、
いや増しに　さかゆる　杉よ。

數百年、數百の　幹は
御山邊の　坂と　もろとも
延び立ちて、御やしろ　深し。

奇し御魂、神秘 の 闇を
高ら枝 の しげみ 蔽ひて、
鼻さき を のぼる いし段。

つち 近く 人 は 這ひつゝ、
いつまでか 暗き さまよひ——
而も なほ あゆむ と 見るや。

思へ、この 木々 の 親 さへ
印度 には すでに 倒れて、
その影 を 奈落 より 引く。

わが足 の 音 とも 見えず、
こつこつと 物か の けはひ——

たゝずむ　は　『をのゝき』　なりき。

時　こそは　如法闇黑、
樹の間　より　漏り來る　星　の
光　とも　にほふ　は　何ぞ。

今や、われ、犬なる人　か。
おぞけ立ち、夜つゆ　を　浴びて、
暖國　の　きざし　に　醉ひぬ。

男涙の小刹那

物おもふ
　まなこ　に　開らけつ、
寄せ來たる

男浪(をなみ) の 小刹那(ことせつな)。

遠つ海(み) の
奥なる ひゞき を
揚ぐる かや、
寂しき 目の前。

いと白き
うねり は——力 ぞ——
青(あを)よどむ
そら をも 乘せたり。

七重(へ) 八重(へ)
その道 折れ來て、
おほ地 の
闇 の 盃 盤

御胸　を　打つなり。

その音　は
虚空　を　めぐりて、
わが身　はも
立てる　は　釣り殿。

この　地球
つち　より　亡ばゞ、
なれ、海　に
増すらん　秘密　ぞ。

わが戀　を、
はた、わが　望み　を
はぐゝまん

沖べ の ふる郷。

いにしへ の
テチス が 住ひ も、
實に 今は
むそみて、わが胸。

吹き渡る
大氣 に ゑぐりて、
眞空 を
いだける この生。

湧き返る
いのち を 迎へて、
今 こゝに
闇 の 盃 盤

御靈に　向へば、
物思ふ
　まなこ　に　開らけつ、
寄せ來たる
　男浪　の　小刹那

紅の星

闇　を　落ち來る　紅の星　よ、
根なく、榮え　なく、光　あらず。
枯れて　しぼみし　世々　の　地塊、
繁く　つゞきて　目　をば　横ぎる。

あはれ、その道颪を起し、
音は遠きを引いて叫ぶ。

畏怖と威嚇は渦と殘り、
覺めしわが魂夢とめぐる。

われは生々、ここに振ひ、
星の行くゑに耳を開らく。

夢はめぐりて

夢はめぐりて花と咲きぬ、
川のつゝみの目ざましさよ。

曉の夜羽根は水に流れ、

殘る　かすみ　は　枝　に　ゆらぐ。

示めせ　姿　を、鳳の鳥　よ、
ゆふべ　見えし　は　尾羽の　破ぶれ。

われは　そのごと　常に　破れて、
かをる　光　の　裾　に　迷ふ。

あはれ、この花　ねむる　ままに、
春　と　散らばや　戀　も、魂　も。

の　ろ　ひ

君　より　得てし
愛の根　ありとせば、

わが世　は　直ぐに
　のびけん　くるま菊。

君　ある　方を
　日なた　と　向き直り、
黄がね　の　花は
　おほ輪　に　咲きけんを。

しのびの魔　ゆゑ
　根　さへも　抜き取られ、
つめたき　闇は
　わが世　を　飢やす　のみ。

なさけ　の　かたゐ、
　かたち　を　かき消しぬ――

闇　の　盃　盤

氷と冷えて、
のろひは君まとふ。

今人妻の
苦しみうべなれど、
そは見殺さん――
わが身の苦を知れや。

日比谷公園

あはれはあれど、
そとだに近よれず、
年増の威嚴
噴水あとに消ゆ。

響くは　かなた
管楽　オペラの曲、
いとしめやぎて
市中　を　雨に　呼ぶ。

松本楼　に
あつ物　すする　客
顔　赤くして、
秋雨　酔ひ　を　帯ぶ。

日比谷　の　秋　の
香に　こそ　しのばるれ、
かの　まよはし　の
ゑまひ　の　おもかげ　や。

胸にし　秘めて、
公園も　あゆまるる。
見え來ば　君を、
されども、唾に　吐かん。

病室

あざけり　の
惡魔　あり、
かしら　を　蹴つ　と　目は　さめぬ。

闇夜　なり、
狹き室、
枕に　かよふ　息　ばかり。

寢がへれば、
いち道の
光　まばゆく　輝きぬ。

その　かげ　に、
わが戀の
姿も　ちらと　浮びける。

束の間　ぞ、
ただ　しばし、
思ひ出　こそは　親しけれ。

身は　やがて
朽ち行かん、
ただ　惜まるる　息の色。

紫に
朱を 點じ、
そはも 沃度の にほひ なる。

枯れ葉

枯れ葉 にも 魂は ありける、
靜かなる 空 を 花蝶。
とりどりに 舞ひつ、纏ひつ、
音 を しのぶ 別れ の 歎き。
高幹 の 枝 に さかりて、
沈み行く 二の世 や いづこ。

ひとつ枝に　またと　見まじを、
親しみ　は　苦　の　穗ずゑ　のみ。

中禪寺にて

黑く　よどめる　水　の　おも、
油　を　延べし　海　の　如。

ひたり、ひたり　と　艪に　なづむ、
音　さへ　おもき　わが　こゝろ。

遠く　君　より　離れ　來て、
暮れ行く　けふ　の　寂しさ　よ。

舟 の 行くゑ に 引かれて は、
わが身 も 消えて 入る おもひ。

この無言

ああ、もみぢ葉 は、死の川 の
黒き に 染みて、沈みけり。

その 黒染め の 深淵 を
くゞり行きけん、眞すがた よ。

世 の 秋風 は 寒くして、
手には 殘れる この 無言。

孤寂

（夫人を失へる人に代りて）

庭の 青葉 の 静かげ に
呼ぶ聲 あり ど 立ち出でぬ。

呼ぶ聲 見えず、この 孤寂、
わが まぼろし は 破れつゝ。

陰府 まで 暗く 透き通る、
その 思ひ出 の 心ながれ。

去りにし 花 の 小姿 を
それぞ と 抱く よしもなし。

海音獨白 外五篇

海音獨白

一

父 には 捨てられ 母 には 別れ、
物乞ふ 袋 と 共に まろび、
或村 はづれ の 山根 に、ひとり
甘乳(あまち) の 流れ を 呼べど 出でず、
稚き こゝろ は 七島(なゝしま) 八島(やしま)、
伊豆 吹く いなさ の 風 を 痛み、
どよめる 海邊 の 小浪(をなみ) に つれて、
消え行く 身 なりき——今は 昔。

二

べに貝、小砂の しめれる 道 を、
かもめ の 足跡 かろく 踏みて、
たまたま 過ぎ行く 托鉢和尚、
我慾 と おのれ は 空し 眞袖、
無垢衣 の ひらめく 兩手 を 延べて、
拾ひし 珍貝 紅 に あらず、
つゞれ に まつはれ その世 を 叫ぶ、
ああ わが身 なりき――それも 知らず。

三

伊東 の 山腹、さくら の 御寺、
松月院主 の めぐみ ゆたか――
三界 衆苦 を 敎へ に のみぞ、

その實　背めし　は　海　の　ながめ。
相模　の　灘　さへ　平らに　霞み――
白帆　の　孕みし　兒　かも――われは
あさゆふ　讀經　の　つとめ　を　盡し、
樂しく　わが師　に　つかへたりき。

四

夜ごと　に　持ち出す　妙法華經、
柔和　の　御言葉　序品　講ず。
われ、その　御聲　に　有結　を　拂ひ、
諸漏なき　阿羅漢、時に　現ず。
沈思　の　彼岸　に　至れる　魂　は、
されども、斯くて　ぞ　つゞかざりき、
或時、あはれや、惡夢　の　如く
わが身　の　昔　を　知れば、無恃古。

五

忽ち、胸　にも　おほ浪　立ちて――
　わが身　は　わが師　の　賜びし　名　なり――
海音、どよみて　狂ふ　は　血しほ、
　ひそかに　念じて　これを　喝せど、
たとへば　佛　あり、迷へる　衆生
　そこばく　百千　浮ぶ　如く、
悲痛　の　數々　俄かに　湧きて、
わが　寂しみ　こそ　深く　覺むれ。

六

今年、殊なる　彌生　を　迎へ、
　わが師　の　親しみ　さらに　增しぬ、
父　とも　思へば、失せにし　母　の

遠き　に　住して　われ　を　呼ぶ　か。
あさ　起き出づるや、御墓　に　詣で、
はじめて　名乘るも　なみだ　ばかり——
時しも、かたへに　櫻　の　一枝、
わが名　を　語りて　ゑめる　女　あり。

七

渠、その初子　を　土中　に　呑まれ、
苦愛　の　絹糸　に　引かれ　來たる。
朝　なり——あらたの　光　も　添ひて、
御手なる　花　には　露　を　帶びぬ。
その　優言葉　に　久遠　の　慈母　も
斯くや　と、わが脈　天鼓　の　如く
おのづと　打ちては、ぬくもる　はだへ、
血しほ　は　いつしか　逆に　のぼる。

八

世尊の 方便、藥 も 美味 も、
　この毒 受けては ちから 具せず、
戀慕 は 乃ち 渇仰 なれど、
　かの女 は 人妻、われは 孤露 ぞ。
日々、障子 の かげ より 見れば、
　夢路 に 咲き行く 普賢菩薩――
ああ、その 蘂散る 薄くれなゐ の
　一瓣 を なりとも 門 に 追はん。

九

仁王 の 力味 も、無形 の 魔鬼 を
　防ぐ に 由なき 春 の 精舍、
戀 ゆゑ ならば ぞ、わが 撞く鐘 の

ひゞきは笑ひて照らす境。
聳ゆる御寺の柱に寄りて、
如來の香爐のくゆり聽けば、
おごそかなるかな、わが師のおもて――
聖なる寂しみ熱く涌きつ。

十

暗きに燃ゆるはうつゝか夢か、
まなこを閉ぢても開らく堂宇、
左右の柱は照り輝きて、
その火は巨龍の欄間つたひ、
ほのほの舌もて讀經のつくゑ
燒くよと見る間や、聲を擧げず、
戀しのすがたは眉間に現じ、
御經をさゝげてわれを招く。

ダナエー獨白

（シモニデースの作なる輓歌斷篇の面影を偲びて、新たに作れる。）

父に 追はれて、ダナエー が
その 隱し兒 と 波 の うへ、
あまつゼウス を 箱ぶね に
あこがれ 渡る この戀 や。

乾ける 土 を 盛りたる 身、
沸き立つ 潮 に ひたりなば、
解けて 碎けて、おのづから
抱き兒 の 寢がほ 見えまじを——

闇 と あらし の 迫り來て、
安き は 所天 の かたみ のみ。

あはれ、不安 と かなしみ の
火 もて ほてれる わが目 には、

海 の ちから の 高どよみ、
遠く 燃ゆる を 見し こゝろ——

ああ、神 ゼウス 身に 觸れて、
もろき いのち は 見えそめぬ。

もろき いのち の 見えそめて、
朽ちぬ 榮え ぞ うらみ なる。

ああ、燦爛 や 天の座 は
高き どよみ に 乘り來たる。

この兒 を 受けて。おほ御つま、
御座 の ほとり に そだてしめ、
なが 常聖 の 血すぢ をば
アハヤ の 勇者 たらしめ よ。

朽つる 宿世 の 身 なれども、
こゝに せめて の のぞみ あり。
聖き 榮え の 照らす 間 ぞ。
この まぼろし の 見ゆる 間 ぞ。」

まことの闇よ、いざ、さらば、
その手を延(の)して來れかし。

うらみと歎き、死とつちを
このはこ船にくつ返(がへ)し、

深(ふか)きひゞきをつたひ來る、
熱にぞわれは燃えあがり――

ほのほと成りて、まのあたり、
戀しの神にしたがはん。

死獸

御星の定めよ、か深き森の

樹の間 を 漏りては、ああ、その 死毒、
聲なき 雨 と や 射そゝぐ 征矢 の
一つ に 當りて 手負ひし 雄猪。

ひそめる 生の火 忽ち 燃えて、
まろぶ は 奇し魂――怒り の 火焰。
あらゆる 力 を まなこ に 籠めて、
眞やみ の 小洞 を 逸りてや 出でし。

あま聳り 立ちけん 火ばしら、根 より
折れたる いきほひ、いち時 は 眞晝、
颪 切る 響き を 暗き に 引きて、
ま直ぐ に 驅け來つ 開らけし 枯野。
草木 の 觸るゝ を 熱れ に 燒きて、

はてなき　大地　を　たゞ　馳せめぐり、
御空(みそら)　に　輝く　その　星々　の、
かしら　に　迫(せ)ばまる　苦　を　こそ　堪ゆれ。

おのれと　おのれ　の　苦悶　を　握り、
獵師　を　離れて　叫び　は　悲し。
いのち　の　驅(かけ)り輪　次第に　狹く、
その身　を　かこひて　つひにゝや　逝ける。

ゆふべ　の　戰ひ　破れし　武者　の
あしたゞや、死の床　しら露　しとど。
牙齒(きば)　持つ　むくろ　の　毛　も　逆立ちて、
見よ　その　威嚇　は　小夢(をゆめ)　と　冷えぬ。

人肉狂賣

『肉を買へや、赤き肉を、
われは娘の肉を持てり。
肉を買へや、人の肉を、
われは娘の肉を賣らん。』

『あはれ、翁よ、その籠に
盛りたる肉は生血垂る。
いかで、翁よそを持ちて、
人の子肉を賣るといふ。』

『遠く放つ砲の彈丸に、
子等は打たれて早く亡び、
近く寄せしいくさ人に、
妻は犯され、耻ぢて死にぬ。

『淸の國　に　政治　あらず、
民　は　野に　伏す　獸　の　如し、
利器　を　夷狄　運び來たり、
あはれ、自在に　狩りて　暮す。』

『さらば、そが爲め、生き殘る
娘　や　切りて　賣らんずる。』

『さなり、家　の　うさぎ　さへも、
擁く　その子　の　數　を　計へ、
子等　の　日々に　減るを　見ては、
殘る　一つ　を　食ひ　隱す。』

『それは　毛物よ、人　ならば、
稱ふる　道　の　あるべきを。』

『正義　何ぞ、平和　何ぞ、
　われに　何等　の　致す　あらず。
北京政府　弱き　ばかり、
　かれ等　おのれの　威をば　振ふ。

『肉　を　買へや、赤き肉　を、
　われは　娘　の　肉　を　賣らん。
いまだ　曾て　穢れ　なき　を、
　われは　殺して　刻み持てり。』

『なれは　狂へり、いざ、今を
　行くべき　方に　從へや。
こゝろ　求むる物　あらば、
　來りて　告げよ、わが陣に。』

『既に　愛しき　妻子　あらず、
　のがれ　行くべき　穴も　失せぬ、
飽くを　知らぬ　他國人　に
　之し　與へば　われは　足らん。

『肉　を　買へや、赤き肉　を、
　われは　娘　の　肉　を　持てり。
無辜　の　民　を　屠る　上は、
　人の肉　をも　來り食へ。』

『來れ、狂者　よ、その口　を
　つぐみて　われに　從へや。
いかに　狂ひて　あればとて、
　わめきて　泣く　を　許されじ。』

『何ぞや――野邊 を 走る水 の
光る つるぎ に 身をも 召すや。
肉 を 買へや、赤き肉、を
さらば この身 も 共に 行かん。』

凱旋兵

『吾子 よ、あはれ、八幡、
無事 に 歸り 來し か』と、
母が 熱き なみだ の
顏 は 消えし その跡――

『われも 母 ぞ、うらみや、
愛しき娘 失せたり、
淸き 肌 は 裂かれて、

耻ぢ　を　陰府（よみ）　に　寄せたり。

『思ひ知れ』と、苛責（かしやく）　の
杖　は　重し　その都度、
燃ゆる　まなこ　ありあり――
これぞ　秘（ひ）せる　家づと。

『君よ、あはれ、金比羅（こんぴら）、
つゝがなくて　斯くや』と、
妻が　籠（こ）むる　なさけ　の
姿　消えし　その跡――

『われも　妻ぞ、うらみや、
ちから　なくて　この罪、
戀ふる　人　を　隔（へだ）ちて、

こゝに陰府の　わび住み。

『思ひ知れ』と、苛責の
聲は近し　この褥、
闇に滿つる　密事の
悔ひぞ深き　胸底。

むしろ毛物　なりせば、
それも常の　快樂、
なまじ勝ちに　狂ひて、
餓ゑを滿てし　罪惡。

劍を拔かば、まだしも
血液と朽る　小あし手、
弱きまゝに　ひそめて、

墓に追ひしおもひ出。

心の臓にからみて、
無辜の民のわざはひ、
雨の肺にすがりて、
無垢の娘等の歎げかひ。

砲の陣は、黒烟
消ゆるまでの込み合ひ、
これは、血の輪つぶつぶ、
刻をきざむ戰ひ。

火矢のなやみ頻りて、
敵は胸の奥なり、
かしら觸るゝ枕に、

こゝろ 責むる 聲 あり。

ひとり 覺めし 夜中
　夢 は 殘す 人妻、
ほてる 目 をば めぐりて、
正面(まとも) に 照らす 胸隈(むなぐま)。

強き 神 を 脊負ひて、
　われ に 放つ 矢の數——
荒れて 廣き 心野(こゝろの) に、
渠女(かれ) は また も 叫けばす。

刹那 毎に わが身 の、
　死 をば 受くる 苦しみ、
慾 を 斷つ に 從ひ、
　闇 の 盃 盤

罪 を 悟る 悲しみ。

この身、粉末 に 碎くも、
　一つ 毎に 口 あり。
わが血、石 に こぼるも、
　ひと輪 毎に 耳 あり。

かの女 逃ぐる その時、
　おほひ 得たる 衣 なし、
斯くぞ われも 追はれて、
　隱れ 行かん 空 なし。

いのち 外 に 拾ひて
　歸る 道 の 萬歲、
暗き室 に わが身 を

今や 呪ふ 生涯。

朱のにじみ

あはれ、翁 の 入れ墨師、
しがめる 顔 に 目 は 燃えて――
　闇 には あらねども、
掟 に 反く 暗き室。

身投げ娘 の おもかげ を
小針 の 尖に 思ひ出で――
　若者 面壁 の
脊な は、衣なき 玉の肌。

衣なき 脊な は、妹 を
　闇 の 盃 盤

きざむ　に　つれて、痛み行き――
　斯くても、『わが脊よ』の
戀しき　聲は　聽ゆ　なり。

失せにし　人　を　追ふ　罪　の、
樂しき　胸　を　いだきつつ――
　忍ぶ　は　戀の苦　か、
まざまざ　浮ぶ　阿鼻地獄。

『父よ、お房　の　罪業　は、
斯くて　わが身　に　引き受けつ』――
　翁　は　答へ　なし、
ただ　差す墨　の　匂ふ　のみ。
靈ある　針　の　走り彫り、

成れる 姿 は 活き活き と——
　裸形 の 女神 なり、
情 には 滿つる 肉付き や。

目蓋 と 口 に 朱 を 入れて、
さながら 元の 兒 は 生まる——
　翁 は 睨み詰め、
『淫婦』と ばかり 罵りぬ。

兒 は その頸 ふり向けて、
若き 血しほ ぞ 亂れける——
　口づけ したる 者、
父 の 眸 に 燃えて 見ゆ。

あけ は にじみて 脈 に 散り、

心狂ひて息絶へぬ――
翁は怒りつつ、
おのが喉笛(のどぶえ)つき刺しぬ。

叙事歌曲 黄金鱗

一六部姿

鞍馬山　さか路　を　くらみ、
星あかり　樹の間　を　漏れず、
そびえ立つ　絶壁　の　うへ、
谷　深き　闇　に　臨みて
耳澄ます　六部　の　すがた。
草も　木も　眠る　深山　や、
夏の夜　の　風　は　高ぞら、
寂として、森　の　したゝり、
滴々と　落つる　響き　を

底 までも 立ちて や 繋ける。

あるは、又、遠吹く あらし、
おほ梢 の ほづ枝 に 當り、
その枝 と 戰ひ 過ぎて、
いま更に 共に 語らひ、
山津浪 起す を 聽くや。

あるは、又、つけ狼 の
岩が根 を 傳ふ つま音——
さりとては、ことも いぶかし、
脊なる 廚子 下に おろして、
『人 あり』と 闇を のぞきぬ。

二 わが兒

『ああ、されば、この　谷の底、
なれは　今　棄て兒　に　等し、
年は　まだ　二七　の　つぼみ、
持て離す　花　とは　成らで、
咲き出でし　遺傳　の　やまひ。』――

『その病　癒す　爲め　なり、
「しばらく」と　母が　御言葉、
四五日　の　備へ　給ひて、
十日　こそ　既に　過ぎつれ。
身は　こゝに　縛られしまゝ。

『約束　の　迎へ　來らず、
わが心　うれひ　に　堪へず。
起たん　にも　からだ　の　繩目、

たゞ手のみゆるみ殘れど、
わが口に運ぶ糧なし。

『われや、かの病める痩犬、
かへり見るものなくも、なほ
家戀し、山はおそろし。
さればこそ、聲を限りに
日を叫び、夜を歎きつれ。』

『うべや、なれ、いづこの子ぞ』と、
問ふ六部、答ふるをとめ、
『わが家は――語るもつらし――
大阪の藥師なれども、
今は京、鴨川づゝみ――

『四條橋、人 こそ 通へ、
うはべ のみ 映る その様
川水 と 清き を きそひ、
世は すべて つれなく あれど、
母 のみは しかある まじを――』

『さて、父は 如何なる 人』と
問はれては、たゞ 涙 のみ、
『ああ、君よ、父 ありけれど、
五六年 母 に 去られて、
その故 を われは 知らじな。』――

『大阪 に――もとは 藥師 の――
その父 の 里 を 知るや』と、
かれ、今や すまひ 正せば、

『うはゞみ　の　鱗取り　なり、
大峯　の　奥に』と　をとめ。

『されば　なり、わが娘　よ』と、
手　を　投げて　いだき　締めたり、
『なが母　は　わが　連れ添ひ　ぞ、
十年　の　仲　を　棄て、又
いまし　をも　滅ぼさん　とす。

（をとめ子　は　驚ける　のみ。
『聽け、しばし、かれは　つれなし、
斯くまで　と　知らざりける　よ、
人　の　忌む　因果　の　やまひ、
おのれ　のみ　隱さんと　して。

『その昔、われは 國栖人、
三上 の 奥に 笛 吹き、
ちはばみ の 眠り を 覺まし、
味噌 の 香に 之を 招きて、
黑がね の 柵 を 卷かせつ。

『七重、八重、かたき 圍み を
やすらかに その柵 の うち、
なまぐさき 夜風 しのびて、
金色 の うろこ 取る わざ――
樂しき は、戀 ゆゑ なりき。

「癩病 の 藥 なり とて、
こを 賣りに 齎らす 毎に、
かね よりも、はた 器具 よりも、

なが母　の　若き　すがた　を
目に　映す、これ、さち　なりき。

『三とせ　覺め、三とせ　もだえて、
町人　の　口　にも　のぼり、
わが思　叶ひて　見れば、
その藥　服する　ものは
戀ひ渡る　わが妻　なりき。

『斯くて　しも　なれは　生れて、
十　までは　無事に　育てど、
子にも　そを　飲まし　置かん　と、
われを　また　山に　遣はし、
その跡　に　かげを　隱しぬ。

『無情とや、罪とや云はん。
（子のかほの壞れは搖りぬ。）
『されど、わが長の戀人、
この數年、行くゑ尋ねて、
信もなき行者のよそひ。

『がわ里の深き森かげ、
黑がねの柵に寄り來て、
味噲の香を聽くうはばみや、
それの如身を削られて、
なほ、われは戀を追ふなり。

『あるは、この山を一と越え、
あなたなる緣者にもやと、
夜をつぎて坂路を來たり、

なが聲　を　聽き得たる　こそ
望みある　手づる　なりけれ。』

『ああ、父よ、なつかしき　かな。
この上は、憎まるゝとも、
母　に　行き、母　と　住まはん。』──
『愛しき兒　よ、とく　谷を　出よ、
負ひ厨子　に　入れて　運ばん。』

三　負ひ厨子

『ああ、などか　見るも　物憂き、
五とせ　を　古りし　この厨子。
古りにし　は　五とせ　なれど、
之を　負ふ　行者　の　よそひ、

戀に醉ふ靈(たま)には添はず。

『ああ、などか見るも物憂(ものう)き、
五とせを古りしこの厨子。
古りにしは五とせなれど、
百とせを戀ひも渡れば、
とこ若の心に添はず。

『ああ、われはこの厨子(づし)負ひて
古り行かん身ならざりけり。
その重みいと輕らぎて、
わが體(たい)は血しほに踊り、
わが心いのちに溢る。

『最早やわれ六部(ろくぶ)にあらず。

いつはり　の　行者　に　あらず、
信仰　も　爲さぬ　もの　には、
法華經　の　一部　も　何ぞ。
佛像　の　薫び　も　何ぞ。

『戀　のみに　われは　あこがれ、
その戀　を　またも　得んとす。
失なひし　ものを　求めて、
それに　また　行きて　會ひなば、
重き物　すべて　無　なれや。

『闇　照らす　力　も　なくに、
觀世音　谷　に　ころげよ、
その底　に　千とせ　を　消えて、
なほ　恨み　あり　とし　云はゞ、

愛しき兒 の 身がはり と せん。

『來たれ、兒よ、すでに、この厨子、
經くさき 箱 には あらず。
五とせ を 戀 の ぬくみ に
あたゝかき 胸の うち なり――
なれを 乘せ、母 に 運ばん。』

四 絶望

鴨川 の 水 いと 清し、
あさゆふ の 夏 の ながめ や、
よしあし の 映る まゝなり。
されど、かれ、晝 を い避けて、
夜 こゝに 厨子 を おろしつ。

左右への　觀音びらき、
出で來しは　菩薩に　あらず、
『父上』と、西　を　ゆび差し、
『かしこなる　堤　の　ひかり、
それぞ　わが母　の　圓窓。

『わが身　先づ　告げ來たらん』と、
その庭　の　垣根　を　入りて、
をとめ　はも　おどろきにけり――
おのが身　を　山に　運びし、
その人　は　母と　酒ほぎ。

『けふを　また　醉ひて　つぶしぬ――
いろ戀　の　深き　を　見ても、

賓に　われは　京　の　染め屋』と
紺染め　の　手は　かきいだく
白玉　の　ほそき　腕くび。

『こよひ　をば　こゝに　送りて、
あすは　また　よその　花染め――
わが　包む　兒をば　如何に』と、
白き手　を　邪險に　もぎて、
母の顏　窓に　向ひぬ。

かげなる　は　かしら　引き込め、
その答　ひそかに　聽けば、
『世の戀　に　兒は　付き物　ぞ、
生れなば、また　棄て去りて、
なが見目　の　若き　を　めでん。』

をとめ子　は　驚き怖れ、
川ばた　に　走り　來りつ。
『父上よ、　如何で　しのばん、
われは、　かの谷　に　歸りて、
死ぬべし』　と、　泣きくづほれぬ。

『左まで　母、　無慈悲　に　あらじ、
われ、　之を　なためやらん』と、
いけ垣　を入れば、　聽ゆる
うらみ聲、『なれこそ　憂けれ、
遺傳　をば　人に　隱して。』──

『そは　つらし、　よし　隱すとも、
知らるれば、　かの兒　の如し。

その父 の 國栖 の 山人、
むはばみ の うろこ取り をも
とく 棄てゝ、なれを 戀ふなり。』——

『その戀 も、黄がね の うろこ
飲まざれば 腐る日 あらん。』——
『いな、われは 飲みしに 等し、
身も 魂も 斯く 燃ゆるを』と、
相いだき、口 相吸ひぬ。

うろこ取り、ただ 怒る のみ、
之を 避け、歸り 來たりつ。
『愛しき兒 よ、われは 二たび
大和なる 深山 の 住まひ、
森の香 を 寧ろ しのばん。』——

川ばた　の　觀音びらき、
また　人　の　菩薩　を　閉し、
その父　の　脊な　に　負はれて、
行く道　の　うらみ　も　重く、
深山へ　と　闇を　消えたり。

五　水晶洞

大和なる　大臺が原、
森の香　や　深き　に　凝りて、
吉野川　流れそめたり。
その岸　を　のぼり　登れば、
梵字　以て　手引く　洞　あり。

その洞　に　入ること　一里、
水晶　の　眞中　を　うがち、
なみ　奥に　流るゝ　大河、
黑水　の　響き　も　高く、
死の川　の　瀬　に　こそ　似たれ。

地心　より　流れ來たりて、
地心へ　と　またも　歸るか。
おほ洞　の　せまりたる　底、
囂々と　闇　を　振ひて、
その響　逃ぐる口　なし。

この水　に　手足　ひたせば、
手の先　の　痛み　も　亡び、
つま先　の　傷も　癒ゆる　と、

あはれ、また、かたゐ　の　人は
からだ　をも　浴びに　來るなり。

國栖人　の　娘　も、こゝに
全復　の　いのり　は　久し、
されど、かれ、壞れ　增りぬ、
兒　を　棄てし　母　を　棄てし兒、
父に　さへ　やまひ　移して。

あはれ、わが　國栖　の　山人、
つひに　この　御洞　の　あるじ、
うはゞみ　の　體　を　振へど、
また　生ふる　うろこ　の　如く、
朽る身　に　戀　のみ　光る。

その光　いや若やぐ　を
形なき手　に　あつめ見よ。
この奥　の　闇に　供へて、
水晶　の　壁　に　かがやく、
蠟燭　の　火　に　こそ　勝れ。

身は　もとの　六部　に　あらず、
つどひ來る　人　を　計へど、
皆　共に　顏　は　むらさき。
その數　に　妻も　まじりて、
兒　の　そばに　ある　をも　知らじ。

戀のしやりかうべ

はしがき

無形律詩として口語の散文詩を書き初めたのは僕であつたと云つてもいい。が、この意味で僕のあとを追つて來たものは殆ど無かつた。ことさらに無形律を出さうとしても六ヶしいと見えてだ。僕もかかる散文詩を書き初めたと殆ど同時に、この散文詩の心持ちを小説に擴張出來ると考へて、創作の方面ではさう〱『詩界に別れる辭』まで書いて專ら小説に向ふやうになつてしまつた。僕に取つては、この明治四十一、二、三年頃の作を集めた第五詩集は詩と戀とのしやりかうべである。が、その當時僕がおのづからに活躍させた日本語の無形の音律に添つてこれを讀んで吳れる讀者が少しでもあらば、僕の本望はこれに過ぎないのである。

大正四年二月　　泡鳴識

死外七篇

一　胸のきしめき

時計の　ちくたくが　自分の　動悸と　なつて　響いて來た。
すると、今まで、どこだか　知れない
暗い　海の　眞ん中で、大きな　輪がたに　漕ぎまはされて　ゐた　身が、
身の舟　と　共に　とまつて　明るい　ところへ　つれて行かれる。
それは　廣い　野邊だ――

夢に　花が　咲き、花に　夢の　かをり、
かんばしい　風に　吹かれて　浮き世は　千里、
遠く　ひろがる　眼路の　末に
ゆらぐは　木の葉。
その　きらめく　蔭　から、誰れだか　知れない　人の
水汲む　なつかしい　音が　聽える。

あんなに　樂しい　世　なら、
苦といふ　ものは　なかつた　だらうに——今一度
あの　井戸　に　行きたい、
あの水が　飲みたい、
あの水で　拵らへた　酒が　飲みたい。

ここへ　來たのは　間違ひで　あつたらしい。
から　思つたら　また　急に　闇の崖

ちつら〳〵の 胸さきに 迫つて 來て、
息が 詰つたのは 底も 知れない 虛空に 落ちて 行くのだ。

『あー！』と、思はず 聲を 擧げたら、
『あなた、あなた！』と 女房 の 聲、
『しツかりなさい！』と 息子 の 聲、
かしらに 娘、右には 隣りの 妻、
その他の 人々も ゐるらしい。

矢ツぱし 井戸端の 室に 苦しんで ゐるのだ、
聲も 出ない この胸 の きしめき！

畜生！
わが身の ことを 云つて ゐたのか、
今 聽えた 葬式準備 の 話？

二　釘うつ響

けふに　限つて　はツきり　聽える
隣りの　寺の　本堂新築　の　音。
どこの　大工　だらう――吉公らしい、
かな鎚を　使ふ　手が　なか／＼　利いて　ゐる。

あの　お寺の　和尚も
年來の　素志を　爲就げる　のだ。
あたらしいのが　出來て、
古いのが　取りこわされたら、
さぞ　立派な　見えに　なるだらう。

和尚の　胸の　樣に　おだやかな
綠のしやりからべ

池に――緋鯉は　泳いでる　だらう――その　新堂が　映つたら、
わが家　の　二階　からも　見える
この世　の　外の　蜃氣樓！
吉公、しツかり　やつて　吳れ。

トン、トン、トン、トン、トトン！
トン、トン、トン、トン、トトン！
かな鎚　の　音――
どうして　けふは　聲が　暗い？
どうして　けふは　響き　ばかりが　近いのだ？

わが耳　に　釘うつ　のでは　なからうか、
この　トン、トン、トトン？――
あ！　わが身は、もう、和尙　よりも　早く、
別な　新築に　這入つて　ゐるのだ。

葬儀屋が　來て、
わが棺　の　蓋に　釘うつ　ひびき！

三　火　葬

燃えるわ　燃えるわ、
石油に　火を　つけた　樣だ！
ぼう〳〵と　燃える　音ほ
どこからも　逃げる　道が　ない。

このまま　立ちはだかつたら、
不動の　神力　さながら　だらうに——今、
狹く、固く　かこんで、仰向けの
わが身を　燒く　火は——

燐のしやりかうべ

音ある　せいか――風を　つつむ　赤い　眞綿だ。

別に　靈なる　ものが　あるなら、
見えぬ　文字の　あぶり出し日記　も　出ように――
見えぬ　字も　ない、感じも　ない、
熱くも　なければ、痛くも　ない。

生きたいと　もがけば　こそ　熱い　いのち――
ああ、今や、宇宙と　われと　が　全く
燃え盡きる　時が　來たのだ！

緣日

二十日間は　日夜　父の　看護、
十日、十五日間は　父の　なくなつた　跡の　始末、

僕は　がツかり　勞れて　しまつた。

墓と　死と　死の國と　に
餘り　あたまを　つツ込んで　ゐた　から、
陰府　の　臭ひと　勞れと　が　一緒に　なつて、
鼻さきに　ちらつくのは　うす暗い　神經だ。

僕　自身も　早や　一段　低い
夢の世　に　落ちて　行く　氣が　して、
手は　空しい　物を　握り、
足は　空しい　物を　踏む　樣だ。
からだが　何となく　輕く　なつて、たわいがない。

ふらりと　そとへ　出ると、
お地藏さま　の　緣日だ。

夜ぞらを　赤く　照らす　露店の　ランプ、
いくつも　いくつも　かさなり合つて、
遠い様な、近い様な　光が
數多く　僕の　目に　映じて　來る。
僕は　足もとが　あぶなく　なつて、
その光　の　範圍へ　踏み入り　かねた。

鳥渡　踏みとまつて、
からだ　の　釣り合ひ　を　取つて見た。
大道が　僕の　足に　こたへて　來た。
もう、大丈夫　と、歩み出す。

あめ屋　が　ある、きんつば屋　が　ある。
おもちや店　が　ある、古本店　が　ある。
不斷は　氣にも　とめなかつた　物が、皆、

不思議に　おもしろくツて　たまらない――
丸で　新らしい　世界だ。

いそがしく　働く　目を　轉じて、
並んでゐる　植木屋　の　前を　通ると、
父　在世（さいせ）の時は　緣日　の　ある　度每に　出て來て、
こいらで、好（す）きな　植木を　ひやかした　の　だらうと　思ひ出した。
然し、もう、その人　は　ゐないのだ。

ぷんと　燒き鳥　の　にほひが　して來た。
何だか　喰（く）つて　見たく　なつたので、
その店　の　うしろへ　まはつた。

暗い　陰（かげ）　から
明（あか）るい　大道を　見てゐる　と、

ぞろぞろと　おほ勢の　人が　通つて　行く。
その中に　まじつて、圖拔けて　丈の　高い、
立派な　白髯の　老人　の
いそいで　行くのが　見えた。

『おや、お父さん！』
僕は　これを　口まで　出さない　うちに、
僕の　囘復　しかけた　よろこびは
その人　の　うしろ姿と　共に　消えて　しまつた。

庭木の刈り込み

父の　代に　大事に　された　庭木を
僕は　唐ばさみで　刈り込まうと　した。

まだ　時期が　早いと　妻は　云つた。
然し、僕の　胸の　様に
欝々　として　繁つて　來る　庭木を
そのままに　して　置けば、
書齋は　うちそと　から　陰欝な　壓迫(あつぱく)だ。

うす暗い　まはり椽　の　隅に　しやがんで、
うす暗い　心の　目を　放つと、——
時は　文月(ふづき)だ、——
物憂い　梅雨間(つゆま)　の　晴れ日、——
梅の木　ながの　青葉は、
重い　雨に　幾たびも　打たれた　爲めだ、
黑ずんで、
少しも　冴(さ)えた　光が　ない。

目を　つぶつて
考へて　ゐる　樣な　その　枝葉の　かげに、
父は　白い　口ひげ　を　ひねつて、
毎年、粒立つ　木の實　を　仰ぎ見た　のだ。

僕の　子供の　時も　かれは　さうで　あつた、
近年も　亦　さうで　あつたらう。
ところが、僕の　諸方を　放浪して　ゐる　うち、
いつのまにか　父は　亡くなつた。
否、亡くなつたの　では　ない、
僕の　記憶と　なつて　拔け出た　のだ。

最後の　二十日間、
朝に　晩に　看護して　ゐた　のは、
僕の　疲れた　神經の　一端に　觸れた

もぬけ　の　土くれで　あつたの　だらう。
どうも、この　薄暗い　樹かげに、
かれは、見えないが、
まだ　立つてゐる　樣な　氣が　する。

それは　死のかげ　かも　知れない。
と云ふのは、僕が　多年
生活に　疲れ、奔走に　疲れ、放浪に　疲れ、
生の　苦しみ――　それが　いのちで　あつた――を　味はつて　來た　今、
父の　建てた　家を　讓り受けた　氣持ち　は、
一肩　おろせた　だけに、
いよいよ　死に　近づいた　樣で　ある　からだ。

庭の木　を　刈り込む　樣な　ことは
夢にも　見なかつた　初めての　經驗だ。

はしご を 梅の 幹に 立てかけて
なかば それに 攀ぢ登つた 時、
不馴れ の 爲めに
あたまが ふらふらして、目まひが したが、——
元來、僕は 机を 家と する 筆の人だ、——
こんな 植木屋 の 眞似を する 樣に なつた のは、
隨分 氣の ゆるんで 來た 證據だ と おもつた。

實に 僕は 疲れた者、倦じた者、
刹那の 間でも ぐツすり 一安心 したい のは 山々だが、
然し また 死人の 安住は 得たく ない。
睡い 樣で 覺めて ゐる 神經の 働きが、
地上を 離れては、一層
僕の 目前に ちらついて 見えた。

ふと　かた物　の　身てた　動くと
新らしい　樣な　而も　古くさい　樣な　感じが、
黑ずんだ　青葉　から　つたつて　來て、
僕の　使ふ　はさみ　の　音に　聽えた。

ちよきん、ちよきん！
また　ちよきん、ちよきん、ちよきん！
何だか、僕が　自分の　身を　切り縮めて　ゐる樣だ。
そして、また、固い　枝を　はさむ時、
顎を　明けて　はさみ　の　手ごたへ　を　受け、
しツかりと　宙に　齒を　かみ合はせた。
亡き父　が　さういふ　時に　いつも　さう　した　のを思ひ出し、
僕は　ぞツと　した。

死人が　僕の身に　乘りうつつて、

僕の身を　刈り込んで　ゐたの　では　なからうか？

ハンモク

熱くて　溜らない　日が
嚙んだ　氷の　樣に　身に　しみ込む　頃だ、
眞夏の　空に、
蟬の　聲が　じいじい
僕の　あたまを　煑えくり返す。

廊下の　柱と　柱とに　ゆはへて
低く　釣した　ハンモク　の　中で、
僕は　たわいもない　からだを
たわいもなく　横たへた。
自分の　からだ　のか、何だか　分らない　おもみが、

左右に　揺れて、
ありも　しない　風を　待つて　ゐる。
と　思つたら、突然、自分は　百萬年　以前
高い木　の　枝に　眠る　猿で　あつたと　云ふ考へ　が　浮んだ。

きのふ　は　既に　前世界　だ——
ゆふべ、高い　ところ　から　落ちる　夢を　見たのは、
夢　では　なく、實際、おほ昔、
生繁つた　深森　の
枝から　枝へ　渡る　時に、
あやまつて
すべり落ちた　記憶で　あらう。

今　落ちない　のは　不思議だ　と、
仰向いて　空を　見た。

淺い　ひさし　と　それに　かぶさつてゐる
庭の　松の木　との　間から、
熱した　おほ空　の　廣がりが　迫つて　來て、
僕の　呼吸が　苦しく　なつた。

前世界　から　生活に　疲れて　來た　身體が、
ハンモク　の　中で、搖られて　ゐる　樣だ、——
自分　の　身が　おもた過ぎて、
何にも　する　勇氣が　ない。

このまま　死ねる　なら　死んでも　いいが、
さりとて、また、未練の　ある　この　人生。
いつまでも　眠つて　ゐられる　ものなら、
死んでしまう　のとは　違つて　安心　だらうが、
さうさう、永遠　まで

賴みの 綱は 朽ちないで ゐなからう。
と、どこからか 羽根が 生へた 様に、
僕の 考へは 百萬年 以前 から
百萬年 以後に 飛んだ。

くだらない 空想だ と 思つたが、
何だか、醒めて ゐて、おそはれる 氣持ちだ。
夏の 蒸し熱い 呼吸は、
乃ち、僕の 呼吸で あつた。

ああ、金が 欲しい！
僕を 解して 呉れる 女が 戀しい！
大事業を 爲たい！
いい 句を 得たい！
さまざまの 考へが 一時に 浮んで 來て、

蟬の聲　に　不安の　和聲(くわせい)　を　添へた。

ハンモク　は　實に　不安な　住ひだ、
ぶらぶら　動(うご)く　たんびに、
僕の　胸は　息詰(いきづ)まる　思ひ！

僕その物

いろんな　思想が、
書齋の　空中　から、
鉛の　彈丸(たま)を　降らしたのだ。

それが　熱い　間は、
おほ粒の　露の　樣に　融(と)けて、
僕の　からだに　氣持ちよく　しみ込んだが、

冷めて 來たら、
あたま から 先づ 重くなり、
精神の 働きが 殆ど 全く 蔽塞する。

筆を 持つ 手が 働かなく なり、
からだが 意久地なく 小い 火鉢を いだく。
動きたくも ない、
横に なりたくも ない。
そして、障子を 以つて 圍まれた この 書齋、
『趣味』 やら 『早稻田文學』 やらが 散らばつてゐる 上を、
目の くもりと 共に、
薄ぐらい ゆふぐれが 押し寄せて 來る。

目の 前の 電燈を ひねると、
僕は 十六燭の 光に 堪へ切れない、

息詰る　樣な　氣が　して——
よく〳〵　疲勞したのだ——
ふらりと　僕は　家を　出る。

うすら寒い　道路を　電車に　乘つて、
運び切れない　重荷を　運ばせると、
自分で　自分の　ゐどころが　分らない。
外套に　くるまつたのは、
鉛の　冷たみ、
重い　足の　下から　がら〳〵と
車の　きしめきが　傳はつて　來て、
抵抗力の　拔けた　全身を　しびれさせる。

僕は　留守で　あつたのか？
それとも　また　夢を　見てゐたのか？

いつのまにか　日比谷を　過ぎて
堀ばたを　通つて　ゐる。

お堀の　水が　明るいので　(五時　過ぎだ)
ふと　氣が　つくと、
向ふの　石垣の　上の　松の　枝を　よけて、
水色の　空に
かかつて　ゐるのは　三日月——誰れの　姿で　あらう！

寒いのに　顫へて
あくびを　したと　いふ　またたき、
傾むいて　ちら〳〵する　光は、
(鉛の　それだが)
僕の　經て來た　疲勞の　生涯を
そのままに　活かして　ゐる。

みづ〳〵した　空を、——
衰弱の　したたり——倦怠の　光線——
夢中の　輝き——うつつの　力——
思想の　彈雨は　これで　あつたらう！
書齋の　空は　ここで　あつたらう！

寒さうな　堀中の　水面にも
あつたかい　血は　通つて　ゐるのか、
常若の　まなこが　開らけて、
僕の　ゐどころを　映した　かと　思へば、」
太い　電信柱に　遮ぎられて、
その　まぼろしは　消えた——
電車は　がう〳〵と　進行して　ゐる。」

然し　進行しないのは　僕だ、
水面の　まぼろしを　追ひたい、
三日月の　光を　見て　ゐたい、
そして　書齋と　思想とを　あけては　ゐない、
否、僕　その物は　いつも　僕　その物だ。

寒月

宮城の　黑い　森の　上に
圓い　月が　出てゐる、幽靈の　樣だ。

熱もない　錫の　かがやき――
燒き盡す　力の　ない
地獄の　火に　まとはれて、
僕の　靈が　浮び出たので　あらうか？

青い　影！　つめたい　あちはれ！
死の　光！　無感覺の　しるし！
僕には　殆ど　關係が　ない。

然し　電車が　進行しても、
月は　いつまでも　電車の　窓を　去らない。

見つめて　ゐると、
その　疲れと　冷たさが　段々
僕の　身に　しみ込んで來て、
車臺の　隅に　小く　なつてゐる　僕の　からだが、
あたまから　つま先きまで、
外套の　短かさを　感じて　ゐた。

二のしやりかうべ

『お母さん！　お母さん！』
と云つて、死んだ　ものを　呼ぶのだ。
僕は　ぎよツとして　あたまを　もたげた。

病人を　見ると、仰向いた　まま、
久し振りの　優しい　微笑を　浮べて、
目は　つぶつて　ゐる。

しんとして、
　鼠一匹　騒がない　夜中、
臺ランプ　の　光に
時計の　ちくたく　ばかりが　明らかだ。

その　こまかい　確かな　刻み、
それが　僕の　脈博(みやくはく)に　傳はつて、
刻一刻、
快樂の　夢は　羽ばたきを　して　過ぎ行き、
心細い　執着の　緒綱(をづな)が　身を　引き締める。

死にたくは　ない、
離れたくは　ない、
然し　この　執着！　この　苦痛！

きのふは　罪だ、良心が　責める、
然し　その　良心も　亦　罪で　あらう——
男性には　まだしも　堪へられようが、
この　無邪氣(むじやき)な　子を　どうしよう！

どうせ　死ぬ　ものなら、
悔いなく　恨みなく　苦みなく　殺したい。

しんとして、
外には　何物が　窺つて　ゐるか　分らない。
『お母さん！』と、また　輪廓の　ぼやけた　一聲、
痩せた　顔に　微笑が　なほ更ら　いぢらしい。

夢を　見てゐる　らしいので、
こころみに、
その　あつたかい　胸　から
僕の　腕を　やはらかに　はづすと、
逃げる　ものを　追ふ　樣、
急に　空を　攫んだ。

『しイちやん！　しイちやん！』と、靜かに　呼んで　見たが、
覺めようとも　しない。
僕も　考へた、呼び起して　苦痛に　返す　よりも、
死ぬまで　かうして　ゐさせる　方が　まだしも　功德だ。

早く　出來た　子なら、
僕には　總領娘　ぐらゐに　當る　若さだ、
無病　息災で　あつた　きのふは、
だだを　揑た　ことも　ある、
泣いて　無理を　云つた　ことも　思ひ出される。

そして　今や、
ただ　その　衰弱と　狂妄との　喰ひ物に
僕を　引きつけて　置くの　かも　知れない。

過ぎ去つた　快樂は
現在の　僕を　滿足させるに　足りない——
執着は　もはや　愛で　なく、
僕も　亦　自分の　苦痛の　餌ばを　求めて　ゐたの　かも　知れない。

ランプの　光に　獸性の　自覺め、
（それも　やがて　肉　その物の　腐爛に　包まれて　行くの　だらう。）

僕の　手足に　女の　存在を　知らせるのは、
既に　僕の　病毒を　多く　運ぶ
その　惡血の　あつたかみ　ばかりだ。

兄弟を　棄てた　女、
妻子を　離れた　男、

（ふたりの　間は　もとの　他人だ。）
明き屋　同前の　二階、
燃える　ままの　光、
（すすけた　肉は　腐つて　行く。）

快樂の　ほとぼりが　なくなるに　從つて、どうせ　死んでしまう　僕等、
苦痛の　中の　快樂も　（なくなれば）　一層　強い　死だ。

ただ　それまでの　連續——刹那の　衰頽——

時計の　音の　刻　一刻は、
二つの　しやりかうべを　並べて　刻むのだ。

抱き合つた　寝床の　うち、
互ひの　口は

天井に　向つて　白い　息を　吐き出して　ゐる！

演　説

演壇に　立つて　コツプに　水を　つぐ、
その　水の　中を　凝視すると、
男女聽衆の　かほがほが　一つに　映る、自分のも　映る。

恐怖と　意氣込みとは　その水の　あぢだ、
一くち　呑むと、
興奮した　神經が　ひやりとして　靜まる、
そして　ピストルが　今にも　響いて　來さうだ。
その　水の　中を　凝視すると、
男女聽衆の　かほがほが　一つに　映る、自分のも　映る。

聽衆に　向つて　演說　するのか、
それとも　また　コツプに　向つて　するのか、
いづれとも　判斷が　つかない。
（コツプには　大きな　耳が　ついてゐる　樣な　氣がする。）

聽く　ものには　聽えるのだ、
聽かない　ものには　聽えないのだ、
いつのまにか　オスカ　ワイルドの　話が
僕　その物を　說いて　ゐる。

場內は　ひツそり　して、
人々の　息の　にほひが　やはらかに
僕の　鼻さきを　夢の　樣に　なでるのだ。
ガラスに　映る　だけの　世は　賴母しい、
（が、然し、そこに　破裂も　あらう。）

毒か　藥か　分らない　コツプの　水を　凝視すると、
男女聽衆の　かほがほが　一つに　映る、自分のも　映る。

甲州の印象

一

もう・暮れて　行く　甲州の　山々、
富士の　いただきが　先づ　隱れる、
その　手前　の　一列が　隱れる、
その　また　手前の　列が　隱れる、
この　數列の　連山が　みんな　見えなく　なつて、　目前に
田と　つづく　眞ツ黑な　森も　ないほど、
灰色の　雨霧が　かかつて　しまつた。

鹽山は　家の　うしろで　無論　見える　筈が　ないが、
左りは　笹子峠の　山脈も　薄らいで、

宿の　裏庭に　近い　笹やぶ　ばかりが　黒い。
右の　後ろ手　からは、甲府の　方に　走る　山が　ぼうッと
あたまが　見えない　大牛の　脊の　樣に　横たはつて、
その脊の　骨ぐみ　だけは　薄く　しめッぽい　輪廓が　ついてゐる。

かう云ふ　山々の　間に　見えたのは　廣い野、靑田、
遠い　正面の　山ふところ　から　かけて、その麓　まで
昨年の　水害の　跡、赤禿げの　山腹、白びかりの　砂道、
今年　またの　溢水（夜あけと　ゆふ暮には　銀河と　見えた。）
朝日　ゆふ日の　それに　きらめき映る　流れ。

涼しい　夏の　風に　浪打つ　四方　一面の　稻穗草、
人の　若い時を　その　目ざましい　綠に　見せて、
おほ浪の　樣に　搖れるのは　僕等の　心、

戀の　不安は　この　廣い　青海に　浮んでゐる、
（但し、僕等の　不安に　底の　ないのは、
實を　結ぶ　地の　底が　見えない　のと　同じ樣だ。）

この　海の　岸近くに――しイちやんも　覺えて　ゐよう――牛小屋、
稻の　葉浪に　見え隱れて、その　柵内で、
水に　浸つて　喜ぶ　水牛か　何かの　樣に、
親牛　小牛が　澤山　遊んで　ゐて、
時々　もう〱　鳴くのは　丁度　僕等が、
戀の　水ぞこに　息詰つて　懸命に
救ひの　空氣を　呼ぶ　樣だ、（しイちやん、
僕等にも　かう云ふ　ことが　度々　あるでは　ないか？）

また　鐵道線路　に　桑畑――かう云ふ　現はれは　すべて
やみ夜と　瞑想と　の　眼に　消えて　行つて、

動く　ものは　ただ　僕の　心　ばかり。

二

取り殘された　旅は　つらい　ものだ
しイちやん　までが　ゐなく　なつたのは　丸で　闇。

その闇を　欄干に　もたれて　見入つて　ゐると、
末も　分らない　今も　分らない　一すじの　黒い道を、
黒い　影、喪服を　着て　通る　影、
無言（僕は　半ば　つんぼに　たつた、）沈默（僕は　物を　云ひたく　ない。）
悲痛、苦悶、死　などの　靈が　うつ向いた　まま
しくしく　泣いて　通つて　行く。

よくよく　寂しいと　いふ　ことを　覺えたの　だらう、

誰れも　相手に　する　ものが　ないのだ。
渠等も　その　前世では　世の　人々の　爲めに　絶叫し、
その　意見も　吐露し、その　議論も　戰はした　のだが、
相手が　分らないので　根氣負け　をして　喪服を　着けた。

それが　また　一人　減り、二人　減り、三人、四人　減り、
黒い　道の　黒い影は、草葉の　露が　朝日に　當つた樣、
みんな　無くなつた。では、もとの　見えない　光か？　さうではない。

死と　云ふ　ものが　渠等を　すべて　呑み下だし、
いち度　産れた　兒等を　また　呑んでしまう
鬼子母神　の　腹の　樣に、秘んで　ゐた　死の　影が
段々　大きく　脹れて　來て、僕の　闇に　合した。
その　闇が　また　僕　自身と　合したので、

眞ツ暗な　死は　戀、しイちやんの　亡くなる　時だと　思はれた。
(ことわつて　置くが、しイちやん、君の　生きて　ゐる間は　僕も　死なない。)

三

さういふ　寂しい　闇——霧が　深い——の　中から、
しめツぽい　あかりが　一つ　またたいて　ゐる。
牛小屋に　遠くない　ところだ。

その　あかりの　またたき　には、しイちやんが　きのふ
汽車で　ステーションを　立つた　時の　伏し目が　思ひ出される、
(しイちやんは　僕に　別れる時　目が　潤んで　ゐた　のだ。)
別れは　つらい、戀も　つらい、その　つらさを　知つて　ゐるの　だらう。

あかりは　今　しよぼ〱　泣いて　ゐる。——
女だ、男子は　決して　涙を　見せない。

その　あかりが——居据つて　ゐるのだが——動く　樣で、
ちら〱して　ゐる　間に　少し　大きく　なつた　氣がする、
闇の　中に　たツた　一つの　慰めだ。

恰も　消えない　露——日輪の　光を　晝間から　一身に吸ひ込み、
目くらの　夜を　澤市の　妻　となる　氣だらう。
（僕が　若し　全く　つんぼに　なつたら、しイちやんが　僕の　耳だ。）

その　露　ばかりの　光を　慰めの　夜に、
小牛の　聲が　無言を　破つて　聽える、
何だか　求める　物が　あるかの　樣な　うなり聲　だ。

一度、二度、三度、四度、五度、
小牛が　鳴くに　つれて　それが　しめつた　ランプ　の
聲に　なつて、やツぱし　同じ　濕ツぽさだ。

ランプと　聲、慰めと　求めが　一つに　なつた　のだ、
戀と　不安が　合體したのだ、
しイちやんと　僕が　同じ　おもひに　浸された　のだ。

四

去年の　水害に、鐵橋の　破壞、
田地、道路、家屋、人畜の　流出、
山麓の　すべり出し、大岩石の　移轉、
川流　沼澤の　滅却、奇變――
やま津浪の　猛烈な　勢ひに、

或　郵便局長は　その　妻子の
氏名を　手足に　縫ひつける　ひま　さへ　なかつた。

すべて　こんな　物語りを　聽いた　日だ、
今まで　晴れてゐた　空が　午後　から　曇つて、
富士の　方面　から　段々の　大風雨、
雨は　ちぎつて　投げる　樣――おほ神鳴りも　聽える。
急しい　雨あしは　四方の　山々を　閉ざす、
宿の　女中共は　まだ　時でもないのに　雨戸を　締める、
晝間を　殆ど　眞ツ暗な　闇、
之を　時々　破るのは　おほ稻妻　の　屈折――
ぴかり！　ぴかり！
また、ぴかり！　ぴかり！
その　明滅の　間に　しか
萬物と　僕等と　の　いのちは　なかつたの　だらう。

然し、戀の　つづく　如く　この　あらしも　つづいて、
ほんとの　夜に　なつた　時は　まこと　僕等の　世界だ、
あらしは　ふたりの　枕もとに　響いて、
物凄い　奈落の眠り（これが　戀の　心だ）を　實現した。

宇宙　萬物を　無にした　妖女は　しイちやんだ、
影も　形も　ない　肉の　あたたかみ、
之を　抱擁する　心には　底が　ない。

五

汽車は　もう　幾たびも　往復した、
再び　會ふ　までは　僕は　その　回數を　かぞへて　ゐる　だらう。

往きにも　田の　間で　白い　煙りを　吐き、
復りにも　亦　同じ　ところで　ぴイと　鳴る、
その笛と　白けむとで　いつも　しイちやんを　思ひ出す。

しイちやん、君が　出發して　から　急に　稻の　穗が　出だした　樣だ、
氣が　つかなかつた　のだらう。——然し　汽車の　笛と道とは變らないが、
田を　渡る　すゞ風は　四五日來　大分
ひイやりして來て、ゆふべから　降りつゞいた　秋さめに、
僕は　もう　蚊屋を　奪はれ、室には　障子が　塡つた。

きのふ　まで　ふたりで　親しんで　ゐた　室が
丸で　初對面の　樣で、柱の　姿見に　映る　僕の　顏も
何だか　他人の　樣に　痩せてゐる。——しイちやん　の留守を、
戀の　寂しみと　一緒に　秋の　景色が　舞ひ込んで　來たのだ。

ゆふべも　さうで　あつたが、今夜は　更らに　寂しい、
あすは　尙更ら　だらうと　思つて　床に　就くと、
掛つてゐる　ランプが　田の中の　一つ火の　樣で、
僕の　心の　おほ闇に　小い　あかりを　得た　だけ
却つて　求める　ところが　多い。――小牛の　叫びは　腹わたの
　中から聽える。

いつ又　しイちやんに　會はれよう？
もう、二三日、――
千萬年も　隔つて　ゐる　樣だ。
これが　戀の　時間と　里程　だか　知らん？

六

しイちやんは　ゐる　間に　發熱して　三十九度　二分の　熱、

それを　介抱して　ゐる　時は　心配で　あつたが、
然し　また　忙しくツて、寂しさを　おぼえなかつた。

僕は　獨りに　なつて　から、
直ぐ　下痢を　して――氣候の　變り目だ――
けさ　膳に　のぼつた　物が　全く　喰へないので、
今更らの　如く　秋の　寂しさを　覺え出した。

きのふは　蚊帳を　奪はれ、
けふは　障子が　塡つた　室、
左右を　返り見ても　ほかに　息する　ものは　ない。

火を　吹き消した　闇の　寢床を　拔け出て、
僕の　たましひは　軒下の　小流れに　浮び、
ちよろ〳〵　いふ　音と　共に、（僕は　まだ　一方の　耳が　聽える、）

田の　眞ン中へ——曾て　しイちやんと　散步した　あたり　まで——
行つて　見たの　だらう、ぼんやり　歸つて來て、
無言で　僕の　胸に　這入る　黑い　影が　見えた。

何物　だらう？　僕は　かう　質問した、（自分の　たましひを
忘れて　ゐたのだ。）然し　その姿を　闇に　見失つたら、
急に　僕の　體内に　水音　の　樣な　悲しみが　涌いて來て、
胸の　裏がはに　苦痛を　產みつける　ものが　ある、
（しイちやんに　むしり取つて　貰ひたい。）

然し　その物が　黑い　影だ、たましひだ、
生命だ、戀だ、しイちやんの　置き土產だ、
それが　また　僕の　詩歌だ——しイちやん、
君が　ゐないと　歌は　いくらでも　出來ようが、
さて、僕は　いつまでも　君と　離れて　ゐたく　ない。

七

驅けれ、驅けれ、汽車、
僕の　むくろを　乘せて　驅けれ、
僕の　戀と　たましひ　とを　乘せて
しイちやんの　ところへだ、——しイちやん　にだ！

僕は　今　理想家だ、
しやりかうべ　の　樣に　碎けて、その　手足　の　樣に、
からだと　心とは　別々に　關節が　はづれてゐる。
しイちやんの　ゐない　甲州の　山野は、ああ、厭だ、
昔の　骨塚ツ原か　鳥邊野　だらう、
速かに　去れ、速かに　退け、この　荒涼たる　死國！

南に　そびえて　無言、沈默、
灰色の　空に　黒い　輪廓を　畫がく　のは　何だ？
富士――これ　やがて　僕等の　努力と　熱心　とを
無と　無自覺と　に　葬つてしまう　墓じるし、
萬人を　臨兒　壓迫する　高津城、
殘酷な　奥津城だ！

その他　大小の　山脈や連山も
狭苦しい　晝間の　光に　限られて、
小い　宇宙の　棺に　死んでゐる、
活氣が　ない、奮發が　ない、無心無熱だ、
（僕は、しイちやん、日　よりも　やみ夜が　生命だ。）

窓外に　開らけて　ゐる　青田、桑田、
その間を　くぐつて行く　どぶの　様な　小川、

昨夜の　雨に　力を　得て
はち切れ　さうな　粒(つぶ)を　誇る　葡萄畑、
しイちやんに　よく　親(した)しんだ　町の　子供、
しイちやんの　廂髪を　笑つた　村の　百姓、
それらも　何だ？　すべて　死の　喰ひ物だ、
すべて　死の　硫黃じみた　にほひが　して　來る。

驅けれ、汽車、速かに　しイちやんに、
僕は　臨時の　理想家と　なつて（僕の　心身(しんく)の
關節は　しやりかうべの　手足の　樣に　はづれてゐる。）
速かに　この　死國の　山野(さんや)を　のがれたい　のだ。

がツたん、がツたん、がツたん！
また　がツたん、がツたん、がツたん！
その音が　急に　僕の　今　ぼんやりした　胸の　やうに　眞ッ暗になつて、

鳴り頻る　神鳴りの　樣な　響きが　して來て、
（僕が　いい方の　耳を　押さへれば、遠雷の　音に　聽えた、）
あせつて　夢中の　僕には、餘り　不思議だ、
汽車は　跡戻りを　してゐる——
僕が　しイちやんを　追つて　逃げる　のに　氣が付いて、殘酷な　死が
僕を　途中に　引きとめたの　では　ないか　と思ふ　とたん、
ぴイと　汽笛が　鳴つて——トンネル　を　一つ　出たのだ——
また　別な　トンネルに　這入つて　行く。

こツそり　忍んで　しイちやんの　ふところまで　行くのだ　と　思へば、
追ツかけて　來る　ものが　ある　樣で、
甲州の　山野は　勿論、
中央線の　トンネルだらけも　何だか　物凄い。

一緒に　來た　時は　夜で　氣が　付かなかつたが、

有名な　笹子トンネル　に　死の　壓迫を　七八分――
それを　出てから、例の　流れ出た　おほ岩　その　高さ
拾間　ほどのが、川でもない　おほ川跡　の　眞ン中に、
或　神社の　流れ出た　のと　もろとも、
ころがつて　ゐるのが　見える――やツぱし、死の　遺物！
八王子へ　來てから　生き返つた　樣な　氣がする――
死の　おそれは　なくなつて、僕の　からだの　節々に
いのちの　氣が　循環して　來て、
理想家に　段々　生きた　肉の　にほひ　と　あツたかみが　してゐる。
戀よ、しイちやんに　近づいた　のだ！

驅けれ、汽車、速かに、
僕の　むくろと　たましひ　とを　乘せて　驅けれ、
冷たい　死と　孤獨と　を　離れて、
あツたかい　死と　孤獨　との　東京に、

町と　人家、人と　友人に　滿ちた　寂しみに、
苦悶　苦鬪の　生涯に、
肉と　いのちの　かをりある　死に、
肉靈合致（がふち）の　孤獨に、
ああ、しイちやんの　ふところに！

樺太の雜感

一　汽　車

闇夜(きりや)を　横切つて
東北の　廣野(ひろの)に　出た　汽車、
いつのまにか　僕は
青い　夜あけの　けしきに　目ざめて　ゐる。

光も　青い、野も　青い、
窓の　がらすに　垂れろ　夜露の　名殘りも　青い。
自分の　吐(つ)く　息も　青い　様だ。
すると、僕には　大きな　靑大將が
大地を　のたくつて　行く　あり樣が　浮ぶ。

がツたん、がツたんの　音が　慣れツこに　なつて、
疲れた　神經を　ます〳〵　鈍らしたの　だらう、
餘り　耳ざはり　には　ならず、
却つて　それが、土地と　氣候の　變化に　添ふ
僕なる　物の　脈搏――身うちの　脈搏――の
冷ツこい　のたくり　としか　おぼえられない。

僕は　その　ぬたくりで　進んで　來た、
闇夜と　追想と　多くの　山河とを　通り過ぎて　來た。
そして、その　疲勞が　さうした　色と　感じ　とに　出たの　だらう。
トンネルを　這入つて　また　トンネルを　拔ける　とたん、
ふと　室内　を見れば、
昨夜來　話し合つて　來た　婦人客が、
これも　亦　青い　顏を　して、眠つて　ゐる。

『もし〳〵、あなたの　降りる　場所が　來ましたよ』と、
呼び起して　やる　さへ　不快な　程の　顏つき　だが、
さて、その女が　身づくろひして　降りると　なると、
僕の　脈搏が　それだけ　減ずる　樣な　氣が　した。

二　乘り込み

海上に　合唱の　聲が　聽える、
僕の　艀は　それを　目がけて　進むのだ。
夜の　海上は　うす氣味が　惡い、
自分は　どこへ　つれて　行かれるのか、
聲　ばかりを　追ふて
海妖の　國に　至る　樣だ。

碇船の　帆船や、
大小の　汽船や　の　間を　縫つて、
艪の　音が　ぎう／＼と　進んで　行く。
どこまで　それが　行くのか？
ただ　合唱の　聲が
赤い　舷燈の　あがる　ところ　から　聽えるのが　分つて　來た。

『高砂丸、お客さんだよ。』――『おう。』
そして、浪の　光を　たよりに　僕は　無言で
巖丈な　タラプを　のぼつて　行き、
薄暗い　客室に　下だると、
急に　むツとする　臭ひだ。

そして、例の　合唱は

自分の　胸から　響く　のに　思はれる。
初めは　ただ　わア〱　云つてゐる　ので　あつたが、
よく　聽くと、
段々　秩序が　ついて　來る。
コラサア　とも　聽えるし、
ヤレコラサア　とも　云つてる　樣だし、
また　ドツコイシヨ　とも　響く。

コラサアは　一二名の　聲だが、
ドツコイシヨは　多くの　ものが　出すらしい。
順序づけると、
コラサアと　低く　出て、
ヤレコラサアノ　で　あがり、
ドツコイシヨと　非常な　力が　這入る。

それを　繰り返して、
船底から　荷物を　出して　ゐるのだ。
コラサアで　引きずつて　來て、
ヤレコラサアノ、ドツコイシヨで　荷口へ　あげる。
重い物は　急激に、
長い物には　ゆツくりした　合唱だ。

ヤ、レ、コ、ラ、サアーノー、ドツ、コイ、シヨーノ　と云ふ　ゆツたり
　した　聲で
細長い　材木が　出るのを　見て　ゐた　時、ふと　氣が　附いたの　だが、
荷口に　また　一人　ゐて、
出た荷を　悠長に　數へながら、
ヒトー、フター、ミイ、ヨー　と、そとの　艀に　渡してゐる。
そして、再び、コラサが　重さうに　出ると、
ヤレコラサアノ、ドツコイシヨ　といふ　強力な　響に

ヒトー、フター、ミイ　といふ　悠長な　聲が　却つて　反對の　大調和を
　保つのだ。

それが、聽き　且　見てゐる　僕の　心に、
そのまま　しみ込んで、離れ難く　なつて　來た頃、
合唱隊は　別々に　分れて、
亡者の　如く　ゐなく　なつて　しまつた。

急に　寂しく　なつた　船室には、
僕　一人——乘り合ひ客は　まだ　來ない。
小い　窓　から　のぞくと。
小樽の　街の　あかりが　心細く　見える　ばかりで、
樺太　までの　航海　が
僕には　おぼつかない　樣な　氣に　なつた。

そして、胸には、なほ、
ヤレコラサアの　合唱が　賑やかに　響いてゐる。

三　鑵詰製造所

廣い　板圍ひの　家だが、
ぴか〱　光る　丸鑵の　つみ重ねを　除いては、
ほかに　何にも　ないと　云へよう。

がらん洞の　家に　がらん洞の　丸鑵が　澤山　積んで　あつて、
それに　蓋づける　ものも　ゐれば、
指を　脹らして　ニスを　塗つてゐる　ものも　ゐる。
その　そばの　大きな　ゆで釜には、
百四五十度の　熱湯が　煮え滾つて　ゐて、
職人頭は　そこから　重い　鑵を　一つ宛

取り出しては、おれの　手加減を　見ろと　云はない　ばかり、
うまく　ガス拔きを　やる。

由さんが、鼻唄を　歌ひながら、さきに　立つて、
五尺　六尺に　餘る　蟹を　澤山　運び込んで　來ると、
『さア、事だ』と　云ふ　勢ひで、皆の　ものが
急がしい　手を　一層　急がしく　使ひ出す。

そして、由さんは、他の　人々が　ふと　ニス塗りの　手を　休めて、
煙草でも　吹かして　ゐるのを　見ると、直ぐ
眞ツ赤に　なつて　自分の　女房に　當り、
『この　婆々アめ、何を　うツかりして　やアがる』と　ど鳴りつける。
女房は　それと　知らない　から　反抗する、つかみ合ひに　なる。
その　結果は、お互ひの　ののしり合ひが　やかましくなるが、
それだけ　却つて　仕事の　手は　進んで　行く。

罐の 蓋を つける もの、ニスを 塗る もの、
蟹の 皮を 剝くもの、身を 洗ふ もの、
罐を 煮る もの、あげる もの、――
急がしい 時は 二日でも、三日でも、
徹夜を して 碌々 眠る ひまも ない。

風呂の 立たない 海岸の 村で ある から、皆
鰊釜に 湯を 沸かして 這入るの だが、
一週に 一回ぐらゐ では、からだの 蟹くさいのが 落ちる 時が ない。
皆が皆、湯を 沸かさないで、しらみを 湧かして ゐる。

然し、それが
人の 支配の 報酬を もたらすの だから 面白い。
或夜 一度、僕は 自分の 製造所に とまつて 見たが、

氣味の　惡いと　思ふ　しらみが
夢に　僕の　頸すぢへ　のぼつて　來たので、
それを　ふり拂ふと、
小指　ほども　あつたかと　惜まれた。

四　矛漁

ゆたかに　流れる　ニストル川、
その　中流に　浮ぶ　丸木舟　の
眞ン中に　一人の　老人――目が　窪んで、
濃い　眉は　迫り、
頰髯、口髯　の　長いの――が　立つて、
椴松の　皓々たる　かがり火を　高く　かかげて　ゐると、
舳艫に　おの〳〵　一名の　アイノが、
鉤つき矛を　さかしまに　かまへて、

一心不亂、
水中を　見つめて　ゐる。

やみ夜だが、
澄み切つた　水の　中には、
周圍の　森林と　共に、
火に　映じた　紅魚が　三つ、四つ、
反れ矢の　如く　ひらめいて　ゐるのを、
舳さきの　アイノが　刺し損ふと、
艫べの　アイノが　つき刺す。
ともべの　アイノが　つき損じると、
へさきの　アイノが　ぐざと　貫く。

その　早わざが　紅魚の　ひらめき　よりも　勝つて　來たのを　見て、
髯の　老人は　うちほほゑみ、

先づ『それで　よし』と　聲を　かけた。
ずると、二名の　アイノは　ほツと　一と息　して、
おそる〳〵　額の　汗を　ふいた。
二名とも　まだ　無言だ。

老人の　默令に　從ひ、
舟を　草深い　岸に　つけると、
渠は　ひらり　飛び下りて、
まだ　櫂を　握つてゐる　二名に　向つて　云ふ樣、
『われは　トンチ　最後の　末、
今、なんぢ等に　名殘り　として
矛漁の　秘術を　投けた』と。

身を　轉じて、渠は
その脊　よりも　高い　蕗の葉、

ヤチ芭蕉の　葉かげに　消え失せて　しまつた。
そして　この　紅魚捕獲の　秘術が　アイノ人の　間に　傳はつた　ので
ある。

五　めの子

ああ、アイノ娘、ちひさい　めの子よ。
かの　敗殘人種、劣等種族　の　間(あひだ)からも、
なんぢ　の　様な　美人が　生れたのか？
おほ蕗、ヤチ芭蕉、とくさ、高よもぎ　の　間から　サク　の　花の　一と
莖が　つき出(で)た　如く、
七月あやめ　が　高原　一面に　しめり氣ある　根を　はびこらして、
紫の　花の　咲き亂れた　その間　から　黄色(きいろ)野百合　が　一もと　顔を
あげた　如く、

なんぢは　アイノ人の　間　から　生れたのか？

父は　幸ひにして　肺結核に　犯されて　ゐなかつた　の　だらう。
母は　不幸中　の　幸福にも　優等人種　の　梅毒を　受けて　ゐなかつた
の　だらう。

そして、なんぢは、幸中の　不幸にして、
狼の　如き　人種の　犠牲に　なるのが　運命　だらう。
不思議な　めの子よ、なんぢは
口端に　入れ墨も　なく、髮も　結んで　ゐるから、
鉢卷の　ヘトマエを　しないのを　誇りと　するだらうが、
それが　却つて　なんぢの　不幸を　來たす　もとゐ　とは　知つてゐま
い？

腰に　つるした　マキリの　から鞘に
やがて　なんぢは　身を　入れようと　するでらう、

その　戀の　理想は　シヤモ、日本人——
一に　番屋の　親かた、二に　その　帳場、
三に　船頭、四は　人さきに　立つ　若いもの。
よしんば、それが　一時　叶つた　とて、
永續する　ものとは　思へまい？

下つて、兵士や　漁師に　移れば、
もう、それが　廢滅の　前兆だ。
『シヤモ　行く』時、
なんぢの　氣は　既に
おそるべき　病毒を　吸つて　しまつたのだ。
そして、その毒は
なんぢの　しなやか　なからだを　腐融をせ、
なんぢの　皮膚を侵害し、
なんぢの　骨ぐみを　うち崩し、

なんぢの　子を　結核、奇形、盲目にし、
なんぢの　子孫の　破滅を　速める　ので　ある。

ああ、劣等人種の　めの子よ、
ああ、なんぢ、アイノ人　の　小娘！
なんぢは　いつまでも　熊の　如く
人情を　解しないなら　幸福　だろうに！
手に　持つ　花、黄　並に　紫を　問はれて、
『ゆりに、あやめ――
佛さまに　あげる　ので　あります』と　答ふ。

ゆりに　梅毒、あやめに　結核、
ああ、母殘劣等　の　家庭にも、
一時の　樂みは　宿るの　だらうか？

六　焼損林

山火事の　あつた　古い　跡だ、
さいはひにして、
風が　上向きに　吹いたの　だらう、
椴松や　蝦夷松　の　上半は　焼け失せて、
下半は　幹　ばかりが　すべて
白い　しやりかうべの　様に　つツ立つて　ゐる。

その骨、その幹も　亦
長年の　風雨に　さらされ、
手が　觸れば　直ぐ　崩れる　程に　なつて　ゐるから、
再び　火が　見舞ふと、
それらを　取り捲く　榛の木や　熊笹と　一緒に、

燃えるのは　わけも　ない。

樺太の　山火事は　人爲　ばかり　でなく、燐に　よつて
獨り手に　發する　ことが　ある。
それが　數千町歩、數萬町歩を　燒き拂ふ　には、
一冬を　越える　のは　勿論
二冬、三冬に　渡つた　歴史も　ある。
そして、その　勢ひが　した這ひに　なると、
地下　三尺も　四尺も　燒け込んで、
積雪の　壓迫を　事とも　せず、
翌年　までも　越年しつつ　燃えるのだ。

燐を　多量に　含む　木炭質、
木の葉や　枯れ枝の　堆積に　過ぎない　太古の　ままの　土、
而も、燒損林　中の　熊笹の　間だ——

石も ない、眞土も ない、
人の 通る 道も ない。
こんな 山なかの
ぼくぼくした 木炭土(ぼくたんづち)を 踏んで、
盛夏の 日光を 受けると 僕は、もう、
內地人の 知らない 火に 包まれてゐる 樣だ。

七 眞赤な太陽

單調子な 樺太(からふと)の 海岸に 獨り
立つて 考へて ゐると、
夕かたの 浪さへ 僕を 招いて 吳れない。
後ろの 草山(くさやま)には、無言で ガスが かよつてしまう。
目の前 には、靜かな 海が 廣がつて、
矢ツ張り、ガスの 中に 隱れて 行く。

そこに、光線を　剝ぎ取られた　太陽が
眞ッ赤な　色を　して、
淺い　ぺに茶碗を　浮べて　ゐる。

接吻！　といふ　ことが　思ひ出されたが、
僕は　愛する　婦人に　遠ざかつて　來て、
その　愛婦に　棄てられた　樣に　寂しく　なつた。

八　ブシの花

ブシの　花は　綺麗な　蝶の　如く
咲いた　色が　紫だが、
その根に　おそるべき　毒を　含む。
知らぬ　人は　折つて　花瓶に　挿すが、
知つたら、直ぐ　それを　棄てる。

僕に　一人の　愛が　ある。
毒婦の　性根を　あらはして、
僕の　留守に　僕を　去つたと　考へる。
然し、それが　爲めに、僕は　獨り
いよ〳〵　ます〳〵　身に　泌む　愛を　おぼへる。

九　何の爲めに僕

何の　爲ゆに、僕、
樺太へ　來たのか　分らない。
蟹の　鑵詰、何だ　それが？
酒と　女、これも　何だ？

東京を　去り、友達に　遠ざかり、

愛婦と　離れ、文學的　努力　を　忘れ、
握り得たのは　金でも　ない。
ただ　僕　自身の　力、
これが　思ふ　樣に　動いて　ゐない　夕べには、
單調子な　樺太の　海へ
僕の　身も　腹わたも　投げて　しまひたく　なる。

十　マオカのゆふべ

僕は　袷せに　袷せ羽織、
そして、出て來た　藝者は　單衣に　夏帶――
熱い　樣な、寒い　樣な、
分つてゐる　樣な、ゐない　樣な、
物足りない　歌と　三味と　酒と　洒落とに、
マオカ　の　ゆふべの　お座敷は　暮れて　しまつた。

札幌の印象

古い　京都の　それ　よりは　一層　正しく、
東西南北に　確實な　井桁（市の　動脈）を　打ち重ねた　北海の　首府――
石狩原野　の　大開墾地に　圍まれて、
六萬の　人口を　抱擁する　札幌の　市街――
住民は　凡て　必らずしも　活動して　ゐるでは　ないが、
多くは　自己　一代の　努力に　由つて　その家を　建てた　ものだ。

然し　渠等の　目に　映ずるのは、ただ
燒け殘つた　赤煉瓦　の　道廳、
開拓紀念に　最も　好箇な　農科大學、
いつも　高い　煙突の　煙を　以つて　北地を　睥睨　する　札幌ビール
　工場、製麻會社、

石造の　拓殖銀行、靑白く　日光の　反射する　區立病院、
大通り　散策地の　諸銅像、北海タイムス、中島の　遊園、
北一條の　停車場、南一、二條　の　繁榮、狸小路、遊廓、
（それらの　物には、すべて、內地から　入り込んだ　放浪者　の
珍らしむ　價値は　殆ど　なからうでは　ないか？）

放浪者は　寧ろ　その他に　注意する　ものが　ある、
積雪に　堪へる　樣に　造つた　平家の　棟つづき、
停車場通り　の　アカシヤ街、
枝葉は　幹に　添つて　箒の　如く　空天に　逆立つ　白楊樹（內地で　云
へば、いてふの　格。）
開拓者が　ところどころ　道に　切り殘した　アカダモ（ハル楡）の　大木、
道ばたに　植ゑ並べた　イタヤもみぢ　の　繁り。
これらが、――繁華な　町通りには　ある　わけで　ないが――影の　如く、
いつも　行く者の　心に　つき添つて　離れない　脈搏の　井桁、それを

縫つて、
田夫(でんぷ) または 田婦が、馬の脊に 乘せた 青物（茄子、胡瓜(きうり) 西瓜、
キャベツ、玉ねぎ、西洋かぼちや、栗、くゝみ、林檎、
唐もろこし、または、大根）を。呼び賣り して まはる のだ。
（放浪者 には、その 百姓馬子(まご) の 呼び賣りが 最も 意味深く
新開地 の 市街を 摘出する 樣に 思はれた。）

稟、百姓馬子は 速かに 變遷する 季節を
この 靜かな 蔭の多い、外國じみた 市街に 送り込む 神の 樣だ。
稟の 荷に 胡瓜、甜瓜(まくわ)、茄子 の 多い ときは まだ 初めだが、
短かい 夏よ やがて 栗、くるみ、ココアに 變じ、
おびただしい 唐もろこし や 林檎が 甚だ 少くなる と、直ぐ、
漬(つ)け大根 の 洗はれた のが 至るところ の 家根や 木々に かかる。
また 別に、放浪者の 目に 付いたのは、町の 角(かど)に こん爐を 持ち

出し、
簡單に 唐もろこしを 燒いて 賣る ものが 多かつた ことだ。
その 店の 一つを 僕は 非常に なつかしく おもつた――
と云ふ のは、僕の ふらり 外出する たんびに 目に 觸れる からで、
葉の 大きな イタヤもみぢ の 太い 根もとに、
晴天 なら 勿論、雨天 でも、根氣よく、店を 張つてゐるのだ。
暑いにも 拘らず、こん爐 の 火が かんかん おこつて ゐると、
その上に かけた もろこしの 實は ぷすぷす はじけつつ、
如何にも その いい にほひが して ゐる 限り、札幌は、
僕の 心に 親しみが あつて、
きのふも、けふも、
放浪者の 酒と 女と（生の 價値も そこに 見えると 思はれた）の
あぢを 途切らせなかつた。
或夜、（銅像も 見えない、白楊樹の 影も 見えない、
銀行、道廳、ビール會社、停車場 なども 見えない ほど、

雨あがりの　ガス深い、しめッぽい　夜で　あつた、）僕は　獨り、
ほろ醉ひ機嫌で、今　別れた　女の　追ひ分け節を　繰り返しつつ
やつて　來ると、向ふに、一つ　カンテラ　の　光りらしいのが　見える。
それが　例の　店で、（然し　いつも　とは　違つて、）
おやぢは　寒さうに　爐火に　しがみついて　ゐるから、
『おそくまで　よく　かせぐ、ね』と　初めて　聲を　かけて　やると、
『へい』と　渠は　可嚀に　あたまを　下げた　が、さも　馴れ馴れし
　さうに、
『いつも　上機嫌で、旦那は　御結構です。』
然し　その　おやぢと　言葉を　かはしたのは、あとにも　さきにも
　それッ切りで、
僕が　孤獨の　放浪に　耽醉して　ゐる　うちに　天長節が　來た。
いつのまにか　渠の　店は　出なく　なつて　ゐるし、

市中を　歩きまはつても、青物を　積んだ　馬にも　出會(であ)はなく　なつた。

そして、變色に　おそい　イタヤもみぢ　も　紅葉し、
大根は　既に　女郎屋の、ガラス戸で　圍んだ　長廊下に
多く　並んだ　おほ樽に　漬(つ)けられたの　を　見た時、
市街にも、遠い　山山と　同樣、白い物が　積(つも)り出した。
そして、また　僕は、親しみの　深くなつた　札幌から、
舅(しうと)の　好かない　婿養子の　如く　追ひ出されて　しまつた——
樺太(からふと)の　事業　との　聯絡(れんらく)も　全く　絶えて——
金も　無く、寒さを　よける　外套も　無く、——
東京　から　偶々(たまたま)　追(お)ツかけて　來た　腐れ女　と　一緒に！

無言の妖女

夢　の　あや絹、裾の　さばき、
枕もとなる　人の　けはひ、
優に　あたかき　かをり——誰ぞや、
かろく　わが身　の　胸に　やさ手。

聲も　顫えて、『君よ、曉の
鐘は　鳴りぬ』と　青き　ゑがほ。
ゆるむ　節々　答へ　得せず、
おもき　かしら　に　またも　ねむり、
あはれ、もも度、ももの　戀の

甘き　口づけ　得なば、ここに、
死をも　招きて　死にも　受けん。

春の　あかつき、床の　ぬくみ、
拔けて　うれひ　に　醒めん　よりも、
とはに　いだかん　無言妖女。

土のにほひ

君と　二たび、三たび、四たび、
むだの　口つけ、むだの　握手。
無言すがた　ば　にほひ紅　の
燃ゆる　火に　こそ　溶けや　しけめ、
黑き　うらみ　よ　二つ胸　に
リデル　ゴノサン　物を　云ひぬ。

君し　今　なほ　慣れぬ　出で湯、
同じ　やまひ　の　脈を　ぬくめ、
あつき　湯けむ　の　かげに　立ちて、
丈の　黒がみ　思ひ　長く
すずし　櫛巻き　巻きつ　あらん。

戀や、くちばみ、朽ちて　夢に
土の　にほひ　と　そほぢ　行けど、
君と　われ　とは　またも　會はじ。

冬の夜

高臺　沈む
やみ夜　の　おほ空　に、
戀のしやりかうべ

いや遠長く
　電車　の　ひびき　消ゆ、

今　袖　分けし
　世と　しも　おもほえず、
とこ世　の　無言
　身に　こそ　泌み渡れ。

まなこ　の　醉ひ　は
　人を　し　浮ぶれど、
冬の夜　ふけて、
　わが身　は　やみの底。

踏む　霜ばしら
　さくさく　胸　刻み、

冴え行く　戀　や
ほのほ　の　道　ひとつ。

家根の小露

濕りの　山　の
みどり　を　すくひ取り、
飛びかふ　つばめ
それを　か　ふり撒ける。

葺き萱　きらり、
家根　には　むら螢――
晝　なり、雨　の
過ぎにし　置き土産。

戀のしやりかうべ

あたかも、倉　の
　小暗き　板じき　に、
散らけて　まろぶ
　珍らの　古寶玉。

白き　は　青く、
　青き　は　また　赤　に、
黒める　家根　を
　しぼりて　照り出づる。

その色　強し、
　電氣　の　かよひ路　や、
まばらに　光る
　小露　は　燃えん　とす。

ああ、その　小露、
燃え來て　また　消ゆる。
短き　魂の
きほひ　や、この　晴れ間。

君こわれ

若き　血　あらば　戀　を　戀ひよ、
そこに　不老　も　不死　も　あらん。
花　の　乙女　は　老ゆる　早く、
春　は　白手　を　取れる　ひま　ぞ。
相も　いだけば、夢　は　湧きて、
熱き　いのち　を　かをる　樹かげ。

君と　われ　とは　うつら、うつら、
とはの　ねむり　に　溶くる　如し。

春　の　ゆふべ　の　いとも　甘く、
君　と　われ　とは　溶くる　如し。

最近の作

カンナの赤い一輪

赤い　口びるの　接吻には、
百年も　千年も　問題では　なかつた。
人生も　自然も　全く　融けてしまつて、
嗜欲の　燒ける　夢、
それが　きのふ　からの　現實で　あつた。

だらりと　延べた　からだ、
それに　あり餘るのは

曾て　求め得よう　とした　黄金の　光。
飽きに　飽きたのは、
旣に　求め得た　と思ふ　自己の　名譽。
そして、その光も　名譽も
亦　問題では　なかつた。

おのれの　そばに
おのれの　汗ばんだ　疲勞を　横たへた　影、
それを　見るだに、もう、
珍らしくも　ない　夜の　勝利品！

一人しか　愛は　たい――
その愛を　さへ　返り見ないで、
僕は　僕と　共に　目が　さめかけた
明け方の　蚊屋を　出て、

人工的な　にほひと　色彩と　の
ちらかつてる　小部屋の　雨戸を　一枚
物靜かに　くり明けた。

狹い　垣根の　中に、青々と
露を　帶びた　くさ木の　あひだを、
ぱツと　燃える　やうな　カンナの　大輪が　一つ、
寢ぼけた　まなこに、
ゆふべ　からの　情愛を　再現した。

『もう、澤山』と　思つたが、
涼しい　朝風に、
この　夜もすがら　置いてゐた　夜露を
初めて　胸　一杯に　吸ひ込んだ。

——（大正元年八月）——

淺草の女

敏ちやん、夜ツて 暗いもの、
電氣が ある ぢやア ないの？

活動寫眞 で 賑やかな 通り なんて、
晝間 よりやア あかるいで しよう。

田舍者 や 間抜けづら の 間を 縫つて、
あなた と 手を 引いて 歩いてる と、

電氣 の 光で 太陽 よりも 陽氣に
あなた の お顏 ばかりが 輝くわ。

ゆふべ　だツても、夜更けて　から　あなたと
あたしの　店さきで　羽根を　ついて　見せた、わ、ね。

それに、あの　書生ツぽが　また　生意氣にも　手紙を　よこし、
僕の　心は　夜　よりも　暗いツて、さ！

馬鹿、ね。人と　電氣の　都　だわ、――淺草の
公園　に　のぼる　月　を　見ると、

月　さへも　あかがね　の　色に　鈍つて、とても、
あなた　の　胸には　及びツこが　ないわ、ね。

あたしの　太陽に　逢へない　から　あたし、晝間は
いつも　悲しくツて、暗いんだ　もの！

人は夜だけならいいのに、ね、
電氣とあなたがあつて、陽氣で。

——(大正四年一月)——

犬の聲

わんわん、わんと
うちの犬の聲が聽えてゐた——
その聲に僕は親しみを懷いて、今、
有樂町の事務所で仕事最中だツた。

事務テブルの上には
深い靄がかかつて、濛々と
さへぎつてたのは僕の視線をだ。
その癖、太陽が
僕の頭上に輝いて、

僕の　腹の　中　までが　明るかつた。
僕は　智策を　めぐらして
事務上　の　命令を　いくつも　發し、
訪問客　に　對しては　また
それぞれ　適當な　應答を　して、
新妻を　喜ばせる　この　事業發展　の
報告材料　を　胸に　浮べた。

が、わん〳〵、わんと
うちの　犬の　聲が　聽えて　ゐた。
その聲　の　うへを　濛々たる　靄が　立ち籠めて、
僕の　視線は　さへぎられて　ゐた。
空想　では　ないか、
晝の夢　ではと　僕は　疑つた、

太陽 の 方(はう)が？ 然らざれば、かの
妻が 可愛がつてる 犬の 聲が？

わん〳〵、わん の 深靄(ふかもや)——
そして、赫々たる 太陽！

僕は 不思議で たまらなかつたが、
その ゆふがた、社が 引けて から、
山の手線 を 目黒で 降りた 時、
そこの 一名物 たる
海と 山と の 混合靄(こんがふもや) が
可なり 深い 谷あひを 閉ぢ籠めて
僕等の 家の 沈んでる
方向 さへも 分らなかつた。

その　底　から、
うちの　犬の　聲が　聽えた　やうだ、
わんく、わん！――これだ、な　と　思ひ、
僕は　それに　引かれて　目黑坂　を
何　よりも　親しい　氣持ちで　下りて　行つた。

僕は、そして、妻と　犬と　に　迎へられたが、
なほ　僕の　頭上(づじやう)　には
赫赫たる　太陽が　輝いて　ゐた。
そして　うちの　犬の　聲が、
吠えても　ゐないのに、
わんく、わんと　聽えて　ゐた。

――（大正四年二月）――

監獄の壁

朝から、僕は
監獄の壁を見てゐる。
夜になつても、亦、
監獄の赤い壁だ。

あまり廣がりの大きな壁を、
あまりに長い間のことであるので、
僕には、その壁が
巣鴨中に延び、
また東京中に渡つて、
赤いものであるかの印象を與へた。
そしてその赤い色は
僕のからだをめぐる血、
それを塗りこくつたやうに思へる。

市中で　安直に　販賣する　道德には。
高價な　血は　調合されて　ないが、
巢鴨　の　監獄に　閉ぢ込められた　不道德には、
野心や　嫉妬や　窮迫　から　來た　眞珠　の　やうな　眞相が　輝く。

僕も　その　壁　に　向つて、
或時は　泥棒——或時は　人殺し——
また　或時は　强姦、詐欺、
僞造　等　の　夢を　見て　から、
巢鴨は　僕の　世界で　あり。
監獄　の　壁は　僕の　皮膚、
僕の　胸廓　で　ある　ことが　分つた。

そして、朝　から　僕は
監獄　の　壁を　見て　ゐる。

夜に　なつても　亦、
監獄　の　赤い　壁だ。

――（大正四年二月）――

朽ち行く女

赫々たる　太陽の　中を、
こら、汝、淫婦よ（女　に　して
淫婦　ならぬ　ものが　あらうか？）
絹布　を　着て
ぬかるみ　に　ころがる　淫婦よ、
それか　女が　産んだ　女の　本性は？

ぬかるみ　の　中に　こそ
却つて　まことの　靈も　輝くを、
分離して　最も　親しく

思ひ知つた　か　（然し、既に　遲い！）
みだらな　合致の　而も　誠實な　征服に？

いのち　の　殘る　限り
ころがる　だけ　ころがれ！
その裾から　出る　汝の　裸體よ、
――恨み、怒り、復讐　の　念――
悔いる　だけ、もがく　だけ、
汝の　內容は
わが　太陽に　吸收さる。

太陽　の　使ひ　か、見よ、
どろに　まみれて　生きながら　朽ち行く
汝の　白い　かた足　を　つかんで、
三足　の　烏が　汝に　向けてる　のは

肉じき　の　口ばし　をだ！
征服　の　光りに　感謝せよ。
僕も　これほど
汝に　親しんだ　ことは　ない。
斯くも　かがやかしく
汝が　朽ち行けば　行く程、
僕に　滿ちるは　一しほ　誠實　の　力。

——（大正五年二月）——

すゐせん道化者

つつしみ深い　道化者か、なんぢ、
わざ〱　太陽　の　ひかり　の　薄い　時節に　生れ、
世界で　最も　日かげな　とこの間　の
つめたい　水盤　の　なかに　獨りで　寂しい　ほほゑみ？

誰れ　だツて　求めように　名譽　と　競爭　との　熱天　を！
誰れ　だツて　おもしろからうに　奮鬪　と　成敗　と　の　日なた　は！
誰れ　だツて、あたり前　の　社會　は！　然し　汝　だけは　全く、
へうきんにも　生れどき、生れ場所　を　違へて、云はば　隨分、
見よ、被造物　の　色　と　しても　香　と　しても、
廣い　世の中　に　不愉快　窮窟な　位置　を　占め――
內部は　赤く　熱してる　だらう　が　それを　見せぬ　木瓜　の　花　か、
それとも　心ちう　には　最も　派手に　棚引く　東臺　萬朶　の　雲を
　おもて向き
不遇　に　して――但し、消極的に　高尙がつた　隱者　では　ない。

なんぢ、つめたい　水盤　の　なかの　すゐせん、
一生　の　なみだ　をか　ここに　獨りで　その　香に　ほほゑむ　道化者
よ！

――(大正五年三月)――

蜜蜂の靈よ

蜜蜂 の 靈よ、―― 人間 だツて、
死後は 何も ないのに――まア、ある と してだ、
お前に おれ の 弔詞を 述べさせて 貰はう。

おれが お前 を 熱心に 飼育 したのは、何も、
女房 の 贅澤費 を 拵へる 爲めでは なかつた、
否、女房 の 好きな 一存で
あの男 に 渡させる 爲めでは なほ 更らだ。
ところが、お前を 下手に 預つて 飼ひ 殺した 男は
――ちやん ちやら、をかしい！――
それを 正義 だとか、人道 の 爲め とか云つて 來た
獨逸 や アメリカ の 耶蘇 よりも 一層 尤もらしい。

然し　まだ　お前　は仕合せ　で　あつた。
あの　男は　今や　お前　の　かはりに
おれの　子を　取り込んで、
無邪　幼稚　の　人間を　まで　飼ひ　殺しに　する爲め、
おれ　を　逆ねぢに　訴へ　ようと　してゐる。

——（大正五年四月）——

兎の憤激

鼻ぼくろ　の　哲學者よ、あまり
主人がほ　に　われを　無言だと　見て、
汝の　僞善　を　取り繕らふ　手段に　すな。

汝は、然し、燕　の　留守に　燕　の　巣に　這入り、
夜の　十二時　過ぎ　までも　話し込み、

早く 歸れよ がしに 取り 扱はれても、なほ
それを 自分に 對する 尊敬 と 思ふ ほど、
それ ほど 自信 の 深い 好人物 だ。

汝の 姪に 子を 生ませて、それが
既に 二十歳 前後 に なつてる とも 云はれるのに、
今 なほ 四十二三歳 の 友人に 一つ うへだ と云つて、
汝は 尤もらしく

汝の 五十づら の 皺を 鼻ぼくろ の 上に 寄せた。
そして 一たび 汝を 『先生』 と 呼んだ 若者は、
汝から 第一流 の 批評家 として 世に 紹介された。

既に お弟子 も あり、自信も あり、
奇蹟 の 子も あり、神秘 の ほくろも あり 汝の 羅曼主義、
功利主義 折衷 の 哲學 では あるが、

内容 には なほ 物足りぬ ところが あると 見えて、
——それも、出來そくなひ の 獨身者 としては 尤もだが、——
兎角、汝は 人の 亭主 の
明き巣 を ねらひたがる！

人の 見限つた 女を でも、この度 また、
欲しければ 貰つて やつても いい。
まだ 然し 籍が ぬけないのに、
わざ／＼ 離婚訴訟 の 渦中に 飛び込んで、
その女 の 旅さき 府中 までも 追ひ行き、
女の 家へは 行きたく ない からだと 惚けがほ。
そして、實は、どうだ？ 探偵の 報告 に 據ると、
『田中十無い』に 婦人 のやうな 聲を 出させて、
たび／＼ ほくろ の 鼻を のツそり
女の 門に 入れるのは、いつも

午後 の 九時 過ぎ からで ある。

汝、うすのろ の 哲學者 よ。
『世間 の 交際が うるさい から
兎(うさぎ) でも 飼つて』と、よくも、よくも、
汝の 無內容 と 頓痴氣(とんちき) とを 韜晦(とうくわい)する 爲め、
無言の 動物と あなどつて
主人がほに われを 踏み臺 に した！

――(大正五年八月)――

生活の寂しみ

『棄てたツて、また 歸つて 來るよ』
と、七歲の 子は 不平(ふへい)さうに 獨り言 を 云つた。
渠の 愛して ゐる エスを 僕は、今、
三度目に――今度は 僕自身で――棄てに 行くのだ、

『なアに、もう、歸つて　來やア　しない！』

かあい　さうだが　仕かたがない――
近處の　店の　貴えくさし　の　おそば　や
たま魚　の　腹わた　なぞを　喰はせられた　爲めに、
育ち盛り　を　成長した　のは　兩方の　耳　ばかり――
兄弟並み　の　半分　しか　延びぬ　からだに
ほそい　あばら骨　を　刻み付けて、
どす赤い　うんこを――たまつた　もの　では　無い――
臺どころ先き　や
折角　冬取り大根　の　種を　播いた
門内の　畑　や　に　仕散らかす　のだ　もの。

人に　見られても　見ツともない　犬　だと　云ふので、
僕は――日が　暮れて　から――

エスに　貳拾錢　の　運賃　を　拂つて、
山の手線　を　巣鴨　から　うぐひす谷　に　下りた。
そして　坂した　の　電信ばしら　に
わざと　切れ易い　ひもを　以つて　つなぐが　早いか、
逃げる　やうに
僕は　坂を　あがつて　行つた　ところ、
あとを　慕つて——さも　一杯に　らしい——
あはれに　泣く　その　きやん／＼　が
僕の　雨あし　に　まとひ付いて　困つた。

つき當り　の　公番まへ　を、何だか、
叱かられは　しないか　と云ふ　氣持ちで　曲り、
竹の臺　の　廣い　眞ツ直ぐな　道へ　出ると、
ガス　の　光り　を　籠めた　樹木の　暗い　蔭が
雨がは　から　おツかぶさつて　來ながらも、

なほ　それに　包み切れぬ　眞ン中　の　地上は
――それを　踏む　僕には――
向き出し　の　おそれ　で　あり、
また　新らしい　思ひ切り　の　力で　あつた。
追ツかけて　來る　小い　黑い　影が　ないか　と、
一、二度は――ぞツと　しながら――」
敵か　をんりやう　か　を　豫期して
後ろの　方を　ふり返つても　見たが、
三度　四度は　何でも　なかつた。

上野　の　廣小路　から
市内電車　で　歸つて　來た　時は、
七歲の　子は　何も　云はなかつた。然し、
少し　經てから　兒ども　と　話るのが　僕に　聽えた、
『お父さん　が　歸つた　から、もう、

エスも　しツぽ　を　振つて　歸り　さうな　ものだ』と。

僕は　ふと　僕の　ふる傷　を　思ひ出した、
そして　『どう　だらう
今　一度　この　三人の　子らを　棄てて　出たら？』
但し、あの時にも、僕が　純全に　生きる　必要上、
僕の　家庭　と　情愛と　を　犧牲　に　した。
そして　今回　また　エスを　棄てた　のも
あかい　粗相を　仕散らかす　爲め、否、否、
折角　芽の　出て來た　大根畑　を　きたなく　する　爲めだ！

——（大正五年十月）——

ラザロの姉妹マルタ

妻も、友人も、はた　仕事も、
すべて　僕に　手ごたへ　を　失つて、

生活の　寂しみ　を　最も　深く　感じた　時、
癩病　ラザロ　の　姉妹　マルタ　よ、
姉らしく　立ち働らく　透きとほつた　肌の　マルタ、
僕は　思ひ出す　汝の　きぬ　一重、
はだか　も　同様　正直な　燒き持ち　を。

汝の　利口な　妹　マリア　が　いつも、
抜けがけ　して　耶蘇　に　はんべり、
くつろぐ　耶蘇　の　足に　塗つた　ナダル油　を、
自分　の　房々した　髮の毛　で　ぬぐひ取り、
室內　に　廣がる　かをり　に　押し忍んだ　のは、——
信　も　愛だ、そして
愛は　をんな　には　戀　で　あるを！

透きとほる　肌　の　マルタ　よ、

汝が 歡迎 の 給事に『心 入り亂れ、』
主に 近づいて ナルダ の 滿ちた かをりに 胸を 轟かしつつ、
優しい 目に 見張つた のは 汝の きぬ も ぬげた 恨み、
『主よ、何とも 思はざる か、わが 妹
われを 獨り 殘して 働かしむる を』と。
憎い ほど 向き出しな 心の とろけ！
みだらな 夜中 で なかつた のが、否、夜中 の 握手 を
得なかつた のが 汝 一生 の 不仕合せ だ。
唐變木 耶蘇 は この 時にも
『マリアは 既に 善業を 選びたり』の 道學を 說いた。

叶はぬ 思ひは 私かに 敵を 養ふ と 云ふが、
汝には その後 までも 歸依心が あつた か、どうか？
耶蘇 の 張り附けられた 十字架 の もと、
また 石を 置かれた 墓場 など へ 集つた もの等の うちには。

兎に角、
數名　の　マリア　の　名は　書物に　出て　ゐるが、
マルタ　よ、汝の　だけ　は　一つも　見えて　ない！
歷史　その物　も　既に　無だ。
が、僕は　汝の　行くゑ　を　思ひ出す　たび　毎に、
——戀を　知らなかつた　と云ふ　救世主　など　どうでも　いい——
ただ　寂しい　肉　の　ふるえ　を　覺えないでは　ゐられない。
——（大正五年十二月）——

瀨戸の火鉢

あまりに　書齋が　寒い　ので、何も　考へは　まとまらない。
筆を　投げた　まま　獨り　僕は、
圓い　周圍が　ふくらんで　行つて　中の　方へ　突然
直角に　延びさがつた　火氣だもち　の　ある　瀨戸の　おほ火鉢に
雨の　肱を　かけて、

ふと 考へた こんな ことを——

なぜ 僕に 斯う 親しみ が あるのだ、
火氣を 遠巻き に して 保つ だけの こんな 物が？
どうも、その 中に かた炭 の
火が ある 爲め ばかり でも ない やうだ。
さきの 妻に 同じ 大きさ のを 取られて から、
これも 二代目の だが、然し
前後 の 妻 よりも 元來が つめたい
この 瀨戸に 僕の 心が 常に 引きつけられる！

しんかん と した 夜中 を、
あたま から 落ちて
火中に 小さく 燃々燒ける ものは 何か？
これが、乃ち、多年の 習慣で、

知らず　識らず
僕の　心を　火鉢に　引きつける　もの　だらう。

どこから　とも　なく
そら炷き　の　くゆり　か？　否、かんばしい
香水　の　かわき行く　にほひ　か？　否、否、
もツと、もツと　なつかしい
人間　の　血　の　固まつた　のを　あぶり燒き！

氣が　付くと、
相變らず　僕は　肱を　火鉢　の　ふちに　乘せた　まま、
かゆい　あたま　から
兩手で　頻りに　大きな　ふけ　を　かき落し、拂ひ落し、
その　燒ける　にほひ　を　嗅いで　ゐる。

――（大正六年四年）――

森ケ崎の朝

二三日 の うちに、
新たに 親しみ を 得た
古なじみ の 森ケ崎 である。

けふも、自宅に ゐる よりは 早く 起きて
一あび した 鑛泉 の あツたかみ、
その 違つた 勢ひを 樂しみつつ、今、
定められた 二階 の 坐敷 に 坐わつて
そとを ながめて ゐると、
僕を 呼び起して 呉れた 鳩が 一つがひ
曲り出た うへの 家根 の はづれに とまつて ゐて、
くう〳〵と しめやかに 鳴いてる の だが、

したの　トタン家根　から
日なたぼツこ　の　猫が　一匹
それを　頻りに　氣にして　狙つてる。

登つた　日は　見えないが
右の方　から　ゆツたりと　その光　を　さして、
正面の　海は
ぼうツと　一面に　靄で　うづまつてる。
そこに　眞ツ白な
蒸汽船　の　姿が　遠く　なり、
若しくは　小舟　の　帆かげ　が
ちらほら　なり　見えないと、
僕の心　は　まだ　全く　白紙　の　やうだ。
けれども、けふは　何となく
自分の　おほ仕事が　できる　確信が　あつた。

じツと　ゐ坐つて
白紙　の　やうな　海を　見つめてると、
目に　くツきり　立つてる
浪添ひ土手　の　これ　ばかり　かけ離れた　一つ松、
その　うへの　方から
帆かげ　が　そツと　現はれたが、
右へも　左りへも
夢　ばかり　だツて　動いて　ゐない。

いつのまにか　それへ
――左り　からも　右　からも――
數は　二つ　なり　三つ　なり
段々　寄つて　行く　同じ　かげ、
すべて　光線を　横ざまに　受けて

こちらへは　その　暗い　うらを　見せて　ゐる。
それらが　松の　あたり　を　目あて
すべて　ごツちやに　重なり合つた　ので、
多少　光ある　とぢ靄の　おもて　を
黒ずんだ　灰色の　森　が　浮んだ。

その　手前では、相變らず
つがひの　鳩が　ぽツぽと　鳴いて、
おほ家根　の　はづれ　を　離れては　また
直ぐ　その　はづれへ　とまつて　しまう。
したなる　だまり猫は　溜りかね
――家根　の　傾斜　を　あやぶみ　ながらも――
最後に　鳩の　飛びかげ　が　見えると、
屆きも　しない　のに
飛び付かう　と　したが　やめた。

風は　なく、
鐵瓶　の　湯　ばかりが　ちん〱　云つてる　森ケ崎、
一月　十八日　の　障子明けツ放し　の　朝は、
――からだ　も　いぢけないで――
僕が　筆を　取り初める　僞め
而も　引き締まつた　氣ぶん　で　あつた。

――(大正七年三月)――

外交政策

ヤンキイ　は　ヤンキイ　だ、
ロスケ　は　ロスケ　たらしめ　よ。
僕が　わが　國　の　行ふべき
外交放策　を　おぼへた　のは
市中　を　走る　電車　の　うへで　だ。

ふと　居ねむり　から　覺める　と、
反對　の　窓　に　もたれて
そと　を　ながめてる　小娘　が　あつた。
不思議　さうに　その　母　を　返り見て、
『おうち　が　皆　あと戻り　してる！』

『何を　云ひます』と、その　母は　たしなめた、
『電車　が　走つてる　の　です　よ。』

蓋し　進む　とは　置き去り　に　する　のだ
動かぬ　ものを、そして　また
反對に　進む　もの　を！

――（大正七年四月）――

植ゑ忘れた百合の赤芽

しツとり降る春さめにまんべんはない。
然し、その地をうるほす結果には
豫想通りのもあるし、また僕の意外なのも。
ひな菊は毎年のやうにその赤、白の小さな花を、
さくら草はまた相變らずそのちゞれた
もえぎ色の短い葉を、そして
僕が或友に貰つた鐵砲ゆりは
そのうるほひあるかしらを出した庭に、
思ひも寄らなかつたのは、詰り、何とかゆりで。
去年の秋の末に——もう、すがれ時だツたが、——
人の留守を尋ねたしるしとして
この一根を買つて歸つたのだけれども、
その後向ふからさたがないので、僕の心には
人をもそれをも植ゑ忘れてゐた。
まんべんなく降る春さめに今や

太い　赤い　芽が　二つ　も　出てゐる　のを　發見して、
僕は　その人　を　思ひ出す　と　同時に
その人　の　無挨拶　をも　許す　氣　に　なつた。
——(大正七年五月)——

胸の海

小さめが　あがつた、平らかな　海に　小さめが——
のり取り舟　も　たツた　一杯　だが、靜かに
自分　の　目の前　を　淺い　すなぞこ海　の　うへ、
右　から　左りへ　輕く　すべつて　行つた。

海　の　あなた　を　見渡す　と
陸に　平行した　みを　を　示めす　立て木、
それに　而も　一定の　飛び〳〵な　間隔　が　あつて
人　の　目を　少しも　妨げないで　見える　限り、

曇つた　そら　を
灰色　に　反映する　しほ光り　の　そと輪　よ。
自分　の　目ぢ　を　ずツと　遠く
遠巻き　に　巻く　多くの　帆かげ、
ぼんやり　と　列なつて
動きも　しないで　ただ　一列の　やうに　浮んで　ゐる。

その　帆の　長い　列と　立て木　との　あひだ　を
左り　から　右へ　無形の　一直線　を　ゑがいて、
その　うへを　四　五隻　の　汽船が
——一度に　兩方の　目で　見渡せぬ　程の　隔てを　置いて——
うすら黑い　けむり　を　あげて　ゐる　無言！
その　眞ン中　へ
下駄ばきで　乘り出した　自分は
傘　と　共に　耳を　すぼめて、ひそかに

なんだか　大きな　聲、
いや、小さいが　そこ深い　叫び　を
ただ　自分　ばかりが　聽いてる　やうな　こころ持ち。

その　聲は、後ろの　方で
小鳥　が　ちゆうちゆく　云ふ　それでも　ない。
山谷　の　方では　また
電車　の　音が　するが、それでも　ない。
左り　の　沖べ　から　鳴つた　汽笛、
品川　あたりの　製造場　から　時を　報ずる　ぶう、
どこからか　響き聽えた　子供　の　話し聲、
なんだらう　若し　それら　でも　ないと　すれば？

いちめんに　しめつた　高石垣　の、右手　四　五十間さき　の　鼻、
六郷川　の　川口　を　この　土堤　と　直角に

三枚帆の　船が　よこ帆　で　三杯も　現はれて
順々に　沖へ　出たが、その　船々　の　帆かげ
それが　また　順々に　自分　の　方へは
三本づつ　の　帆ばしら　と　しか　見えなく　なつても、
なほ　自分の　聴いてる　聲は　おもてへ　出ないで
自分　の　身うち　に　ばかり　内攻　してゐる。
そして　どこまでも　廣がつてる　海
それは　まことに　じれつたい　ほど　平らかで　靜かだ。

自分　の　突ツ立つ　目の前　なる　森ケ崎土堤　よ
申しわけ　の　やうに　寄せる　浪の　ひた〳〵、
それが　寧ろ　今の　自分　に　最も　近しい　やうだ。
いや、兵兒帶　に　挾んだ　懷中時計　の　ちくたく
その方　が　一層　自分を　近しく　どき付かせる！
さうだ、自分は　傘を　すぼめて　から　今まで

——三枚帆は　段々と　三本の　帆柱に　見えて　行つたが——
この　廣い　靜かな　海べ　に　立つて、
もツと、もツと　自分に　近い　或物を　待ちつつ
自分の　胸を、さうだ！　獨りで　浪うたせて　ゐるので　あつた。
——（大正八年一月）——

きりぎりす

門內　の　小ばたけ　に
胡瓜　や　茄子　の　無くなつた　晩秋　の　ゆふべ、
とまる　ところ　を　求めて、きりぎりす
ぽつねんと
——但し、饑ゑ　に　濃える　物乞ひ——
玄關さき　の　敷き石　に　來て
その　ほのほ　も　細る　翡翠　の　羽ぶるひ、
なほ　切れぎれに　いのち　を　ちやん—ちやん—ぎいッ！

敷き石 の うへに きりぎりす、
つめたい 石 の うへに、
もう 飛ぶ ちからも 失せて、ただ 獨り、
この 秋 の 日 を 消え行く 生に 對して、
その かすれた 聲は 然し 最後 の 雄たけび！

——（大正八年八月）——

日光

山は 高く、樹木 は 繁り、
星あかり をも 黑めてる 日光 に 來て、
たまたま 天皇陛下 の
おそばもと に 在る ありがたさ よ、
離宮 ばかり は
水氣を 多分な 夜ぞら をも 照らして、

白晝 と 輝く 多數の 電燭光！
僕は 沈思默考 の 窓 に 倚つて
それに 吸收せられ、
それを 吸收しつつ 自分も 亦、
ありがたや、この ちからが 胸 一杯
日本的 政道 人道 の 福音 を、
さうだ、世界 に 宣揚する！

中禪寺湖

あけがた には 濃いむらさき を、
そして ゆふがた には 黑ずんだ
藍 を 流す 中禪寺 の 湖水よ。
天 に 近く、
四方 の 山々 に 持ち上げられてれ ば こそ、

つき夜 の 頂き に 放つ 金色の 光り
男體、ふたら富士 が 威壓する
三百餘尺 の 深さ ある 重み をも、
さうだ、この 湖水 は 大きく たたへてる！
その ただ中 を 僕は 夜、月 に 小ぶね
ぽつねんと 浮かんで、
浪 ばかり ひた〱 の 靜けさ に
天地 の 平均 を 呼び沸かす、自己 の
獨存 合致 の 力 を 感じ得た。

――（大正八年九月）――

今の詩界

印刷された 回覽雜誌 ばかり 出る
現今の 詩界 と 云ふ はたけ へ、たま〱
氣まぐれな 丹頂 の 鶴 が 下りて、

その　口ばし　を　したに　向けて　云ふ　には、——
『おい、田舍初段　の　詩人氣取りら　よ、
カペンタ　や　トラウベル　の　やうな　ヘツぽこ詩人を　でも
流行思想　に　かぶれる　爲め　には
われ勝ちに　擔ぎ出さねば　ならない　の　か？
いや、ホイトマン　を　でも　だ、おい、——
どう　受けて　いい　かも　知らないで？
お前ら　の　リズム　など　には、
さうだ、無形にも　ありも　しない　リズム　に、
民衆思想　なんて　うわツつら　の　言葉　で——
世間見ず　の　愚鈍さ、不敏さ、
斯う　云ふ　おれ　の　一と聲　さへ
豚　に　玉　を　投げ與へる　やうな　ものだ！』

こやしの臭ひ

眞夏の 午後、
ふんどし 一つで 僕 は
菊 と カンナ と に こやし を やつた。
そして 緣がは に よつて
その にほひ を かいでる と、
自分 が 地上 に もえ出させよう と する
藝術 の すがた が 豫想 された。

藝術上 の 道學者ら は
遠慮なく はだか を さける が よからう、
鼻 を つまめよ また 間違つた 唯美主義者ども！
僕 の 創作 は
天上 の 完成 では ない、
くさい にほひ に 育つ 地上の かをり、
こやし を 絕やせば

直ぐ　しをれて　行く　赤や　黄　の　花だ。

——（大正八年十月）——

ゆふ燒けの富士を遠く

ゆふ燒け　の　富士　を　遠く
脊なか　に　して　臨む　六鄉　の　川ぐち、
海　の　向ふ　から
一抹　に　消えて　行く　のは　穴森、
羽根田　の　薄く　かすれた　出鼻。
靜かな　浪　と　共に
そこぐらい　誰そがれ　が　押し寄せて　來て、
こちら　の　高い　石垣土堤　の　すそ、
小舟　の　うへで
まる木　の　魚　を　取りつつ　あつた　漁師　に
世間ばなし　を　し向けて　ゐた　僕は、

いつのまにか、自分 ばかり に なつて しまつた。

――（大正年八十二月）――

太陽よ

その 勢ひ かく〳〵たる とき、ああ、太陽！
なんぢ は 力づよく あまり まばゆくて
かたち は 見えず、
心 の 奥 まで あまねき 光り その物 で あつた
いや、その 光りたる を とほり越し、
この 天地 を 時々 刻々に 創造する
融化 と 綜合 その物 で あつた。
今や、大海 の はづれ に ただよつて
大きな 赤の玉 と 色取られて 見ると、ああ、
他の 萬有 とは 分離して、全く
一つの ゆふ日 その物 では ないか！

ああ、太陽よ、これ
なんぢの死を告げるのか、それとも、
僕ら人間をただ眞ツくらの
ちぎれちぎれに見限つて行くのか？
——（大正九年三月）——

泡鳴全集第九卷終

大正十年五月十五日印刷
大正十年五月二十日發行

泡鳴全集第九卷

（非賣品）

著作權所有

著作者　岩野美衞

發行者　國民圖書株式會社代表者
中塚榮次郎
東京市麴町區內幸町一丁目六番地

印刷者　井波修次郎
東京市神田區三崎町二丁目三番地

發行所
東京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話新橋一二七番
振替東京五二二九八番

印刷所　國民圖書株式會社印刷所

（製本　佃製本所）